

(本学における開講授業科目等)

第4条 教育職員免許状の授与に必要な授業科目について、教育職員免許法および教育職員免許法施行規則等の関係法令に基づいて、次の通り定める。

教科に関する科目

①中学校教諭一種免許状（社会）

表A - 1

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
日本史及び外国史	日本史	2		
	世界史	2		
地理学（地誌を含む。）	地理学	2		地誌を含む
「法律学、政治学」	法学	2		
	政治学	2		
	国際関係論		2	
「社会学、経済学」	社会学	2		
	家族社会学	2		
	経済学	2		
	社会調査法	2		
	社会保障論Ⅰ	2		
	社会保障論Ⅱ	2		
	国際福祉論		2	
「哲学、倫理学、宗教学」	宗教学	2		
	倫理学	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員の免許状取得のための必修科目 26 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

②高等学校教諭一種免許状（公民）

表 A - 2

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
「法律学（国際法を含む。）、 政治学（国際政治を含む。）」	法学	2		国際法を含む
	政治学	2		国際政治を含む
	民族と国家	2		
	国際関係論		2	
「社会学、経済学（国際経済を 含む。）」	社会学	2		
	家族社会学	2		
	経済学	2		国際経済を含む
	社会調査法	2		
	社会保障論Ⅰ	2		
	社会保障論Ⅱ	2		
	国際福祉論		2	
「哲学、倫理学、宗教学、 心理学」	宗教学	2		
	倫理学	2		
	心理学	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員免許状取得のための必修科目 24 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

③高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 A - 3

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
社会福祉学(職業指導を含む。)	社会福祉学総論Ⅰ	2		
	社会福祉学総論Ⅱ	2		
	就労支援	1		職業指導を含む
高齢者福祉、児童福祉及び 障害者福祉	高齢者福祉論Ⅰ	2		
	高齢者福祉論Ⅱ	2		
	児童・家庭福祉論	2		
	児童・家庭福祉論詳説		2	
	障害者福祉論	2		
	障害者福祉論詳説		2	
社会福祉援助技術	ソーシャルワークⅠ	2		
	ソーシャルワークⅡ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅰ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅱ	2		
	ソーシャルワーク演習Ⅲ	1		
介護理論及び介護技術	介護技術	1		
	介護福祉論	1		
社会福祉総合実習（社会福祉 援助実習及び社会福祉施設等 における介護実習を含む。)	ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	1		
	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	2		
	ソーシャルワーク実習	4		
人体構造及び日常生活行動に 関する理解	人体の機能と日常生活	2		
加齢及び障害に関する理解	加齢・障害の理解	2		
教員の免許状取得のための 最低修得単位数 20 単位	教員の免許状取得のための必修科目 35 単位 〃 選択科目 4 単位			最低必要単位数を超えて修得した単位 は、「教科又は教職に関する科目」の単 位数として使用することができる。

教職に関する科目

中学校教諭一種免許状（社会）

高等学校教諭一種免許状（公民）

高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 B

免許法施行規則に定める科目区分等				左記に対応する開設授業科目			備考
科目	各科目に含める必要事項	中学 一種 免許	高校 一種 免許	授業科目	単位数		
					必修	選択	
教職の意義等に関する科目	・ 教職の意義及び教員の役割 ・ 教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。） ・ 進路選択に資する各種の機会の提供等	2	2	教職概論	2		
教育の基礎理論に関する科目	・ 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	6	6	教育原理	2		
	・ 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）			学習心理学	2		
				発達心理学	2		
				教育心理学	2		
				・ 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項	教育社会学	2	
教育課程及び指導法に関する科目	・ 教育課程の意義及び編成の方法	12	6	教育課程論	2		
	・ 各教科の指導法			社会科教育法Ⅰ		2	中免(社会)は必修
				社会科教育法Ⅱ		2	
				公民科教育法Ⅰ		2	高免(公民)は必修
				公民科教育法Ⅱ		2	
				福祉科教育法Ⅰ		2	高免(福祉)は必修
	福祉科教育法Ⅱ				2		
	・ 道徳の指導法			道徳教育の指導法	2		中免のみ
	・ 特別活動の指導法			特別活動の指導法	2		
・ 教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）	教育方法と技術	2					
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	・ 生徒指導の理論及び方法 ・ 進路指導の理論及び方法	4	4	生徒指導論	2		
	・ 教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法			教育相談	2		
教育実習		5	3	教育実習指導	1		
				教育実習Ⅰ	2		
				教育実習Ⅱ		2	中免（社会）は必修
教職実践演習		2	2	教職実践演習（中・高）	2		
教員の免許状取得のための最低修得単位数 中免（社会）31単位 高免（公民）23単位 高免（福祉）23単位				修得単位数 （選択必修科目の単位数を含む） 中免（社会）35単位 高免（公民）31単位 高免（福祉）31単位			最低必要単位数を超えて修得した単位は、「教科又は教職に関する科目」の単位数として使用することができる。

教科又は教職に関する科目

表 C

中学校教諭一種免許状（社会）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて6単位以上修得

高等学校教諭一種免許状（公民）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて14単位以上修得

高等学校教諭一種免許状（福祉）

免許法施行規則に定める 科目区分	授業科目	単位数		履修方法
		必	選	
教科又は教職に関する科目	福祉マインド実践講座	2		「教科又は教職に関する科目」の選択科目 又は 最低修得単位を超えて履修した「教科に関する科目」若しくは「教職に関する科目」について、併せて14単位以上修得

特別支援教育に関する科目

特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者・肢体不自由者）

表D

免許法施行規則に定める科目区分		単位数	左記に対応する開設授業科目		備考	
			授業科目	単位数		
				必修		選択
特別支援教育の基礎理論に関する科目		2	障害児教育論	2		
特別支援教育領域に関する科目	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目	16	知的障害者の心理	2		
			知的障害者の生理・病理	2		
			肢体不自由者の心理	2		
			肢体不自由者の生理・病理	2		
	知的障害児教育Ⅰ		2			
	知的障害児教育Ⅱ		2			
	肢体不自由児教育Ⅰ		2			
・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目	肢体不自由児教育Ⅱ	2				
免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目	5	障害児の心理・生理・病理	2		
	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目		病弱教育論	1		
	・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目		視覚障害者指導法	1		
			聴覚障害者指導法	1		
			L D・A D H D等教育総論	1	言語・情緒・L D・A D H D	
			重複障害者教育指導法	1	重複・言語	
心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習		3	特別支援教育実習指導	1	事前事後指導含む	
			特別支援教育実習	2		
教員の免許状取得のための最低修得単位数 26 単位		28 単位				

その他文部科学省令に定める科目（教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目）

中学校教諭一種免許状（社会）

高等学校教諭一種免許状（公民）

高等学校教諭一種免許状（福祉）

表 E

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
日本国憲法	日本国憲法	2		
体育	球技スポーツ		1	5科目より 2科目選択必修
	スポーツ・コミュニケーション		1	
	アドベンチャー・スポーツ		1	
	スキー・スポーツ		1	
	スノーボード・スポーツ		1	
外国語コミュニケーション	英語コミュニケーション		2	2科目より 1科目選択必修
	実用英語		2	
情報機器の操作	コンピュータ・リテラシー	2		
教員の免許状取得のための最低修得単位数 8単位	必修4単位 選択必修4単位 合計8単位			

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	日本史	副題	
担 当 者	田中 達実		
開講期	半期	単位数	2
		配当年次	1
授業の概要	日本の歴史を概観して、日本という国がどのように生まれ、成長してきたのか、また、国際社会とどのような交流・接触を経てきたのかを学びます。		
授業のねらい・到達目標	日本史の知識を深めるとともに、中等教育で扱う歴史的事項を理解します。		
授業の方法・授業計画			
1	日本文化のあけぼの		
2	ヤマト政権の誕生		
3	律令国家の形成		
4	平安時代の貴族政治		
5	中世社会の成立		
6	武家社会の成長		
7	幕藩体制の確立		
8	幕藩体制の展開と動揺		
9	近代国家の成立		
10	近代日本とアジア		
11	大正デモクラシーと恐慌の時代		
12	軍部の台頭と第2次世界大戦		
13	占領時代の日本		
14	朝鮮戦争と主権回復		
15	高度経済成長と経済大国への道		
期末	試験実施		
評価方法及び評価基準	学期末試験の結果に、授業への参加姿勢を加味します。		
事前・事後学習の内容	開講時に配付する講義プリントで、次回の講義内容を把握しておくこと。 受講後は、講義の内容を整理して、疑問点があれば、つぎの講義で質問すること。		
履修上の注意	プリントを配付します。		
テキスト	授業で指示します。		
－			
－			
参考文献	必要に応じて、授業で紹介します。		

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	世界史		副題		
担 当 者	田中 達実				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	各地域の文化圏の成立と発展を概観し、近代国民国家の形成と国際社会の成立課程を学びます。そして、21世紀の世界が抱える問題について考察して行きます。				
授業のねらい・到達目標	主権国家間の対立や民族・宗教対立発生の歴史的背景を学ぶことにより、その解決への糸口を考えます。				
授業の方法・授業計画					
1	世界史の時代区分				
2	古代の世界1(オリエントと地中海世界)				
3	古代の世界2(アジア・アメリカの古典文明)				
4	中世の世界1(西ヨーロッパの封建社会)				
5	中世の世界2(イスラム世界の発展)				
6	近代ヨーロッパの成立と発展				
7	ヨーロッパ主権国家体制の展開				
8	近代国民国家の成長と発展				
9	アジア帝国の発展と動揺				
10	帝国主義時代の世界				
11	2つの世界大戦				
12	戦後世界と東西対立				
13	多極化と国際経済の危機				
14	社会主義国家の崩壊と地域紛争				
15	21世紀の課題				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	学期末試験の結果に授業への参加姿勢を加味します。				
事前・事後学習の内容	開講時に配付する講義プリントで、次回の講義内容を把握しておくこと。 受講後は、講義の内容を整理して、疑問点があれば、つぎの講義で質問すること。				
履修上の注意	プリントを配付します。				
テキスト	特になし。				
—					
—					
参考文献	必要に応じて、授業で紹介します。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	地理学		副題		
担 当 者	一柳 武				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	地理学は、人間と自然環境との関わりを学ぶ。「地理学」の授業では、地表面における人間の存在や活動のあり方を、資源、産業、人口、文化などの視点から考察、また、その地域的特色や空間的構造をとらえることにある。この授業では、高等学校で「地理A・B」を履修していなくても理解できるような平易なトピックを題材にして、日本や世界の地域の現状を学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	中学校社会科教員として基本的な地理的知識を身につける。地理的事象に興味・関心をもち、人間と自然環境との関わりや地域夜文化の違いを理解できるようになることが目標である。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 「地理学」とは？				
2	生活舞台としての地球1 地球 地球の大きさ 地球儀				
3	生活舞台としての地球2 方位 対蹠点 世界の時間 地域区分 国家とは？				
4	人種と民族1 人種とは 民族とは				
5	人種と民族2 民族と宗教				
6	人口問題1 人口問題とは 産業別人口構成				
7	人口問題2 人口ピラミッドの作成 年齢別人口構成 日本の人口				
8	エネルギー資源、鉱産資源と産業				
9	環境問題				
10	グローバリゼーション				
11	東南アジアとアフリカ				
12	ヨーロッパ				
13	アメリカ				
14	日本と東京				
15	まとめ 授業評価と自己評価				
期末	試験実施なし				
講義中心					
評価方法 及び評価基準	レポート 毎授業ごとの提出物:50点 最終レポート:50点				
事前・事後 学習の内容	・ 授業計画にて講義内容を確認し、テキストの該当部分を見て、下調べをする。 ・ 講義内容を整理し、中学校社会科教員として基本的な知識の定着をはかり、人間と自然環境との関わりを考 察する。				
履修上の注意	毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を出すので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。 最終レポートは、テキストの中から課すので、テキストは必ず購入すること。				
テキスト	現代地図帳 二宮書店 2015-2016				
－					
－					
参考文献					

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	法学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	「社会あるところに法あり」と言われるように、「法」は人間の社会生活の根源的要素です。我が国は、法治国家であり、「法」の重要性は、人間の社会生活のあらゆる場面において、ますます強まっていけばかりです。 そこで、本講義では、下記の「1～7」で法の全体像を学び、下記の「8～15」で法の実在像を修得することにより、法的思考力を身につけることに向けて勉学を進めます。				
授業のねらい・到達目標	授業概要参照のこと。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の概念				
3	法の目的				
4	法の効力				
5	法の分類				
6	法源				
7	権利と義務				
8	憲法				
9	民事法				
10	刑事法				
11	行政法				
12	教育に関する法				
13	福祉に関する法				
14	環境に関する法				
15	国際法				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行います。					
評価方法及び評価基準	期末課題、小レポートやコメントシート、授業内の活動での得点を総合的に勘案し評価します。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してください。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてください。				
履修上の注意	授業の際、必ずテキストを持参してください。法に関する科学の総称である「法学」を学ぶことによって一層の自己研鑽に励むのだとの熱意をもって、本科目に取り組むことを期待しています。				
テキスト	江頭 憲治郎他『平成27年版 ポケット六法』(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	政治学		副題		
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	人は、時に協力し時に対立して社会を形成してきた。政治の主な機能は「社会の利害調整」であるといわれる。この講義では、政治学の基礎的概念を学習し、現代の日本社会や国際社会に対する理解を深め、同時に社会問題に対する観察眼を養うことを目的とする。 授業では政治学の基礎知識と今日の日本の政治や国際政治について学習する。また政治が関わる具体的な社会問題を逐次取り上げ、検討する。				
授業のねらい・到達目標	受講学生には、政治学の基礎的概念を学ぶことで政治意識を高め、現代社会や国際社会に対する関心・理解を深めることを期待する。				
授業の方法・授業計画					
1	政治とは何か				
2	政治と権力				
3	民主主義				
4	議会政治の歴史と国会				
5	政治制度－議院内閣制と大統領制				
6	政党政治と選挙				
7	圧力団体、マスコミ				
8	地方自治				
9	官僚制				
10	現代政治の課題－行政国家、福祉国家				
11	国際連合と国際協力				
12	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(1)－冷戦の起源と展開				
13	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(2)－冷戦後の国際社会				
14	国家とナショナリズム				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。授業終了時にその回の内容についての小テストを行う。					
評価方法及び評価基準	授業内小テストの合計点により評価する。				
事前・事後学習の内容	ニュースや新聞に目を通し、授業に関わる内容を把握すること。 配布プリントを活用し、予習復習をすること。				
履修上の注意	欠席をするとその回の小テストは受けられない。				
テキスト	なし。				
－					
－					
参考文献	必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	国際関係論		副題		
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「国際関係論」は戦争と平和の問題を扱う総合的な学問といえるだろう。本講義では、国際社会における国家、集団、個人が織りなす政治的・経済的・法的、さらには文化的諸関係などの今日的構造を考察するとともに、これらの歴史的事実を分析することに主眼を置く。国際政治・経済の構造を検討し、日本と諸外国との個別の関係をとり上げ考察する。				
授業のねらい・到達目標	国際政治や国際経済などの社会科学的方法を主としながら、文化論的・歴史学的アプローチを取り入れ、今日の国際社会の諸相を多角的に考察する視点を養う。				
授業の方法・授業計画					
1	国家・民族・「グローバリゼーション」				
2	19世紀の世界―「産業革命」・近代化・植民地				
3	20世紀の世界―資本主義・社会主義				
4	米ソ冷戦からポスト冷戦へ				
5	事例1―朝鮮戦争				
6	事例2―ベトナム戦争				
7	地域紛争への視角				
8	地域紛争の現状				
9	事例検討				
10	テロリズム				
11	第二次大戦後の世界と日本				
12	日米関係				
13	日本と東アジア①―近代以降の関係史				
14	日本と東アジア②―今日の政治的関係				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。					
評価方法及び評価基準	授業内の小テストやリアクションペーパーの合計を50%、レポートを50%とする。				
事前・事後学習の内容	ニュースや新聞に目を通し、授業に関わる内容を把握すること。 配布プリントを活用し、予習復習をすること。				
履修上の注意	「政治学」「民族と国家」の内容を踏まえた授業を行う。これら科目を履修していることが望ましい。				
テキスト	なし。				
－					
－					
参考文献	必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	社会学		副題	現代社会の理論	
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本科の目的は、現代社会への理解を深めることにある。具体的には、社会学の研究分野の一つである現代社会論についての知見を学び、現代社会の存立構造、「現代」を成り立たせる諸特徴について、いくつかの具体的な事例を取り上げて考察していく。				
授業のねらい・到達目標	社会学を学ぶことを通じて、人間と社会についての知見を増やすこと、また客観的なものの見方・考え方を身に付けることをねらいとする。				
授業の方法・授業計画					
1	1. 社会学の学び方 一個人、集団、組織、システム、構造、シンボリック社会論などー				
2	2. 経済のグローバル化と社会変動				
3	3. 地域共同体と家族の変容				
4	4. 雇用の変化と労働状況				
5	5. 若者と仕事				
6	6. 格差社会としての日本				
7	7. 無縁社会の縁の見かた				
8	8. 生きがいと高齢者				
9	9. 少子・高齢社会の行方				
10	10. 家族の役割変化と単身社会				
11	11. 社会的排除と貧困				
12	12. 包摂と社会的排除の課題				
13	13. 価値と道德の基準				
14	14. 総括：現代社会論				
15	15. 総括：社会変動論				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	定期試験50%、クラス内小テスト50%の割合にて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	・テキストは必ず予習しておくこと。予習では、①著者の論点(言いたいこと)②どんな研究法・資料が用いられているか③あなたが興味・関心を持った箇所はどこか④知らない言葉を調べておく、などの検討、作業を行うと良い。				
履修上の注意	・「でんでんぱん」にて資料配布するので必要に応じてプリントアウトして教室に持参すること。 ・クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。				
テキスト	今泉礼右『変動期の社会学』みらい				
－					
－					
参考文献	浜嶋朗他 『社会学小事典』 有斐閣 見田宗介 『現代社会の理論』 岩波 ほか、必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	家族社会学		副題		
担 当 者	石川 円				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	どんな人でも「家族」のなかに生まれ、育ち、暮らしています。しかし、その構造や形式、関係性は多種多様です。また人が成長するように、「家族」もさまざまな影響を受けながら、変わっていきます。 あなたが当たり前のように思っている「家族」のイメージは、隣にいる人のそれとは大きく異なるかもしれません。「家族」について一緒に考えてみましょう。				
授業のねらい・到達目標	「家族」は、子ども、高齢者、障害のある人、すべての人々にとって、最も身近な集団です。しかし、家族が問題を抱えると、解きほぐすのは容易ではありません。一体、「家族」とは何なのでしょう？ 本講義では、社会福祉に必要な不可欠である「家族」に社会学的視点からアプローチします。家族に関する基本概念を学ぶとともに、ライフステージで起こりうる家族の関係性の変容や問題を多面的に考察できるようになることをめざします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション:「家族」を「社会学」するとはどういうこと？				
2	家族規範の成立と変容:「家族」のイメージはどのように形成されたか？				
3	家族の変化と家族関係:ライフステージにおける「家族」				
4	家族に介入する社会:メディアの発達と「家族」				
5	結婚とパートナー関係:晩婚・非婚、配偶者の選択、夫婦別姓について				
6	育児と子育て支援(1):子育て支援の展開(共働き世帯と子ども)				
7	育児と子育て支援(2):子育て支援の展開(専業主婦への支援へ)				
8	ひとり親家族:夫婦の離婚と子育てについて				
9	子どものジェンダー形成:「家族」のあり方と子どもの成長について				
10	障害のある人と家族(1):障害のある子どもとその家族について				
11	障害のある人と家族(2):障害のある人の暮らしについて				
12	医療技術の発達と家族:専門機関と「家族」の関係について				
13	「老い」と家族(1):介護の担い手について				
14	「老い」と家族(2):看取りの場について				
15	まとめ				
期末	試験はしない				
配布するレジュメや資料をもとに、講義形式で授業を進める。					
評価方法及び評価基準	講義時のミニレポート40%、期末レポート60%				
事前・事後学習の内容	＜事前学習＞講義の最後に次回について予告し、課題を提示する。 ＜事後学習＞配布したレジュメや資料を読み返して授業内容を整理し、取り上げたテーマや問題について、各自学習を深める。				
履修上の注意	私語は厳禁。				
テキスト	なし				
－					
－					
参考文献	講義内容にそった文献をその都度、紹介する。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	経済学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日常生活を取り巻く経済現象を理解するために必要な経済学の基礎概念に対する理解を深めます。その上で、個人や企業といった経済主体がどのように行動し、モノの値段はどのように決定されるのかといったミクロ経済学の基本を学びます。また、景気変動や失業率増加とその対策といったマクロ経済学の考え方を学びます。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、第一に経済学の基礎概念の学習を通じて経済問題への興味をもつこと、第二に日本社会の現状に対する理解を深めること、そして第三にグローバル化が進む中で国際社会に対する関心を高めることを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	経済学とは何か				
3	市場と競争-総論				
4	市場と競争2-各論				
5	市場の失敗-総論				
6	市場の失敗2-各論				
7	競争と戦略				
8	企業経済				
9	日本経済				
10	マクロ経済とは				
11	財政と金融-総論				
12	財政と金融2-各論				
13	国際経済-総論				
14	国際経済2-各論				
15	経済社会の展望				
期末	試験実施				
講義を中心に、適宜、演習や視聴覚教材を取り入れます。					
評価方法及び評価基準	期末試験による評価を中心に、授業への貢献状況などを鑑みて総合評価します。				
事前・事後学習の内容	日ごろからネットやテレビなどの情報を活用しながら、経済について自分で考える姿勢を身に付けるように努めてください。				
履修上の注意					
テキスト					
—					
—					
参考文献	授業時に適宜指示します。				

2015/03/26(木)19:08

科 目 名	社会調査法		副題		
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	社会調査の基礎理論ならびに技法について紹介する。具体的には、社会調査の歴史、量的・質的調査法、また福祉や教育の現場でよく用いられる事例研究、観察、生活史法などについて学ぶ。また、レポートや卒論で調査研究を進めるためのステップについても学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	社会調査法を学ぶことを通じて、人間と社会についての問いかけを、科学的・客観的に行えるようになること。そして、社会調査についての概念や用語を理解することで、社会調査ならびにその結果の賢い消費者になること。以上の二つがこの科目のねらい、もしくは目標である。				
授業の方法・授業計画					
1	社会調査とはなにか				
2	社会調査の歴史				
3	量的調査と質的調査				
4	事例研究法				
5	観察法				
6	面接法				
7	生活史法				
8	統計的調査法				
9	調査課題と対象				
10	調査票				
11	実施と倫理				
12	調査研究の進め方：調査課題の決定				
13	調査研究の進め方：調査法の選択				
14	調査研究の進め方：計画書の作成				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	定期試験50％、クラス内小テスト50％の割合にて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	・前回までの講義内容の理解を前提として講義は進められる。したがって、事後学習が大切である。				
履修上の注意	・「でんでんぱん」にて資料配布等を行うので必要に応じてプリントアウトし講義に持参すること。 ・クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。				
テキスト	なし				
—					
—					
参考文献	浜嶋朗他 『社会学小事典』 有斐閣 原純輔他 『社会調査』 日本放送出版協会 根本博司他 『初めて学ぶ人のための社会福祉調査』 中央法規				

2015/03/26(木)19:09

科 目 名	社会保障論I		副題	社会福祉の沿革	
担 当 者	建守 善之				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	講義では社会保障制度の基本的な仕組みと概要及び特徴について学ぶ。社会福祉の実践において、支援を行うために必要な社会保険(医療、年金、雇用、労災、介護)についても事例をもとに学ぶ。				
授業のねらい ・到達目標	・授業のねらい ソーシャルワーカーとして業務を行うために必要な社会保障の内容について理解する。 個人と社会の関係や社会はなぜ個人の生きるを保障するのかを理解する。 ・到達目標 社会保障制度の基本的な仕組みと特徴を理解し、相談援助場面で活用することが可能となる。				
授業の方法・授業計画					
1	社会保障を学ぶ意義				
2	社会保障の内容				
3	社会保障の歴史 海外 イギリスを中心に				
4	社会保障の歴史 海外 その他の国				
5	社会保障の歴史 日本 戦前				
6	社会保障の歴史 日本 戦後				
7	講義の振り返り 確認テスト				
8	医療保険制度 概要				
9	医療保険制度 保険者				
10	医療保険制度 高額療養費				
11	授業の振り返り 確認テスト				
12	生活保護制度 原理 原則				
13	生活保護制度 保護基準と種類				
14	社会福祉制度 障害者に関する福祉				
15	社会福祉制度 路上生活者				
期末	試験				
講義を中心に行う。					
評価方法 及び評価基準	授業態度50%(減点は私語や居眠り等)、試験50%の基準。				
事前・事後 学習の内容	事前学習については、授業計画を参考に予習を欠かさないこと。確認テストを複数回実施するので、講義後は、社会保障全体の体系の中で理解を確認すること。				
履修上の注意	遅刻厳禁。私語や授業態度等、講義中に複数回指摘した学生には退室を求める。				
テキスト	社会保障(新・社会福祉士養成講座) 中央法規			978-4-89795-123-2	
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:09

科 目 名	社会保障論II		副題	現代社会における社会保障制度の課題	
担 当 者	建守 善之				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	講義では社会保障制度の基本的な仕組みと概要及び特徴を学ぶ。特に、社会福祉の実践において支援を行うために必要な社会保険(医療、年金、雇用、労災、介護)について事例をもとに学ぶ。				
授業のねらい ・到達目標	・授業のねらい ソーシャルワーカーとして業務を行うために必要な社会保障の内容について理解する。 個人と社会の関係や社会はなぜ個人の生きるを保障するのかを理解する。 ・到達目標 社会保障制度の基本的な仕組みと特徴を理解し、実際の相談援助場面で活用することが可能となる				
授業の方法・授業計画					
1	介護保険制度 概要				
2	介護保険制度 被保険者と申請方法				
3	介護保険制度 サービスの種類				
4	介護保険制度 低所得者施策				
5	授業の振り返り 確認テスト				
6	年金制度 老齢年金				
7	年金制度 障害年金				
8	年金制度 遺族年金				
9	授業の振り返り 確認テスト				
10	雇用保険制度				
11	労働者災害補償保険制度 労働基準法との整合性について				
12	労働者災害補償保険制度 補償内容について				
13	授業の振り返り 確認テスト				
14	民間保険				
15	社会保障財政				
期末	試験				
講義を中心に行う。					
評価方法 及び評価基準	授業態度50%(減点は私語や居眠り等)、試験50%の基準。				
事前・事後 学習の内容	事前学習については、授業計画を参考に予習を欠かさないこと。確認テストを複数回実施するので、講義後は、社会保障全体の体系の中で理解を確認すること。				
履修上の注意	遅刻厳禁。私語や授業態度等、講義中に複数回指摘した学生には退室を求める。				
テキスト	社会保障(新・社会福祉士養成講座) 中央法規			978-4-89795-123-2	
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:09

科 目 名	国際福祉論/国際福祉論II		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	<p>グローバリゼーションの進行に伴い、ヒト・モノ・カネ・情報は国境を越えて移動し、世界の国々の経済的・社会的な相互依存関係は高まりをみせている。また、「福祉国家」の恩恵を享受する人々が存在する一方で、現在、地球上で飢えに苦しむ人は、今世紀初頭に上に苦しんだ人の数より遥かに多いという。</p> <p>国境を越えて取り組まなければ緩和・解決されない福祉課題が顕在化するなか、国家を軸に社会的な権利と保護を得てきた個人に対し、国際社会福祉は何をなしうるのか、いくつかの具体的な取り組みに触れつつ、授業を通じて皆で考えていきたい。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>国際福祉論Ⅰでの学びを土台に、「国際社会福祉とは何か」、その概念、範疇、課題について理解する。世界の人々がおかれた状況や課題に対する、先進国および途上国の福祉制度を知る。さらには国境を越えた取り組みを学び、国際福祉領域とその役割への理解を深めることを講義の目的とする。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション ―グローバル化と国際社会福祉へのニーズ				
2	国際社会福祉とは何か ―「国際社会福祉」の概念と範疇				
3	国際社会福祉と格差 ―現状把握				
4	国際社会福祉と格差 ―原因と課題				
5	国際社会福祉と国際協力（援助）				
6	国際社会福祉と貿易				
7	国際福祉と難民・避難民				
8	国際社会福祉と人の移動				
9	国際社会福祉と一課題を考える ―政府・市民・企業				
10	国際社会福祉と国境を越えた取り組み ―EU				
11	国際社会福祉と国境を越えた取り組み ―アジア				
12	国際社会福祉と内なる国際化 ―現状把握				
13	国際社会福祉と内なる国際化 ―社会福祉・社会保障				
14	国際社会福祉とグローバルガバナンス				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	授業中の提出物や期末レポートを考慮して、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	社会問題や国際問題に興味をもって、日々のニュースや新聞等から学ぶこと。授業で課題が出された場合には、次の授業までに行うこと。授業で学んだことの復習を行うこと。				
履修上の注意	国際福祉論Ⅰを受講済みであることが望ましい。私語は厳禁とする。				
テキスト					
―					
―					
参考文献	参考文献や資料は適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:09

科 目 名	宗教学		副題		
担 当 者	江島 尚俊				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この授業では、宗教学に関する基礎的な知識を身につけるとともに、現代日本にあふれている宗教的な事象を取り上げながら、宗教学的な見方を学んでいきます。				
授業のねらい・到達目標	この授業を通して学べる／獲得できる具体的な点としては、以下のものがある。 (1) 宗教学的な基礎知識及び関心を持つことができるようになる。 (2) 宗教に対して、客観的な見識を身に付けることができるようになる。 (3) 様々な事象に宗教的要素が含まれていることを学ぶことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション ― 宗教に対する「見方」(＝宗教学)を学ぶ				
2	宗教のおこり ― ギリシャ神話の世界				
3	アニミズム的世界観とは何か？				
4	自然と宗教				
5	世界の主な宗教① 神道における日本の創世神話				
6	世界の主な宗教② 仏教における多元的世界				
7	世界の主な宗教③ 仏教における福祉思想と福祉事業				
8	世界の主な宗教④ 『聖書』にみる世界創造				
9	世界の主な宗教⑤ キリスト教会の役割を学ぶ				
10	世界の主な宗教⑥ イスラームの思想と歴史				
11	一神教的な思考と世界観				
12	現代社会と宗教文化				
13	現代社会における宗教の捉え方 ― 宗教学的に映画を視聴してみる				
14	国際社会における宗教の多様性				
15	宗教学とは何か ― すべての総括として宗教学の全体像を再考する				
期末	レポート				
評価方法及び評価基準	授業への積極的参加(20%) 授業後のリアクションペーパー(30%) 期末レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	毎回の授業ごとに指示する。				
履修上の注意	私語は厳禁。				
テキスト	授業中に資料を配布する。				
―					
―					
参考文献	櫻井義秀・三木英編著『よくわかる宗教社会学』(ミネルヴァ書房、2007年) 井上順孝『現代社会の宗教社会学』(世界思想社、1994年)				

2015/03/26(木)19:09

科 目 名	倫理学		副題		
担 当 者	富永 健太郎				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本講義は、おもに倫理学(道徳哲学)に関心のある学生と教職課程に進む学生を対象としている。高校の倫理を経て、倫理学を、古今東西の著名な哲学者の難解な教理・教説を有無を言わず暗記させられる学問だと考えてきた学生にとって、倫理学は忌避すべき科目の一番手に挙がるかもしれない。だが、それはおそらく誤解である。倫理学とは、同時代の私たちの社会生活と密接にかかわる倫理的課題を対象として、その規範的根拠について自ら考えるおよそ実践的な学問である。今年度は、社会福祉の古典的テキストである糸賀一雄らの著作を手がかりに倫理とは何かを問いながら、援助関係とそのあり方について考察する。				
授業のねらい・到達目標	倫理学の課題となる具体的な問題を概念的に把握し、推論や論証を行うことによって、妥当な結論を導く能力を習得することを到達目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	導入 倫理学を学ぶにあたって				
2	精神薄弱といわれる人びと① まちがった常識ほか				
3	精神薄弱といわれる人びと② 社会の道徳性、精神薄弱児の道徳教育				
4	社会福祉の基本① 人間の価値観				
5	社会福祉の基本② 福祉における積極性				
6	権利思想の形成① 国民の権利意識のめばえ				
7	権利思想の形成② 児童の福祉の権利、教育をうける権利				
8	障害者の生きがい① 福祉の対策ほか				
9	障害者の生きがい② リハビリテーションほか				
10	精神薄弱者の施設における「療育」について				
11	重症心身障害児の対策				
12	発達保障の考え方① 重症児対策の基本的態度				
13	発達保障の考え方② 重症児の自己実現と親の育ち				
14	地域福祉のなかで				
15	総括 愛と共感の教育				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	学年末レポートの結果に、授業時に提出されたコメントカードの得点を加算して評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、講義前にテキストの該当部分を熟読しておくこと。さらに、十分な復習をして知識の定着を図ること。				
履修上の注意	講義では受講者に質問をし、自分の考えを発表していただく。抽象度の高い議論を展開するので、あらかじめテキストの指定箇所を熟読しておくこと。				
テキスト	糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会			4-14-001067-3	
—					
—					
参考文献	糸賀一雄『糸賀一雄の最後の講義—愛と共感の教育—』中川書店 同 『復刊 この子らを世の光に 近江学園二十年の願い』日本放送出版協会 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店 木村素衛『教育学の根本問題』信濃教育会				

2015/03/26(木)19:10

科 目 名	法学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	「社会あるところに法あり」と言われるように、「法」は人間の社会生活の根源的要素です。我が国は、法治国家であり、「法」の重要性は、人間の社会生活のあらゆる場面において、ますます強まっていけばかりです。 そこで、本講義では、下記の「1～7」で法の全体像を学び、下記の「8～15」で法の実在像を修得することにより、法的思考力を身につけることに向けて勉学を進めます。				
授業のねらい・到達目標	授業概要参照のこと。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の概念				
3	法の目的				
4	法の効力				
5	法の分類				
6	法源				
7	権利と義務				
8	憲法				
9	民事法				
10	刑事法				
11	行政法				
12	教育に関する法				
13	福祉に関する法				
14	環境に関する法				
15	国際法				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行います。					
評価方法及び評価基準	期末課題、小レポートやコメントシート、授業内の活動での得点を総合的に勘案し評価します。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してください。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてください。				
履修上の注意	授業の際、必ずテキストを持参してください。法に関する科学の総称である「法学」を学ぶことによって一層の自己研鑽に励むのだとの熱意をもって、本科目に取り組むことを期待しています。				
テキスト	江頭 憲治郎他『平成27年版 ポケット六法』(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:10

科 目 名	政治学		副題		
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	人は、時に協力し時に対立して社会を形成してきた。政治の主な機能は「社会の利害調整」であるといわれる。この講義では、政治学の基礎的概念を学習し、現代の日本社会や国際社会に対する理解を深め、同時に社会問題に対する観察眼を養うことを目的とする。 授業では政治学の基礎知識と今日の日本の政治や国際政治について学習する。また政治が関わる具体的な社会問題を逐次取り上げ、検討する。				
授業のねらい・到達目標	受講学生には、政治学の基礎的概念を学ぶことで政治意識を高め、現代社会や国際社会に対する関心・理解を深めることを期待する。				
授業の方法・授業計画					
1	政治とは何か				
2	政治と権力				
3	民主主義				
4	議会政治の歴史と国会				
5	政治制度－議院内閣制と大統領制				
6	政党政治と選挙				
7	圧力団体、マスコミ				
8	地方自治				
9	官僚制				
10	現代政治の課題－行政国家、福祉国家				
11	国際連合と国際協力				
12	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(1)－冷戦の起源と展開				
13	米ソ冷戦と冷戦後の国際社会(2)－冷戦後の国際社会				
14	国家とナショナリズム				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。授業終了時にその回の内容についての小テストを行う。					
評価方法及び評価基準	授業内小テストの合計点により評価する。				
事前・事後学習の内容	ニュースや新聞に目を通し、授業に関わる内容を把握すること。 配布プリントを活用し、予習復習をすること。				
履修上の注意	欠席をするとその回の小テストは受けられない。				
テキスト	なし。				
－					
－					
参考文献	必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:10

科 目 名	民族と国家		副題	日本と東アジアの国々	
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	日本は、古来より近隣アジア諸国と密接な関係にあった。ことに近代以降の東アジア諸国との対外関係は、今なお外交上、そして人々の心理上、大きな影響を与え続けている。この講義では、東アジアの地理、歴史、社会及び国家間の関係を理解し、現代の東アジアに対する観察眼を養うことを目的とする。近代帝国主義の萌芽期から現代までを範囲として、日本を含む東アジア諸地域の地理、歴史、社会を概観しながら、日本が当地域、特に植民地として統治した台湾、朝鮮半島とどのように関わってきたかを検討し、東アジア地域に対する理解へとつなげる。				
授業のねらい・到達目標	受講学生には、近代以降の東アジアを含む歴史の流れを理解し、今日の日本と東アジア地域に対する関心と観察眼を持つことを期待する。				
授業の方法・授業計画					
1	アジアとは				
2	欧米のアジア進出				
3	朝貢体制とアヘン戦争				
4	日本開国				
5	日朝関係の歴史と日清戦争				
6	日露戦争と「韓国併合」				
7	日本の朝鮮植民統治				
8	在日朝鮮・韓国人をめぐる問題				
9	冷戦と朝鮮半島				
10	現代の朝鮮半島				
11	台湾の歴史と社会				
12	日本の台湾植民統治(1)－台湾総督府の政策				
13	日本の台湾植民統治(2)－台湾社会の変容				
14	現代の台湾				
15	現代の東アジア				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。					
評価方法及び評価基準	授業内の小テストやリアクションペーパーの合計を50%、レポートを50%とする。				
事前・事後学習の内容	ニュースや新聞に目を通し、授業に関わる内容を把握すること。 配布プリントを活用し、予習復習をすること。				
履修上の注意	欠席をすると、その回の小テストは受けられない。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:10

科 目 名	国際関係論		副題		
担 当 者	藤森 智子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「国際関係論」は戦争と平和の問題を扱う総合的な学問といえるだろう。本講義では、国際社会における国家、集団、個々人が織りなす政治的・経済的・法的、さらには文化的諸関係などの今日的構造を考察するとともに、これらの歴史的事態を分析することに主眼を置く。国際政治・経済の構造を検討し、日本と諸外国との個別の関係をとり上げ考察する。				
授業のねらい・到達目標	国際政治や国際経済などの社会科学的方法を主としながら、文化論的・歴史学的アプローチを取り入れ、今日の国際社会の諸相を多角的に考察する視点を養う。				
授業の方法・授業計画					
1	国家・民族・「グローバリゼーション」				
2	19世紀の世界―「産業革命」・近代化・植民地				
3	20世紀の世界―資本主義・社会主義				
4	米ソ冷戦からポスト冷戦へ				
5	事例1―朝鮮戦争				
6	事例2―ベトナム戦争				
7	地域紛争への視角				
8	地域紛争の現状				
9	事例検討				
10	テロリズム				
11	第二次大戦後の世界と日本				
12	日米関係				
13	日本と東アジア①―近代以降の関係史				
14	日本と東アジア②―今日の政治的関係				
15	総括				
期末	試験実施なし				
毎回プリントを配布する。					
評価方法及び評価基準	授業内の小テストやリアクションペーパーの合計を50%、レポートを50%とする。				
事前・事後学習の内容	ニュースや新聞に目を通し、授業に関わる内容を把握すること。 配布プリントを活用し、予習復習をすること。				
履修上の注意	「政治学」「民族と国家」の内容を踏まえた授業を行う。これら科目を履修していることが望ましい。				
テキスト	なし。				
―					
―					
参考文献	必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:10

科 目 名	社会学		副題	現代社会の理論	
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本科の目的は、現代社会への理解を深めることにある。具体的には、社会学の研究分野の一つである現代社会論についての知見を学び、現代社会の存立構造、「現代」を成り立たせる諸特徴について、いくつかの具体的な事例を取り上げて考察していく。				
授業のねらい・到達目標	社会学を学ぶことを通じて、人間と社会についての知見を増やすこと、また客観的なものの見方・考え方を身に付けることをねらいとする。				
授業の方法・授業計画					
1	1. 社会学の学び方 一個人、集団、組織、システム、構造、シンボリック社会論などー				
2	2. 経済のグローバル化と社会変動				
3	3. 地域共同体と家族の変容				
4	4. 雇用の変化と労働状況				
5	5. 若者と仕事				
6	6. 格差社会としての日本				
7	7. 無縁社会の縁の見かた				
8	8. 生きがいと高齢者				
9	9. 少子・高齢社会の行方				
10	10. 家族の役割変化と単身社会				
11	11. 社会的排除と貧困				
12	12. 包摂と社会的排除の課題				
13	13. 価値と道德の基準				
14	14. 総括：現代社会論				
15	15. 総括：社会変動論				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	定期試験50%、クラス内小テスト50%の割合にて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	・テキストは必ず予習しておくこと。予習では、①著者の論点(言いたいこと)②どんな研究法・資料が用いられているか③あなたが興味・関心を持った箇所はどこか④知らない言葉を調べておく、などの検討、作業を行うと良い。				
履修上の注意	・「でんでんぱん」にて資料配布するので必要に応じてプリントアウトして教室に持参すること。 ・クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。				
テキスト	今泉礼右『変動期の社会学』みらい				
－					
－					
参考文献	浜嶋朗他 『社会学小事典』 有斐閣 見田宗介 『現代社会の理論』 岩波 ほか、必要に応じて指示する。				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	家族社会学		副題		
担 当 者	石川 円				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	どんな人でも「家族」のなかに生まれ、育ち、暮らしています。しかし、その構造や形式、関係性は多種多様です。また人が成長するように、「家族」もさまざまな影響を受けながら、変わっていきます。 あなたが当たり前のように思っている「家族」のイメージは、隣にいる人のそれとは大きく異なるかもしれません。「家族」について一緒に考えてみましょう。				
授業のねらい・到達目標	「家族」は、子ども、高齢者、障害のある人、すべての人々にとって、最も身近な集団です。しかし、家族が問題を抱えると、解きほぐすのは容易ではありません。一体、「家族」とは何なのでしょう？ 本講義では、社会福祉に必要な不可欠である「家族」に社会学的視点からアプローチします。家族に関する基本概念を学ぶとともに、ライフステージで起こりうる家族の関係性の変容や問題を多面的に考察できるようになることをめざします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション:「家族」を「社会学」するとはどういうこと？				
2	家族規範の成立と変容:「家族」のイメージはどのように形成されたか？				
3	家族の変化と家族関係:ライフステージにおける「家族」				
4	家族に介入する社会:メディアの発達と「家族」				
5	結婚とパートナー関係:晩婚・非婚、配偶者の選択、夫婦別姓について				
6	育児と子育て支援(1):子育て支援の展開(共働き世帯と子ども)				
7	育児と子育て支援(2):子育て支援の展開(専業主婦への支援へ)				
8	ひとり親家族:夫婦の離婚と子育てについて				
9	子どものジェンダー形成:「家族」のあり方と子どもの成長について				
10	障害のある人と家族(1):障害のある子どもとその家族について				
11	障害のある人と家族(2):障害のある人の暮らしについて				
12	医療技術の発達と家族:専門機関と「家族」の関係について				
13	「老い」と家族(1):介護の担い手について				
14	「老い」と家族(2):看取りの場について				
15	まとめ				
期末	試験はしない				
配布するレジュメや資料をもとに、講義形式で授業を進める。					
評価方法及び評価基準	講義時のミニレポート40%、期末レポート60%				
事前・事後学習の内容	＜事前学習＞講義の最後に次回について予告し、課題を提示する。 ＜事後学習＞配布したレジュメや資料を読み返して授業内容を整理し、取り上げたテーマや問題について、各自学習を深める。				
履修上の注意	私語は厳禁。				
テキスト	なし				
—					
—					
参考文献	講義内容にそった文献をその都度、紹介する。				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	経済学		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日常生活を取り巻く経済現象を理解するために必要な経済学の基礎概念に対する理解を深めます。その上で、個人や企業といった経済主体がどのように行動し、モノの値段はどのように決定されるのかといったミクロ経済学の基本を学びます。また、景気変動や失業率増加とその対策といったマクロ経済学の考え方を学びます。				
授業のねらい・到達目標	本講義では、第一に経済学の基礎概念の学習を通じて経済問題への興味をもつこと、第二に日本社会の現状に対する理解を深めること、そして第三にグローバル化が進む中で国際社会に対する関心を高めることを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	経済学とは何か				
3	市場と競争-総論				
4	市場と競争2-各論				
5	市場の失敗-総論				
6	市場の失敗2-各論				
7	競争と戦略				
8	企業経済				
9	日本経済				
10	マクロ経済とは				
11	財政と金融-総論				
12	財政と金融2-各論				
13	国際経済-総論				
14	国際経済2-各論				
15	経済社会の展望				
期末	試験実施				
講義を中心に、適宜、演習や視聴覚教材を取り入れます。					
評価方法及び評価基準	期末試験による評価を中心に、授業への貢献状況などを鑑みて総合評価します。				
事前・事後学習の内容	日ごろからネットやテレビなどの情報を活用しながら、経済について自分で考える姿勢を身に付けるように努めてください。				
履修上の注意					
テキスト					
—					
—					
参考文献	授業時に適宜指示します。				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	社会調査法		副題		
担 当 者	藤原 亮一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	社会調査の基礎理論ならびに技法について紹介する。具体的には、社会調査の歴史、量的・質的調査法、また福祉や教育の現場でよく用いられる事例研究、観察、生活史法などについて学ぶ。また、レポートや卒論で調査研究を進めるためのステップについても学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	社会調査法を学ぶことを通じて、人間と社会についての問いかけを、科学的・客観的に行えるようになること。そして、社会調査についての概念や用語を理解することで、社会調査ならびにその結果の賢い消費者になること。以上の二つがこの科目のねらい、もしくは目標である。				
授業の方法・授業計画					
1	社会調査とはなにか				
2	社会調査の歴史				
3	量的調査と質的調査				
4	事例研究法				
5	観察法				
6	面接法				
7	生活史法				
8	統計的調査法				
9	調査課題と対象				
10	調査票				
11	実施と倫理				
12	調査研究の進め方：調査課題の決定				
13	調査研究の進め方：調査法の選択				
14	調査研究の進め方：計画書の作成				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	定期試験50％、クラス内小テスト50％の割合にて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	・前回までの講義内容の理解を前提として講義は進められる。したがって、事後学習が大切である。				
履修上の注意	・「でんでんぱん」にて資料配布等を行うので必要に応じてプリントアウトし講義に持参すること。 ・クラス内小テストは不定期で複数回行うものとする。				
テキスト	なし				
—					
—					
参考文献	浜嶋朗他 『社会学小事典』 有斐閣 原純輔他 『社会調査』 日本放送出版協会 根本博司他 『初めて学ぶ人のための社会福祉調査』 中央法規				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	社会保障論I		副題	社会福祉の沿革	
担 当 者	建守 善之				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	講義では社会保障制度の基本的な仕組みと概要及び特徴について学ぶ。社会福祉の実践において、支援を行うために必要な社会保険(医療、年金、雇用、労災、介護)についても事例をもとに学ぶ。				
授業のねらい ・到達目標	・授業のねらい ソーシャルワーカーとして業務を行うために必要な社会保障の内容について理解する。 個人と社会の関係や社会はなぜ個人の生きるを保障するのかを理解する。 ・到達目標 社会保障制度の基本的な仕組みと特徴を理解し、相談援助場面で活用することが可能となる。				
授業の方法・授業計画					
1	社会保障を学ぶ意義				
2	社会保障の内容				
3	社会保障の歴史 海外 イギリスを中心に				
4	社会保障の歴史 海外 その他の国				
5	社会保障の歴史 日本 戦前				
6	社会保障の歴史 日本 戦後				
7	講義の振り返り 確認テスト				
8	医療保険制度 概要				
9	医療保険制度 保険者				
10	医療保険制度 高額療養費				
11	授業の振り返り 確認テスト				
12	生活保護制度 原理 原則				
13	生活保護制度 保護基準と種類				
14	社会福祉制度 障害者に関する福祉				
15	社会福祉制度 路上生活者				
期末	試験				
講義を中心に行う。					
評価方法 及び評価基準	授業態度50%(減点は私語や居眠り等)、試験50%の基準。				
事前・事後 学習の内容	事前学習については、授業計画を参考に予習を欠かさないこと。確認テストを複数回実施するので、講義後は、社会保障全体の体系の中で理解を確認すること。				
履修上の注意	遅刻厳禁。私語や授業態度等、講義中に複数回指摘した学生には退室を求める。				
テキスト	社会保障(新・社会福祉士養成講座) 中央法規			978-4-89795-123-2	
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	社会保障論II		副題	現代社会における社会保障制度の課題	
担 当 者	建守 善之				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	講義では社会保障制度の基本的な仕組みと概要及び特徴を学ぶ。特に、社会福祉の実践において支援を行うために必要な社会保険(医療、年金、雇用、労災、介護)について事例をもとに学ぶ。				
授業のねらい ・到達目標	・授業のねらい ソーシャルワーカーとして業務を行うために必要な社会保障の内容について理解する。 個人と社会の関係や社会はなぜ個人の生きるを保障するのかを理解する。 ・到達目標 社会保障制度の基本的な仕組みと特徴を理解し、実際の相談援助場面で活用することが可能となる				
授業の方法・授業計画					
1	介護保険制度 概要				
2	介護保険制度 被保険者と申請方法				
3	介護保険制度 サービスの種類				
4	介護保険制度 低所得者施策				
5	授業の振り返り 確認テスト				
6	年金制度 老齢年金				
7	年金制度 障害年金				
8	年金制度 遺族年金				
9	授業の振り返り 確認テスト				
10	雇用保険制度				
11	労働者災害補償保険制度 労働基準法との整合性について				
12	労働者災害補償保険制度 補償内容について				
13	授業の振り返り 確認テスト				
14	民間保険				
15	社会保障財政				
期末	試験				
講義を中心に行う。					
評価方法 及び評価基準	授業態度50%(減点は私語や居眠り等)、試験50%の基準。				
事前・事後 学習の内容	事前学習については、授業計画を参考に予習を欠かさないこと。確認テストを複数回実施するので、講義後は、社会保障全体の体系の中で理解を確認すること。				
履修上の注意	遅刻厳禁。私語や授業態度等、講義中に複数回指摘した学生には退室を求める。				
テキスト	社会保障(新・社会福祉士養成講座) 中央法規			978-4-89795-123-2	
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	国際福祉論/国際福祉論II		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	<p>グローバリゼーションの進行に伴い、ヒト・モノ・カネ・情報は国境を越えて移動し、世界の国々の経済的・社会的な相互依存関係は高まりをみせている。また、「福祉国家」の恩恵を享受する人々が存在する一方で、現在、地球上で飢えに苦しむ人は、今世紀初頭に上に苦しんだ人の数より遥かに多いという。</p> <p>国境を越えて取り組まなければ緩和・解決されない福祉課題が顕在化するなか、国家を軸に社会的な権利と保護を得てきた個人に対し、国際社会福祉は何をなしうるのか、いくつかの具体的な取り組みに触れつつ、授業を通じて皆で考えていきたい。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>国際福祉論Ⅰでの学びを土台に、「国際社会福祉とは何か」、その概念、範疇、課題について理解する。世界の人々がおかれた状況や課題に対する、先進国および途上国の福祉制度を知る。さらには国境を越えた取り組みを学び、国際福祉領域とその役割への理解を深めることを講義の目的とする。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーションーグローバル化と国際社会福祉へのニーズ				
2	国際社会福祉とは何かー「国際社会福祉」の概念と範疇				
3	国際社会福祉と格差ー現状把握				
4	国際社会福祉と格差ー原因と課題				
5	国際社会福祉と国際協力（援助）				
6	国際社会福祉と貿易				
7	国際福祉と難民・避難民				
8	国際社会福祉と人の移動				
9	国際社会福祉と一課題を考えるー政府・市民・企業				
10	国際社会福祉と国境を越えた取り組みーEU				
11	国際社会福祉と国境を越えた取り組みーアジア				
12	国際社会福祉と内なる国際化ー現状把握				
13	国際社会福祉と内なる国際化ー社会福祉・社会保障				
14	国際社会福祉とグローバルガバナンス				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	授業中の提出物や期末レポートを考慮して、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	社会問題や国際問題に興味をもって、日々のニュースや新聞等から学ぶこと。授業で課題が出された場合には、次の授業までに行うこと。授業で学んだことの復習を行うこと。				
履修上の注意	国際福祉論Ⅰを受講済みであることが望ましい。私語は厳禁とする。				
テキスト					
ー					
ー					
参考文献	参考文献や資料は適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	宗教学		副題		
担 当 者	江島 尚俊				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この授業では、宗教学に関する基礎的な知識を身につけるとともに、現代日本にあふれている宗教的な事象を取り上げながら、宗教学的な見方を学んでいきます。				
授業のねらい・到達目標	この授業を通して学べる／獲得できる具体的な点としては、以下のものがある。 (1) 宗教学的な基礎知識及び関心を持つことができるようになる。 (2) 宗教に対して、客観的な見識を身に付けることができるようになる。 (3) 様々な事象に宗教的要素が含まれていることを学ぶことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション ― 宗教に対する「見方」(＝宗教学)を学ぶ				
2	宗教のおこり ― ギリシャ神話の世界				
3	アニミズム的世界観とは何か？				
4	自然と宗教				
5	世界の主な宗教① 神道における日本の創世神話				
6	世界の主な宗教② 仏教における多元的世界				
7	世界の主な宗教③ 仏教における福祉思想と福祉事業				
8	世界の主な宗教④ 『聖書』にみる世界創造				
9	世界の主な宗教⑤ キリスト教会の役割を学ぶ				
10	世界の主な宗教⑥ イスラームの思想と歴史				
11	一神教的な思考と世界観				
12	現代社会と宗教文化				
13	現代社会における宗教の捉え方 ― 宗教学的に映画を視聴してみる				
14	国際社会における宗教の多様性				
15	宗教学とは何か ― すべての総括として宗教学の全体像を再考する				
期末	レポート				
評価方法及び評価基準	授業への積極的参加(20%) 授業後のリアクションペーパー(30%) 期末レポート(50%)				
事前・事後学習の内容	毎回の授業ごとに指示する。				
履修上の注意	私語は厳禁。				
テキスト	授業中に資料を配布する。				
―					
―					
参考文献	櫻井義秀・三木英編著『よくわかる宗教社会学』(ミネルヴァ書房、2007年) 井上順孝『現代社会の宗教社会学』(世界思想社、1994年)				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	倫理学		副題		
担 当 者	富永 健太郎				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本講義は、おもに倫理学(道徳哲学)に関心のある学生と教職課程に進む学生を対象としている。高校の倫理を経て、倫理学を、古今東西の著名な哲学者の難解な教理・教説を有無を言わず暗記させられる学問だと考えてきた学生にとって、倫理学は忌避すべき科目の一番手に挙がるかもしれない。だが、それはおそらく誤解である。倫理学とは、同時代の私たちの社会生活と密接にかかわる倫理的課題を対象として、その規範的根拠について自ら考えるおよそ実践的な学問である。今年度は、社会福祉の古典的テキストである糸賀一雄らの著作を手がかりに倫理とは何かを問いながら、援助関係とそのあり方について考察する。				
授業のねらい・到達目標	倫理学の課題となる具体的な問題を概念的に把握し、推論や論証を行うことによって、妥当な結論を導く能力を習得することを到達目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	導入 倫理学を学ぶにあたって				
2	精神薄弱といわれる人びと① まちがった常識ほか				
3	精神薄弱といわれる人びと② 社会の道徳性、精神薄弱児の道徳教育				
4	社会福祉の基本① 人間の価値観				
5	社会福祉の基本② 福祉における積極性				
6	権利思想の形成① 国民の権利意識のめばえ				
7	権利思想の形成② 児童の福祉の権利、教育をうける権利				
8	障害者の生きがい① 福祉の対策ほか				
9	障害者の生きがい② リハビリテーションほか				
10	精神薄弱者の施設における「療育」について				
11	重症心身障害児の対策				
12	発達保障の考え方① 重症児対策の基本的態度				
13	発達保障の考え方② 重症児の自己実現と親の育ち				
14	地域福祉のなかで				
15	総括 愛と共感の教育				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	学年末レポートの結果に、授業時に提出されたコメントカードの得点を加算して評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、講義前にテキストの該当部分を熟読しておくこと。さらに、十分な復習をして知識の定着を図ること。				
履修上の注意	講義では受講者に質問をし、自分の考えを発表していただく。抽象度の高い議論を展開するので、あらかじめテキストの指定箇所を熟読しておくこと。				
テキスト	糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会			4-14-001067-3	
—					
—					
参考文献	糸賀一雄『糸賀一雄の最後の講義—愛と共感の教育—』中川書店 同 『復刊 この子らを世の光に 近江学園二十年の願い』日本放送出版協会 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店 木村素衛『教育学の根本問題』信濃教育会				

2015/03/26(木)19:11

科 目 名	心理学	副題	
担 当 者	本多 潤子		
開講期	半期	単位数	2
		配当年次	1
授業の概要	感覚と知覚の心理、学習と思考の心理、社会における人間関係などの「心のしくみ」に関する内容から、心の発達、ストレスとメンタルヘルスなど、環境に適応していくうえで、心がどのように役立っているのかといった、「心と適応」に関する内容まで、学生が心理学の大枠を理解し、興味を深めることができるように、現代的なトピックスを交えながら解説していく。		
授業のねらい・到達目標	はじめて心理学を学ぶ人が、心理学の概要を理解できるようにする。 心理学とは何を学ぶ学問であるかを理解し、心理学全般にわたる知識を修得する。		
授業の方法・授業計画			
1	はじめにー心理学とは		
2	心の進化		
3	心の発達		
4	ライフサイクル		
5	感覚・知覚		
6	記憶		
7	学習1:学習とは何か		
8	学習2:連合学習と観察学習		
9	社会の中の人1:社会的影響と対人認知		
10	社会の中の人2:協調と信頼		
11	ストレスとメンタルヘルス1:ストレスとは何か		
12	ストレスとメンタルヘルス2:心理病理はなぜ起こるか		
13	カウンセリングと心理療法1:精神分析療法		
14	カウンセリングと心理療法2:学習理論と行動療法		
15	まとめ		
期末	試験実施		
授業は主として講義形式で行う。簡単な実習課題を行うこともある。また理解度を確認するために小テストを実施する。			
評価方法及び評価基準	ショートレポート、期末試験によって総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	心を理解するとはどういうことか、常日頃から考える。授業計画に基づき、教科書を読んでおく。授業後は、授業内で指摘されたポイントを中心に復習する。		
履修上の注意	教科書を必ず持参すること。		
テキスト	『はじめて出会う心理学』長谷川寿一・東條正城・大島 尚・丹野義彦・廣中直行 (有斐閣アルマ)	978-4-641-12345-8	
—			
—			
参考文献	授業中に指示する。		

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	社会福祉学総論I		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	この授業では、現代社会における社会福祉の意義、福祉政策の課題、社会福祉の歴史的展開、社会福祉の基底にある理念や思想、等について概観する。 なお、理念や理論の話から授業をはじめると、内容が抽象的であるため、多くの学生諸君にとって「とっつきにくい」ということがしばしば起こる。そこで、この授業では、まず社会福祉の歴史を概観し、それから理論や概念の話につなげていく、という工夫を試みる。				
授業のねらい・到達目標	上の「授業の概要」に記したような事項を検討することを通じ、社会福祉の原理や歴史に関して、包括的かつ体系的な認識を獲得することを目指す。目標を達成できたか否かは、期末試験によって確認する。				
授業の方法・授業計画					
1	この授業の主題				
2	社会福祉のはじまり				
3	近代的な社会福祉への転換				
4	福祉国家への歩み(1) イギリス				
5	福祉国家への歩み(2) ドイツ、アメリカ、スウェーデン				
6	福祉国家の諸相				
7	福祉国家の揺らぎ				
8	グローバリゼーションと社会福祉				
9	各国の社会福祉の動向				
10	日本の近代化と慈善事業				
11	社会事業の時代				
12	戦後日本の社会福祉				
13	福祉改革の行方				
14	社会福祉の現代的課題				
15	この授業で何を学んできたのか				
期末	試験実施				
プリントを配布した上で、板書による要点の解説を中心とした講義を行う。					
評価方法及び評価基準	期末試験(95%)、および授業中に実施する小試験(5%)の得点の合計により評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で講義内容を確認した上で、授業に臨むこと。 授業後は十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	基本的なルールを守れない学生に対しては、厳しく対応する。				
テキスト	『精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー 4 社会福祉原論 ― 現代社会と福祉』 へるす出版				ISBN978-4-89269-653-4
－					
－					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	社会福祉学総論II		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	この授業では、社会福祉と福祉政策に関する概念と理論、近年の社会福祉に関する諸論点、福祉政策の現代的課題、福祉政策の国際比較、福祉と関連する諸領域における政策、といった分野について学習する。				
授業のねらい・到達目標	上の「授業の概要」に記したような事項を検討することを通じ、社会福祉および福祉政策の原理や基盤に関する主要な議論について、包括的かつ体系的に理解することを目標とする。目標が達成できたか否かについては、期末試験で確認する。				
授業の方法・授業計画					
1	この授業で学ぶこと				
2	社会福祉と社会政策に関する概念				
3	社会福祉と社会政策に関する理論				
4	社会福祉の思想				
5	社会福祉における必要と資源				
6	福祉政策の諸論点(1) 社会的排除と社会的包摂、普遍主義と選別主義				
7	福祉政策の諸論点(2) 自立と依存、自己選択とパターンリズム				
8	福祉政策の諸過程と政策評価				
9	福祉政策における政府の役割				
10	福祉政策における市場の役割				
11	日本の社会福祉における新たな動向				
12	社会福祉の供給部門と供給過程				
13	福祉政策の国際比較				
14	福祉政策の関連領域				
15	この授業で何を学んできたのか				
期末	試験実施				
プリントを配布した上で、板書による要点の解説を中心とした講義を行う。					
評価方法及び評価基準	期末試験の得点によって評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画によって講義内容を確認した上で授業に臨むこと。 授業後は十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	基本的なルールを守れない学生に対しては、厳しく対応する。				
テキスト	『精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー 4 社会福祉原論 ― 現代社会と福祉』 へるす出版				ISBN978-4-89269-653-4
—					
—					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	就労支援		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	「人が働くということ」を多角的に理解し、職を得て働き続けることを支える社会の仕組みを学びます。 働く意味、勤労の権利、就労を支援する日本の法政策や社会サービス、及び、これらと社会保障との交錯を、まず把握します。その上で、社会的に不利な立場に陥りやすい人々への、就労支援の現状と課題を具体的に論じます。 加えて、近年の諸外国の雇用・就労に関わる新たな取り組み(均等法政策など)や、先駆的なプログラム等の動向に触れ、その意義を検討します。				
授業のねらい・到達目標	本授業の目的は、社会的に不利な立場にある人々の就労を通じた社会経済的な参画と、これを支える社会の仕組みを理解することです。同時に、これらの仕組みが、個人の生活保障や、少子高齢社会における活力ある社会・経済の形成に関わることを把握します。さらに、福祉、労働、教育の有機的な連携が課題となっていることを学びます。				
授業の方法・授業計画					
1	人が働くということ　ーオリエンテーション				
2	雇用・就労の動向と労働法政策				
3	雇用・就労と社会的支援が必要な人々				
4	就労支援制度の現状と課題　ー障害者に焦点をあてて				
5	就労支援制度の現状と課題　ー低所得者に焦点をあてて				
6	就労支援と教育・福祉・労働の連携　ー職業指導、多様な就労形態、専門職の役割等				
7	就労支援と新たな試み　ー均等待遇法政策を含む国際的動向				
8	社会的に不利な立場にある人々と就労支援　ーまとめ				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	授業中の小テスト、授業中の提出物、授業態度を考慮して、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業中に出された課題は、次の授業までに行うこと。指示に従い、予習・復習をすること。				
履修上の注意	8回の授業のため、さらに詳しい内容は、「就労支援各論(8回)」で続けて行います。				
テキスト	「新・社会福祉名：『新・社会福祉士養成課程対応　就労支援サービス』2015年 みらい			978-4-86015-349-6	
－					
－					
参考文献	授業で適宜案内する。				

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	高齢者福祉論I		副題		
担 当 者	金井 守				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	超高齢社会到来の状況、高齢者の置かれた生活状況、生きがいの喪失や介護問題、高齢者の孤立など高齢者が直面している問題を学ぶ。そして、介護保険制度等の高齢者を支援する制度・施策、具体的な諸サービスを学ぶことにより、高齢者福祉実現への取組みを考えるきっかけにする。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、高齢者の置かれた生活状況と生活課題を理解し、高齢者を支援する制度・施策・支援方法を学ぶことを通して、望ましい高齢者福祉のあり方を考える糸口を得ることである。到達目標は、(1)日本の超高齢化の状況が理解できる、(2)高齢者の置かれた生活状況、生活課題が理解できる、(3)高齢者を支援する制度・施策・具体的サービスが理解できる、ことである。				
授業の方法・授業計画					
1	少子高齢社会と介護問題				
2	高齢者・家族の生活実態と問題状況				
3	高齢者施策の発展過程				
4	高齢者介護の概念・対象・介護予防				
5	介護保険制度の概要(1)保険者・被保険者・財源等				
6	介護保険制度の概要(2)要介護認定・居宅介護支援等				
7	介護保険制度における国・市町村等の役割と実際				
8	高齢者への具体的サービス(1)居宅サービス・施設サービス				
9	高齢者への具体的サービス(2)地域密着型サービスその他				
10	老人福祉法、年金、医療制度等関連法制度				
11	就労・生きがい対策				
12	高齢者虐待の防止				
13	高齢者の移動の円滑化、居住の安定確保				
14	個人情報保護、情報開示・透明性の確保				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	試験による評価を行う(授業中に実施する小テストを含む)。授業中の態度、授業中に提出したレポートを評価し、試験結果に加点する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、ノートを整理するなどして、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	毎回の授業に教科書・福祉小六法を持ってくること。ノートを取ることを。				
テキスト	『社会福祉士シリーズ 第13巻 高齢者に対する支援と介護保険制度 第三版』福祉臨床シリーズ編集委員会（弘文堂）			9784335611698 C3347	
—					
—					
参考文献	適宜提示する				

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	高齢者福祉論Ⅱ		副 題		
担 当 者	金 井 守				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	介護保険制度その他の高齢者を支援する制度・施策、具体的な諸サービスの内容、各組織や専門職の役割を理解し、具体的な支援方法を学ぶことにより、高齢者福祉実現へ向けた取組みを考える力を養う。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、高齢者を支援する制度・サービス・支援方法を学ぶことを通して、高齢者福祉のあり方を考えることである。到達目標は、(1)高齢者を支援する制度・施策・具体的サービスが理解できる、(2)関係する各組織や専門職の役割が理解できる、(3)高齢者支援の具体的方法が理解できる、(4)高齢者福祉の今後のあり方を考えることができる、ことである。				
授業の方法・授業計画					
1	介護保険制度の仕組み				
2	介護保険制度における組織・団体、専門職の役割と実際				
3	介護保険制度におけるサービス(居宅、施設、地域密着型)				
4	介護報酬と介護保険財政				
5	地域包括支援センターの役割と実際				
6	介護過程の展開				
7	認知症ケア				
8	ターミナルケア				
9	自立に向けた介護方法				
10	高齢者のケアマネジメント				
11	介護と住環境				
12	老人福祉法その他関連法制度				
13	高齢者サービスの質の評価				
14	高齢者に対する支援の実際(事例)				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	試験により評価を行う(授業中に実施する小テストを含む)。 授業中の態度、授業中に提出したレポートを評価し、試験結果に加点する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、ノートを整理するなどして、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	毎回の授業にテキスト・福祉小六法を持ってくること。ノートを取ること。				
テキスト	『社会福祉士シリーズ 第13巻 高齢者に対する支援と介護保険制度 第二版』 福祉臨床シリーズ編集委員会(弘文堂)			9784335611698 C3347	
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:14

科 目 名	児童・家庭福祉論/児童・家庭福祉論I		副題	子どもたちの幸せをめざして	
担 当 者	太田 由加里				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	最近、子どもや家庭を取り巻く環境は厳しく、特に子ども虐待、いじめや不登校、ひきこもり、ひとり親の生活問題、DV、少年非行など緊急に対応すべき課題も多くなっている。この科目では、子どもの成長や発達を保障する制度やサービス、関連機関などについて学び、社会福祉従事者に必要な児童福祉の専門性、相談援助活動の実際などについて理解する。法改正により児童・家庭福祉の内容は、制度に重点が置かれるようになっているが、子どもたちが直面している現状を具体的な事例を通して理解し、常に子どもたちと共に生活する視点を大切にしながら講義を展開していく。				
授業のねらい・到達目標	[授業のねらい] この科目では、社会福祉従事者に必要な児童・家庭福祉の理念を理解し、少子化を背景とした子育て支援並びに自立支援の意義に焦点をあてる。 [到達目標] 児童福祉の歴史や法、児童福祉援助活動の実際などについて重要な知識、技術、考え方の習得をめざす。				
授業の方法・授業計画					
1	児童・家庭福祉を学ぶにあたって				
2	子どもを取り巻く社会情勢と福祉ニーズ				
3	児童・家庭福祉の理念・定義				
4	児童福祉の歴史(日本)				
5	児童福祉の歴史(諸外国)				
6	児童福祉と法・児童福祉法・児童扶養手当法・母子並びに父子及び寡婦福祉法				
7	児童福祉と法・母子保健法・特別児童扶養手当法・児童手当法など				
8	児童福祉関連法				
9	母子保健				
10	障害のある子どもと家庭への支援				
11	地域における子育て支援と青少年育成				
12	児童・家庭福祉制度における他職種				
13	児童・家庭福祉の財政				
14	児童・家庭福祉の実施体制				
15	児童・家庭福祉の公私の役割				
期末	試験実施せず				
基本的にテキストや配布資料を教材として講義中心で進める。					
評価方法及び評価基準	講義態度・リアクションペーパー・授業内テストを総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の前に授業計画を確認して臨むこと、また講義後はその内容を復習しておくことが望ましい。				
履修上の注意	児童に関わる自分のテーマを持って、授業に臨んでください。				
テキスト	鈴木真理子・大溝茂編著『児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度』久美出版 第4版				
—					
—					
参考文献	浅井春夫・湯澤直美・松本伊智朗『子どもの貧困』明石書店 2008年 社会福祉士養成講座編集委員会『児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度』中央法規 2012年				

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	児童・家庭福祉論II/児童・家庭福祉論詳説		副題	児童家庭福祉におけるソーシャルワーク	
担 当 者	太田 由加里				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	少子化とともに、次世代育成支援法や少子化社会対策基本法など少子化対策を中心とした制度が展開されているが、その現状について理解する。また子どもたちの心身の発達について理解し、社会的養護が必要な子どもや障害児の福祉を学ぶ。さらにひとり親家庭の生活問題を把握、ひとり親家庭(母子家庭、父子家庭)に必要な支援について理解する。法改正により、児童・家庭福祉の内容は、制度に重点が置かれるようになっているが、子どもたちが置かれている現状を具体的な事例を通して理解し、児童・家庭福祉を学ぶ意義や児童・家庭福祉における社会福祉士の専門性と重要性を理解していただきたい。				
授業のねらい・到達目標	[授業のねらい] 児童・家庭福祉論Ⅰの学びを踏まえたうえで、さらに目的意識を持って児童・家庭福祉への理解を深める。具体的にはⅠで学んだ内容を確認しながら、制度やサービス、具体的な支援の実際について学びを深める。 [到達目標] 児童・家庭福祉の枠組み、内容を理解し、援助活動の実際に役立つ力量を習得する。				
授業の方法・授業計画					
1	社会的養護と自立支援				
2	障害児の福祉-障害について				
3	障害児の福祉-発達とその支援				
4	障害児の福祉-特別児童扶養手当				
5	ひとり親家庭の福祉-自立支援				
6	ひとり親家庭の福祉-母子並びに父子及び寡婦福祉・児童扶養手当				
7	児童健全育成事業-次世代育成支援法				
8	児童健全育成事業-少子化社会対策基本法				
9	保護を要する児童				
10	児童福祉専門職の役割				
11	児童・家庭福祉制度における組織・団体の役割				
12	児童・家庭福祉制度における他職種連携				
13	児童・家庭福祉制度におけるネットワーキング				
14	諸外国における子育て支援				
15	児童・家庭福祉の世界的潮流				
期末	試験				
基本的にテキストや配布資料を教材として講義中心で進める。					
評価方法及び評価基準	試験 児童家庭福祉の学びに興味と関心を強く持ち、基本的な理念はもちろんのこと、その内容を深めたい学生を対象にするため、リアクションペーパーの内容や授業内での課題などの基準を高く設定する。そして定期試験も含め全体を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	講義前には授業計画を確認し、講義後はその内容を復習しておくことが望ましい。				
履修上の注意	児童・家庭福祉に関わる自分のテーマを持って、授業に臨んでください。				
テキスト	鈴木真理子・大溝茂編著『児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度』久美出版 第4版				
—					
—					
参考文献	岩田正美『ホームレス／現代社会／福祉国家』明石書店 2005年 青木紀編『現代の貧困と不平等—日本・アメリカの現実と反貧困戦略』明石書店 2007年				

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	【専門基幹】障害者福祉論I/障害者福祉論		副題			
担 当 者	伊東 秀幸、鈴木 文治					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1	
授業の概要	わが国の障害者施策は大きな転換点を迎えている。本講義では、最新の障害者施策の動向を念頭におきながら、今後、障害者支援に携わるソーシャルワーカーが身に付けておくべき理念や思想、歴史、法制度等必要な知識を講義する。					
授業のねらい ・到達目標	・障害者を取り巻く社会情勢、生活実態の理解 ・障害者福祉の理念、制度、サービスの理解					
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション、障害者とは(伊東)					
2	障害者を取り巻く社会情勢と生活実態① 障害者の生活実態(伊東)					
3	障害者を取り巻く社会情勢と生活実態② 障害とは(伊東)					
4	障害者を取り巻く社会情勢と生活実態③ 障害者福祉の歴史的展開 国際障害者年まで(伊東)					
5	障害者を取り巻く社会情勢と生活実態④ 障害者福祉の歴史的展開 障害者基本法から(伊東)					
6	障害者にかかわる法体系① 障害者基本法、身体障害者福祉法(伊東)					
7	障害者にかかわる法体系② 知的障害者福祉法、精神障害者福祉法(伊東)					
8	障害者にかかわる法体系③ 発達障害者支援法、障害者虐待防止法等(伊東)					
9	障害者自立支援制度① 障害者総合支援法の理念・考え方(鈴木)					
10	障害者自立支援制度② 自立支援給付(鈴木)					
11	障害者自立支援制度③ 支給決定のプロセス(鈴木)					
12	障害者自立支援制度④ 地域生活支援事業、障害福祉計画、苦情解決(鈴木)					
13	障害者自立支援制度⑤ 障害児に対する支援(鈴木)					
14	組織・機関の役割(鈴木)					
15	障害者にかかわる専門職の価値・倫理(鈴木)					
期末	試験実施					
評価方法 及び評価基準	学期末試験の結果に授業態度を加味して評価する。					
事前・事後 学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、講義前にテキストの該当箇所を熟読しておくこと。さらに、十分な復習をして知識の定着を図ること。					
履修上の注意	私語厳禁					
テキスト	『新・基礎からの社会福祉4 障害者福祉』ミネルヴァ書房 竹端寛、山下幸子、尾崎剛志、圓山里子編著				9784623069675	
—						
—						
参考文献						

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	【専門基幹】障害者福祉論II/障害者福祉論詳説		副題			
担 当 者	鈴木 文治					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2	
授業の概要	障害児者をめぐる世界的な転換期を迎え、今後の障害者福祉のあり方が大きく変化する現況の中で、これからの障害の捉え方、対応について学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	インクルージョンの理念を通して、共生社会をめざす福祉のあり方や、障害そのものについての基礎的な知識や対応について学ぶ。					
授業の方法・授業計画						
1	ホームレスの現状と福祉の課題					
2	ホームレス障害者の事例（高齢者）					
3	ホームレス障害者の事例（若者）					
4	在日外国人の人権・貧困・障害					
5	視覚障害の理解と対応					
6	聴覚障害の理解と対応					
7	知的障害の理解と対応					
8	自閉症の理解と対応					
9	肢体不自由の理解と対応					
10	難病の理解と対応					
11	重症心身障害の理解と対応					
12	発達障害の理解と対応					
13	障害と犯罪					
14	障害と芸術					
15	インクルージョンの概要・まとめ					
期末	期末試験					
教科書やレジュメによる講義形式						
評価方法及び評価基準	試験による評価及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	事前事後の学習を十分に行うこと。					
履修上の注意	授業のレジュメをファイルして事後学習に努めること。					
テキスト	ホームレス障害者 鈴木文治著 日本評論社					
－						
－						
参考文献	排除する学校一特別支援学校生急増が意味するもの 鈴木文治著 明石書店					

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワークⅠ		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この授業では、ソーシャルワークとは何かということ、その歴史、機能と役割、実践領域等から学んでいく。その後、援助関係や面接技術等の具体的事項についても学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	ソーシャルワークの講義科目は、ソーシャルワークⅠ～Ⅳ、ソーシャルワーク総論Ⅰ、Ⅱからなっている。その一番基礎的な科目が本講義である。よって、ソーシャルワークの基礎を理解するとともに、ソーシャルワークへの関心がより深まっていくことを目的としている。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	ソーシャルワークの範囲・人間と環境の理解				
3	ソーシャルワークの定義(旧定義、社会変革～エンパワメント)				
4	ソーシャルワークの定義(社会正義～ウェルビーイング)				
5	ソーシャルワークの援助体系・歴史(SW前史～発展期)				
6	ソーシャルワークの歴史(モデル・アプローチ)				
7	ソーシャルワークの実践領域・専門職性・4要素				
8	中間テスト・倫理綱領				
9	中間テスト解説・ソーシャルワークの機能と役割(調整的機能、開発的機能)				
10	ソーシャルワークの機能と役割(代弁的機能、教育的機能)				
11	ソーシャルワークと援助関係(個別化～意図的な感情の表出)				
12	ソーシャルワークと援助関係(統制された情緒的関与～秘密保持)				
13	ソーシャルワークの援助過程				
14	ソーシャルワークの面接技術				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	試験(中間、期末) 授業に臨む態度およびリアクションペーパー50%、試験50%(中間、期末含む)				
事前・事後学習の内容	毎回、テキストの当該部分は熟読し講義に臨むこと。テキストやレジュメをもとに復習しておくこと。				
履修上の注意	ソーシャルワークの一番基礎的な科目であり、ソーシャルワーク演習や実習とも深く関連している科目である。よって、真剣にかつ主体的に授業に臨むこと。尚、私語に対しては厳しく対処する。				
テキスト	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053926	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053919	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 相談援助の基盤と専門職 大橋謙策他 ミネルヴァ書房			9784623053902	
参考文献	授業時、必要に応じ紹介				

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワークII		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この授業ではソーシャルワークの基本的な視点と相談援助の理念を確認し、ソーシャルワークのプロセスを理解する。また個別援助から、グループを活用した援助、家族への援助と学習を進め、ソーシャルワークの総合的包括的な援助の意義と課題について学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	ソーシャルワークの基本となる授業である。そのため内容の熟知と、相談援助への関心と興味が深まることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	ソーシャルワークの形成過程				
2	ソーシャルワークが求められる背景				
3	総合的包括的援助について				
4	ソーシャルワークの援助プロセス				
5	ソーシャルワークのプロセスI（導入期）				
6	ソーシャルワークのプロセスII（事前評価）				
7	ソーシャルワークのプロセスIII（支援計画）				
8	ソーシャルワークのプロセスIV（評価・終結）				
9	グループ支援（グループワーク）の形成過程				
10	グループ支援の意義と課題				
11	グループ支援の実際と課題（事例から）				
12	グループ支援の実践原則				
13	グループ支援の展開過程				
14	家族支援の基本的視座				
15	家族支援の方法と課題				
期末	試験実施				
講義が中心となる。					
評価方法及び評価基準	試験 授業に臨む態度20%、コメントシート30%、試験50%				
事前・事後学習の内容	毎回テキストの該当部分を熟読し講義に臨むこと。授業後には、講義内容をまとめ、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	ソーシャルワークの基盤科目であり、実習・演習と深く関連しており真剣に主体的に取り組むこと。 尚、テキストは他のソーシャルワーク科目と共通である。				
テキスト	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 相談援助の基盤と専門職 大橋謙策他 ミネルヴァ書房			9784623053902	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法I 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053919	
—	MINERVA 社会福祉士養成テキストブック ソーシャルワークの理論と方法II 岩間伸之他 ミネルヴァ書房			9784623053926	
参考文献	授業時に随時紹介する。				

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習I			副題	
担 当 者	小林 俊子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	・総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的に取り上げる。 ・個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(ロールプレイング等)を中心とする援助形態により行う。				
授業のねらい ・到達目標	・相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。 ・社会福祉士に求められる相談援助に係る実践力の習得				
授業の方法・授業計画					
1	相談援助演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、理論、倫理の理解			17	記録の意義と目的
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること				
履修上の注意	演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方II』ミネルヴァ書房				978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習I			副題	
担 当 者	引馬 知子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	・総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的に取り上げる。 ・個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導(ロールプレイング等)を中心とする援助形態により行う。				
授業のねらい ・到達目標	・相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。 ・社会福祉士に求められる相談援助に係る実践力の習得				
授業の方法・授業計画					
1	相談援助演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、理論、倫理の理解			17	記録の意義と目的
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること				
履修上の注意	演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方II』ミネルヴァ書房				978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習I			副題	
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	・総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的に取り上げる。 ・個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする援助形態により行う。				
授業のねらい ・到達目標	・相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。 ・社会福祉士に求められる相談援助に係る実践力の習得				
授業の方法・授業計画					
1	相談援助演習で学ぶことのオリエンテーション			16	前期の振り返りと後期の授業概要とスケジュールの説明
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、理論、倫理の理解			17	記録の意義と目的
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造			18	記録の種類と構成
4	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ			19	記録の方法と留意点 記録の管理
5	自己覚知 自分の価値観を知る			20	記録の方法と留意点 個人情報の保護
6	自己覚知 自分の感情を認識する			21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インテーク面接
7	他者理解 利用者の価値観を知る			22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント
8	他者理解 生活歴から理解する			23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション			24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語のコミュニケーション			25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方			26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング
12	基本的な面接技術の習得 話し方			27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定			28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験			29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する			30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	レポート 授業の取り組み態度、積極性、リアクションペーパー等の小課題、レポート等により総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。また、授業後は十分な復習をし、技術の習得を図ること				
履修上の注意	演習は段階的に学習していくので全出席を前提とする。また、演習への取り組み姿勢が重要なので真摯に取り組むこと				
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法I』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方II』ミネルヴァ書房				978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習II			副題	
担 当 者	相澤 哲				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	社会福祉実践における相談援助の知識と技術について、事例検討やロールプレイングの方法を通じて実践的に学習する。 本演習では、それらを社会福祉専門援助技術の諸理論と結びつけて理解し、実践に用いることができる能力を養う。 さらにソーシャルワークの価値と人間理解の諸理論を基盤に、様々な分野、機関・組織あるいは地域において人々の福利を増進するために働くソーシャルワーカーの実践について、その援助の展開過程、援助技術の活用方法等を学習する。				
授業のねらい・到達目標	様々な分野、機関・組織で行われるソーシャルワークの実践内容を学習し、そこで活用されている社会福祉援助技術を理解して身につける。 ソーシャルワーカーが自立支援や人権擁護、生活の質の追求などの基本的視点を実践の中にどのように反映するのか、総合的かつ包括的な相談援助はどのようなものかなどを実践的に学習し、必要な援助技術の体得をめざす。 その過程でソーシャルワーカーが担う役割を具体的に理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
2	ソーシャルワーク実践の構成要素・人と環境の相互作用の理解			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
3	ソーシャルワーカーの価値、知識・理論の体系的理解			18	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)
4	ソーシャルワーカーの技術の体系的理解			19	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)
5	ソーシャルワークの展開(1)(アセスメント)			20	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)
6	ソーシャルワークの展開(2)(介入)			21	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
7	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(1)(インテーク)			22	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
8	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(2)(アセスメント)			23	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)
9	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(3)(プランニング)			24	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)
10	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(4)(援助の実施)			25	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)
11	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(5)(モニタリング)			26	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
12	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)			27	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
13	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)			28	成年後見制度に関するソーシャルワーク実践
14	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)			29	地域包括支援に関するソーシャルワーク実践
15	ホームレス、その他の危機状態にある相談援助事例			30	権利擁護活動を含む相談援助事例
期末	試験			期末	試験
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。					
評価方法及び評価基準	試験 演習への取り組み姿勢を重要視し、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。 演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察すること。				

履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習II			副題	
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	社会福祉実践における相談援助の知識と技術について、事例検討やロールプレイングの方法を通じて実践的に学習する。 本演習では、それらを社会福祉専門援助技術の諸理論と結びつけて理解し、実践に用いることができる能力を養う。 さらにソーシャルワークの価値と人間理解の諸理論を基盤に、様々な分野、機関・組織あるいは地域において人々の福利を増進するために働くソーシャルワーカーの実践について、その援助の展開過程、援助技術の活用方法等を学習する。				
授業のねらい・到達目標	様々な分野、機関・組織で行われるソーシャルワークの実践内容を学習し、そこで活用されている社会福祉援助技術を理解して身につける。 ソーシャルワーカーが自立支援や人権擁護、生活の質の追求などの基本的視点を実践の中にどのように反映するのか、総合的かつ包括的な相談援助はどのようなものかなどを実践的に学習し、必要な援助技術の体得をめざす。 その過程でソーシャルワーカーが担う役割を具体的に理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について			16	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
2	ソーシャルワーク実践の構成要素・人と環境の相互作用の理解			17	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
3	ソーシャルワーカーの価値、知識・理論の体系的理解			18	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)
4	ソーシャルワーカーの技術の体系的理解			19	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)
5	ソーシャルワークの展開(1)(アセスメント)			20	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)
6	ソーシャルワークの展開(2)(介入)			21	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
7	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(1)(インテーク)			22	低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
8	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(2)(アセスメント)			23	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)
9	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(3)(プランニング)			24	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)
10	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(4)(援助の実施)			25	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)
11	虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(5)(モニタリング)			26	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)
12	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1)(インテーク)			27	司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)
13	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)			28	成年後見制度に関するソーシャルワーク実践
14	社会的排除に対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)			29	地域包括支援に関するソーシャルワーク実践
15	ホームレス、その他の危機状態にある相談援助事例			30	権利擁護活動を含む相談援助事例
期末	試験			期末	試験
事例を教材として皆で輪読、その後、事例の問題を設定、その問題解決に沿ったグループワークを行う。 また事例を理解するために役割を設定し、ロールプレイングも行う。 さらに実践的な力を身につけるため、DVDなどの視聴覚教材を用い、面接場面を想定した練習なども行う。					
評価方法 及び評価基準	試験 演習への取り組み姿勢を重要視し、総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	事前に示された課題について下調べをすること。 演習で指摘を受けた内容や改善すべき点について考察すること。				

履修上の注意	社会福祉実践における価値・知識・方法・技術を体験的に学ぶ科目なので、全回出席を前提とする。	
テキスト	以下に示すテキスト3冊は、1年次に購入済みのため、改めての購入は不要。 MINERVA社会福祉士養成テキストブック2・3・4、大橋謙策・白澤政和・米本秀仁編著(2010)『相談援助の基盤と専門職』ミネルヴァ書房、岩間伸之・白澤政和・福山和女編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ』ミネルヴァ書房、同編著(2010)『ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ』ミネルヴァ書房	978-4-623-05390-2 978-4-623-05391-9 978-4-623-05392-6
—		
—		
参考文献	演習内で随時紹介する。	

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題			
担 当 者	小林 俊子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4	
授業の概要	実習での経験をふまえ、社会福祉実践における相談援助の知識と技術について、事例検討を中心に実践力を習得する。					
授業のねらい・到達目標	社会福祉実践における相談援助の知識及び技術について、事例検討を通じて実践的能力を身につけることをねらいとし、以下の3点を到達目標とする。 ・事例について、アセスメント、プランニングができる。 ・事例検討会において、参加者として発言できる、進行担当者として運営できる。 ・スーパービジョンにおいて、スーパーバイザーの役割が取れる。					
授業の方法・授業計画						
1	事例のアセスメントに必要な技法の復習					
2	事例のプランニング、モニタリングに必要な技法の復習					
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討					
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討					
5	高齢者の虐待事例の検討					
6	高齢者の介護問題事例の検討					
7	ホームレス事例(生活支援)の検討					
8	ホームレス事例(居住支援)の検討					
9	地域住民への支援実践事例の検討					
10	地域住民の組織化の検討					
11	複数問題を抱える家族事例の検討					
12	機能不全家族事例の検討					
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習					
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習					
15	模擬ケア会議の実施					
期末	試験実施なし					
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくること。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。					
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。					
テキスト	適宜指示する					
—						
—						
参考文献						

2015/03/26(木)19:15

科 目 名	ソーシャルワーク演習Ⅲ		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	実習での経験をふまえ、社会福祉実践における相談援助の知識と技術について、事例検討を中心に実践力を習得する。				
授業のねらい・到達目標	社会福祉実践における相談援助の知識及び技術について、事例検討を通じて実践的能力を身につけることをねらいとし、以下の3点を到達目標とする。 ・事例について、アセスメント、プランニングができる。 ・事例検討会において、参加者として発言できる、進行担当者として運営できる。 ・スーパービジョンにおいて、スーパーバイザーの役割が取れる。				
授業の方法・授業計画					
1	事例のアセスメントに必要な技法の復習				
2	事例のプランニング、モニタリングに必要な技法の復習				
3	身体障害者・知的障害者の就労援助事例の検討				
4	精神障害者・難病患者の就労援助事例の検討				
5	高齢者の虐待事例の検討				
6	高齢者の介護問題事例の検討				
7	ホームレス事例(生活支援)の検討				
8	ホームレス事例(居住支援)の検討				
9	地域住民への支援実践事例の検討				
10	地域住民の組織化の検討				
11	複数問題を抱える家族事例の検討				
12	機能不全家族事例の検討				
13	社会福祉領域の職員が抱える問題(ジレンマ)へのスーパービジョン演習				
14	社会福祉領域の職員が抱える問題(自己覚知)へのスーパービジョン演習				
15	模擬ケア会議の実施				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	レポート。 学習意欲、演習への取り組み姿勢、リアクションペーパー、及びレポートにより総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回のテーマについて、事前に調べておくこと。また、事例に関する資料が配付された場合は、授業に向けて読み込んでくること。授業後は、その日のテーマについて必ず復習すること。				
履修上の注意	毎回出席と討議への積極的参加が前提である。				
テキスト	適宜指示する				
－					
－					
参考文献					

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	介護技術		副題		
担 当 者	茂木 高利				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	介護における生活支援のあり方について理解する。居住環境の整備、移動・移乗の介護、身じたくの介護、食事の介護、身体の清潔、排泄の介護について学ぶ。また、介護を行うにあたって、利用者の心身状況や障がい特性に応じた個別性のある生活支援技術のあり方を習得する。				
授業のねらい・到達目標	1 利用者の自立支援を支える生活支援技術の概要を理解できる。 2 各生活支援技術の意義・目的、留意点、手順、及びそれらの根拠が理解できる。 3 演習により 介助者・利用者双方の体験を通して、支援を受ける利用者の気持ちを理解した介護ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 介護とは何か 生活支援技術の概要 使用する語彙の理解				
2	住生活環境の整備・ボディメカニクス				
3	ベッドメイキング				
4	ベッド上の移動介助(水平・上方移動)				
5	ベッド上の移動介助(仰臥位⇔側臥位)				
6	ベッド上の移動介助(起き上がり、仰臥位⇔端座位)				
7	移乗介助(ベッド⇒車いす)				
8	移乗介助(車いす⇒ベッド)				
9	車いすの介助				
10	歩行の介助				
11	身じたくの介助(座位及びベッド上での着脱介助と自立に向けた支援)				
12	身体の清潔にむけた介助				
13	食事の介助				
14	排泄の介助 (ポータブルトイレ、便器・尿器の介助)				
15	排泄の介助(おむつ交換)				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	試験60%、コメントシートおよび課題20%、授業態度20%をもって評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画や講義内次回告知で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨み、授業後は十分な復習を行い、知識と技術の定着をはかることが望ましい。				
履修上の注意	実技の時は、授業開始までに実技を行うにふさわしい服装に着替え、遅刻をしないこと。				
テキスト	千葉典子編著 『改訂 介護概論・基本介護技術』 共栄出版株式会社				
—					
—					
参考文献	適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	介護福祉論		副題		
担 当 者	浦尾 和江				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	本教科では、介護を必要とする人の尊厳を支えるケア、自立支援に関する知識や技能について包括的に学ぶ。 少子・高齢化により、介護を取り巻く社会的ニーズも増大し、多様化してきている。介護の社会的問題の背景を考え、社会的ケアの意義を理解する。また、介護の目的と役割、介護に必要な利用者の理解、生活支援技術について学び、介護とは何か基本的な考え方を習得する。				
授業のねらい・到達目標	1. 介護問題の背景と政策の動向、介護の目的と役割を理解できる。 2. 利用者の尊厳を支え、自立支援を実現するために必要な個別ケアの重要性を理解できる。 3. 介護と医療にかかわる多職種との連携について理解できる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業計画のオリエンテーション 介護問題の背景と政策の動向				
2	介護を必要とする利用者の理解 尊厳を支える介護 介護の定義 介護従事者の職業倫理				
3	介護活動の場 在宅介護と施設介護				
4	介護過程とICF				
5	利用者との援助関係を築く基本 コミュニケーション技法				
6	生活支援技術の基本 居住環境の整備、移動、食事、排せつ、睡眠、身だしなみ、入浴、緊急時の対応				
7	障害の理解と対応 終末期の介護 認知症の介護				
8	地域ケアシステム 多職種との連携 まとめ				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	授業内評価（授業の中で行う小テストと課題レポートにより評価する。）				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、下調べをしてから授業に臨むこと。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	社会福祉学習双書編集委員会編『社会福祉学習双書2013 15 介護概論』全国社会福祉協議会			978-4-7935-1084-7 C0336	
－					
－					
参考文献					

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導I		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	実習の事前指導として、相談援助実習の意義、実習の概要、実習分野、実習施設の機能の理解等基礎的な部分の学習をするとともに、マナーや実習記録の書き方等も修得する。				
授業のねらい ・到達目標	相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ実施的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得することをねらいとし、以下の4点を到達目標とする。 ・実習の仕組み、意義を説明できる。 ・実習機関の説明ができる。 ・実習中の正しいマナーで行動できるよう意識できる。 ・自分自身の適性、将来の希望に沿って、実習機関を選択できる。				
授業の方法・授業計画					
1	実習及び実習指導の意義				
2	実習制度、実習構造の理解				
3	実習プロセス、実習方法の理解				
4	実習施設の選択方法				
5	実習施設の理解（高齢者、障害者施設等）				
6	実習施設の理解（児童施設、福祉事務所、社会福祉協議会等）				
7	確認テスト				
8	実習報告会への参加（合同授業）				
9	3年生との交流会（合同授業）				
10	実習先の希望について（自分自身の適性と将来の進路を考える）				
11	実習記録の作成方法（記録の意義、書き方）				
12	実習記録の作成方法（記録作成上の注意点）				
13	マナーについて（利用者への対応）				
14	マナーについて（職員への対応）				
15	まとめ(実習コンピテンス自己評価)				
期末	試験実施なし				
評価方法 及び評価基準	レポート。 レポート及び提出物(40%)、授業内の確認テスト(20%)、授業態度(40%)				
事前・事後 学習の内容	毎回授業のテーマについて事前に調べておくこと。 授業終了後は、その回の内容を復習すること。				
履修上の注意	毎回出席し、積極的授業に参加すること				
テキスト	本学作成の「実習のてびき」				
－					
－					
参考文献					

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導I		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	実習の事前指導として、相談援助実習の意義、実習の概要、実習分野、実習施設の機能の理解等基礎的な部分の学習をするとともに、マナーや実習記録の書き方等も修得する。				
授業のねらい ・到達目標	相談援助実習の意義を理解するとともに、実習に係る個別指導及び集団指導を通して相談援助に関する知識・技術について具体的かつ実施的に理解し、技術等を体得する。さらに社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を獲得することをねらいとし、以下の4点を到達目標とする。 ・実習の仕組み、意義を説明できる。 ・実習機関の説明ができる。 ・実習中の正しいマナーで行動できるよう意識できる。 ・自分自身の適性、将来の希望に沿って、実習機関を選択できる。				
授業の方法・授業計画					
1	実習及び実習指導の意義				
2	実習制度、実習構造の理解				
3	実習プロセス、実習方法の理解				
4	実習施設の選択方法				
5	実習施設の理解（高齢者、障害者施設等）				
6	実習施設の理解（児童施設、福祉事務所、社会福祉協議会等）				
7	確認テスト				
8	実習報告会への参加（合同授業）				
9	3年生との交流会（合同授業）				
10	実習先の希望について（自分自身の適性と将来の進路を考える）				
11	実習記録の作成方法（記録の意義、書き方）				
12	実習記録の作成方法（記録作成上の注意点）				
13	マナーについて（利用者への対応）				
14	マナーについて（職員への対応）				
15	まとめ(実習コンピテンス自己評価)				
期末	試験実施なし				
評価方法 及び評価基準	レポート。 レポート及び提出物(40%)、授業内の確認テスト(20%)、授業態度(40%)				
事前・事後 学習の内容	毎回授業のテーマについて事前に調べておくこと。 授業終了後は、その回の内容を復習すること。				
履修上の注意	毎回出席し、積極的授業に参加すること				
テキスト	本学作成の「実習のてびき」				
－					
－					
参考文献					

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ			副題	
担 当 者	小林 俊子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	・実習に臨むにあたって必要な知識や技術の習得を行う ・実習の配属先が決定してからは、実習施設・機関を理解し、具体的な実習課題を設定する ・対人援助を行うにあたって守るべき倫理について十分に理解する ・記録の取り方を演習を通じて習得する ・実習報告書、実習報告会の準備、実践で社会福祉士として自己の形成を図る				
授業のねらい ・到達目標	授業のねらいは①相談援助実習の意義について理解する。②相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際的に理解し実践的な技術等を体得する。③社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。④具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。次に到達目標は、社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得できている。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 授業概要とスケジュールの説明			16	実習の振り返り
2	実習先の理解1 実習先の概要理解等			17	実習記録・体験を踏まえた課題の整理1 施設の役割等
3	実習先の理解2 実習先の利用者理解等			18	実習記録・体験を踏まえた課題の整理2 業務内容等
4	個人プロフィールの作成			19	実習記録・体験を踏まえた課題の整理3 利用者理解等
5	実習計画書の作成			20	実習記録・体験を踏まえた課題の整理4 相談援助技術等
6	実習先事前訪問と実習計画の三者協議に関する指導			21	実習の自己評価 実習教員による個別面接指導
7	「実習記録ノート」への記録内容に関する理解			22	実習総括レポートの作成準備
8	「実習記録ノート」への記録方法に関する理解			23	実習総括レポートの作成
9	実習先の社会福祉士の業務に関する理解			24	実習報告会の準備1 グループ形成、テーマ設定
10	実習先で必要とされる相談援助に係る知識と技術に関する理解			25	実習報告会の準備2 報告原稿・資料の作成
11	実習先で行われる介護や保育等の関連業務に関する基本的な理解			26	実習報告会の準備3 最終確認、リハーサル
12	実習先事前訪問・協議を踏まえた実習計画の調整			27	実習報告会1 報告する 合同授業
13	実習における個人情報プライバシーの保護と守秘義務等の理解			28	実習報告会2 報告を聞く 合同授業
14	実習前の最終確認指導 配属施設・機関の業務の確認			29	実習報告会の振り返り 実習総括レポートの完成
15	実習前の最終確認指導 巡回指導、帰校日等の確認等			30	実習総括レポートの発表
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	レポート 学習意欲、学習態度及び実習の意義の習得状況を総合的に評価する。欠席をしないことが前提。 提出物、授業態度、レポートを総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	実習の事前準備・事後学習には主体的な行動・学習が求められるため、いま何をすればよいか、これから何をするのか、授業内外において常に確認をすること。				
履修上の注意	・欠席しないこと ・提出物等定められた期日に必ず提出すること ・演習科目であるので、特に主体的、協同的な授業参加を心がけること				
テキスト	特に定めない				
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:16

科 目 名		ソーシャルワーク実習指導Ⅱ		副題		
担 当 者		小平 隆雄				
開講期		通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要		・実習に臨むにあたって必要な知識や技術の習得を行う ・実習の配属先が決定してからは、実習施設・機関を理解し、具体的な実習課題を設定する ・対人援助を行うにあたって守るべき倫理について十分に理解する ・記録の取り方を演習を通じて習得する ・実習報告書、実習報告会の準備、実践で社会福祉士として自己の形成を図る				
授業のねらい ・到達目標		授業のねらいは①相談援助実習の意義について理解する。②相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際的に理解し実践的な技術等を体得する。③社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。④具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。次に到達目標は、社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得できている。				
授業の方法・授業計画						
1	オリエンテーション 授業概要とスケジュールの説明			16	実習の振り返り	
2	実習先の理解1 実習先の概要理解等			17	実習記録・体験を踏まえた課題の整理1 施設の役割等	
3	実習先の理解2 実習先の利用者理解等			18	実習記録・体験を踏まえた課題の整理2 業務内容等	
4	個人プロフィールの作成			19	実習記録・体験を踏まえた課題の整理3 利用者理解等	
5	実習計画書の作成			20	実習記録・体験を踏まえた課題の整理4 相談援助技術等	
6	実習先事前訪問と実習計画の三者協議に関する指導			21	実習の自己評価 実習教員による個別面接指導	
7	「実習記録ノート」への記録内容に関する理解			22	実習総括レポートの作成準備	
8	「実習記録ノート」への記録方法に関する理解			23	実習総括レポートの作成	
9	実習先の社会福祉士の業務に関する理解			24	実習報告会の準備1 グループ形成、テーマ設定	
10	実習先で必要とされる相談援助に係る知識と技術に関する理解			25	実習報告会の準備2 報告原稿・資料の作成	
11	実習先で行われる介護や保育等の関連業務に関する基本的な理解			26	実習報告会の準備3 最終確認、リハーサル	
12	実習先事前訪問・協議を踏まえた実習計画の調整			27	実習報告会1 報告する 合同授業	
13	実習における個人情報プライバシーの保護と守秘義務等の理解			28	実習報告会2 報告を聞く 合同授業	
14	実習前の最終確認指導 配属施設・機関の業務の確認			29	実習報告会の振り返り 実習総括レポートの完成	
15	実習前の最終確認指導 巡回指導、帰校日等の確認等			30	実習総括レポートの発表	
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず	
評価方法 及び評価基準		レポート 学習意欲、学習態度及び実習の意義の習得状況を総合的に評価する。欠席をしないことが前提。 提出物、授業態度、レポートを総合的に評価				
事前・事後 学習の内容		実習の事前準備・事後学習には主体的な行動・学習が求められるため、いま何をすればよいか、これから何をするのか、授業内外において常に確認をすること。				
履修上の注意		・欠席しないこと ・提出物等定められた期日に必ず提出すること ・演習科目であるので、特に主体的、協同的な授業参加を心がけること				
テキスト		特に定めない				
—						
—						
参考文献						

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題			
担 当 者	小林 俊子					
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3	
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。					
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に把握し実践的な技術等を体得する、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する、である。到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行うことである。					
授業の方法・授業計画						
<ul style="list-style-type: none">・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実際・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解						
評価方法及び評価基準	授業内評価 実習施設・機関による実習評価、実習ノート記入状況、実習への取り組み等を総合的に評価					
事前・事後学習の内容	実習中は日々、実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと					
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none">・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。・実習指導IIの授業に必ず出席すること。					
テキスト	特に定めない					
—						
—						
参考文献	適宜提示					

2015/03/26(木)19:45

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題		
担 当 者	引馬 知子				
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に把握し実践的な技術等を体得する、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する、である。到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行うことである。				
授業の方法・授業計画					
<ul style="list-style-type: none">・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実践・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実践・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解					
評価方法 及び評価基準	授業内評価 実習施設・機関による実習評価、実習ノート記入状況、実習への取り組み等を総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	実習中は日々、実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと				
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none">・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。・実習指導IIの授業に必ず出席すること。				
テキスト	特に定めない				
—					
—					
参考文献	適宜提示				

2015/03/26(木)19:46

科 目 名	ソーシャルワーク実習		副題		
担 当 者	小平 隆雄				
開講期	集中	単位数	4	配当年次	3
授業の概要	配属先の施設・機関で180時間以上の実習を行う。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、(1)相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に把握し実践的な技術等を体得する、(2)社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する、(3)関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する、である。到達目標は、設定した課題の実行とその成果の振り返りで、社会福祉士としての倫理・実践技術の習得を行うことである。				
授業の方法・授業計画					
<ul style="list-style-type: none">・実習指導者との連絡調整を密に行い、実習状況について把握するとともに実習中の個別指導を行う・利用者やその関係者、施設・機関等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成・利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)との援助関係の形成・利用者やその関係者(家族・親族・友人等)への権利擁護及び支援とその評価・多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実践・社会福祉士としての職業倫理、施設・機関等の職員の就業などに関する規定の理解と組織の一員としての役割と責任の理解・施設・機関等の経営やサービスの管理運営の実践・当該実習先が地域社会の中の施設・機関等であることへの理解・地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解					
評価方法 及び評価基準	授業内評価 実習施設・機関による実習評価、実習ノート記入状況、実習への取り組み等を総合的に評価				
事前・事後 学習の内容	実習中は日々、実習記録ノートを用いて、振り返りや反省、課題の整理・把握を行うこと				
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none">・実習は欠席は認められず、既定の時間数及び求められる実習内容を満たさなくてはならない。・実習指導IIの授業に必ず出席すること。				
テキスト	特に定めない				
—					
—					
参考文献	適宜提示				

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	人体の機能と日常生活		副題		
担 当 者	島田 今日子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	自立生活を支援するために必要な、こころとからだの基礎的な知識及び人体との関係を学び、介護実践に適切に活用できる能力を習得する。				
授業のねらい・到達目標	人体の構造と機能についての知識を、こころとからだのしくみ、身じたく、移動・移乗、清潔保持、排泄、睡眠、死にゆく人の視点から理解し、生活支援技術に必要な基礎知識を学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	「人体の機能と日常生活」の授業計画についてのオリエンテーション こころのしくみの理解（1） 人間の欲求の基本的理解				
2	こころのしくみの理解（2） 自己概念と尊厳				
3	こころのしくみの理解（3） 思考と感情 学習と記憶				
4	からだのしくみの理解（1） 心身の調和、生命の維持・恒常のしくみ、人体部位の名称と役割(細胞・遺伝、脳・神経)				
5	からだのしくみの理解（2） 人体部位の名称及び役割(骨・筋肉、感覚器、呼吸器)				
6	からだのしくみの理解（3） 人体部位の名称及び役割(消化器、泌尿器、生殖器・内分泌)				
7	からだのしくみの理解（4） 人体部位の名称及び役割(循環器、血液・リンパ) 廃用症候群 リハビリテーション				
8	身じたくに関連したこころとからだのしくみ				
9	移動・移乗に関連したこころとからだのしくみ				
10	食事に関連したこころとからだのしくみ				
11	排泄に関連したこころとからだのしくみ				
12	入浴・清潔保持に関連したこころとからだのしくみ				
13	睡眠に関連したこころとからだのしくみ				
14	緊急時に関連したこころとからだのしくみ				
15	死にゆく人に関連したこころとからだのしくみ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	課題と小テスト、学期末試験により評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に臨むこと。 各自で復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	こころとからだのしくみの概要を理解するためには、「人体の構造と機能」などテキストを読み込むことが求められる。前向きな学習姿勢を期待する。				
テキスト	小坂橋喜久代他編集 『こころとからだのしくみ』 メヂカルフレンド社 2013年			978-4-8392-3199-6	
－					
－					
参考文献	各回のテーマに沿った書籍や論文等を紹介する。				

2015/03/26(木)19:16

科 目 名	加齢・障害の理解		副題		
担 当 者	小林 俊子、島田 今日子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	<p>「高齢者」「認知症」領域は小林、「障害者」領域は島田が担当する。</p> <p>高齢者や障害者等のサービス利用者が尊厳ある生活を実現するための介護を実践する上で必要な、心身の状況や疾病による機能低下が及ぼす日常生活への影響などを学ぶ。</p> <p>また、高齢者や障害者等の家族を含めた周囲の環境、社会資源の活用に関して学ぶ。</p>				
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none">・高齢者や認知症、障害についての基礎的な知識を学び、日常生活に発生するさまざまな介護ニーズに対応できる能力を修得する。・サービス利用者の生活や心身の状況に加え、家族を含めた周囲の環境にも十分留意する必要があることを修得する。・高齢者や障害者に多く見られる疾病や機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、高齢者や障害者の尊厳ある介護の基本を修得する。				
授業の方法・授業計画					
1	小林担当 『加齢・障害の理解』の授業計画のオリエンテーション				
2	小林担当 人間の成長と発達 1 心理の変化と日常生活への影響				
3	小林担当 人間の成長と発達 2 身体機能の変化と日常生活への影響				
4	小林担当 老年期の理解と日常生活 1 老年期の理解と発達課題				
5	小林担当 老年期の理解と日常生活 2 高齢者との交流と高齢者疑似体験				
6	小林担当 高齢者と健康 1 高齢者に多い疾病と日常生活の留意点				
7	小林担当 高齢者と健康 2 高齢者の健康管理と保健医療職との連携				
8	小林担当 認知症の基礎的理解				
9	小林担当 認知症に伴う心身の変化と日常生活				
10	小林担当 認知症の家族への支援				
11	小林担当 認知症を取り巻く状況				
12	島田担当 障害の基礎的理解				
13	島田担当 生活機能障害の理解				
14	島田担当 障害者の生活理解				
15	島田担当 障害者の家族への支援				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	レポート、授業への取り組み姿勢、提出物等を総合的に評価				
事前・事後学習の内容	授業計画に基づいて授業を進めるので、事前にテキストの該当箇所を熟読し、授業後は参考文献等も含めて学習し、自分のノートを作成しておくこと				
履修上の注意	講義には主体的に出席すること。私語その他授業態度として相応しくない場合には退室、欠席扱いをする。				
テキスト	開講時に指示				
—					
—					
参考文献	適宜紹介				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	教職概論		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	教職を目指すうえで必要な基礎知識を学びながら、自らの適性を確かめ、意欲を高めていくことができるようにワークを取り入れていく。教職の意義、教員の役割、職務内容、教員に求められる資質・能力、服務制度・身分保障、教育専門職としての倫理、学校の教育活動の目標・内容、研修制度、教員養成と採用、学校教育の課題等を理解することで、教職への関心と理解を深めることができる内容とする。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は、以下の2点である。第1に「教職」がどのような職業であるのか理解することである。第2に、教師文化および教師の専門性について学ぶことで教職に対する自らの適性を考えさせ、積極的に教職課程を履修していくこと、教育実習および教員採用試験にむけて主体的に学習していくことの重要性を理解させることである。 【「履修ファイル」の対応項目：A－2(2)(4)、A－4(3)、B－3(3)、C－1(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション、教職への道①：大学で何を学ぶべきか				
2	教職への道②：教師になることの意味、教員養成のカリキュラム				
3	教職の歴史：教師像の変遷と教師論				
4	教育実習で何を学ぶのか：その歴史・改革・実際				
5	教師教育の制度：教員養成と教員採用				
6	教師教育の制度①：教員研修の意義・種類・体系				
7	教師教育の制度②：初任者研修の制度、教員研修の課題				
8	教師の勤務と服務：教師の任用、身分保障、服務、職務と役割				
9	教師の日常世界①：新任教師が学ぶこと、教師文化				
10	教師の日常世界②：自己管理(ストレスコントロール)				
11	教師の専門性と力量				
12	教師の専門性とその変容				
13	学校と教師①：学校経営、アカウンタビリティ				
14	学校と教師②：新しいタイプの学校と教師				
15	まとめと討論				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	ワークシート(75%)、課題(15%)、自己評価(10%)として評価します。				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。				
履修上の注意					
テキスト	小島弘道, 比神正行, 平井貴美代〔著〕『教師の条件——授業と学校をつくる力——』学文社				4-7620-1144-4
—					
—					
参考文献	授業の中で、適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	教育原理		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	教育の目的や意義、方法、評価、制度等について、学校教育を中心とし、それ以外の場面(家庭教育、社会教育・生涯学習、企業内教育等)にも触れつつ、「教え」と「学び」の概念に焦点を当てながら「教育」の意味を考察していく。その際、現代の「教育」を相対化する視点として、教育の歴史及び思想史をとりあげていく。また、受講生自らが受けてきた教育と学習の歴史を振り返る作業を通して、教育について理解を深めていく。そして、基礎知識や概念を学ぶことで、「教育」という営みについての考えをまとめ、現代のさまざまな教育問題・課題について考察していく。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は以下の2点である。第1に、これまでに受けてきた自らの「教育経験」を振り返り、「教育」と呼ばれる営みの意味を、教育学的見地から再考できるようになることである。第2に、さまざまな教育問題・課題に対する他者の考えを聴き、自分の考えを他者に伝えるというワークを通して、「教える」、「学ぶ」といった教育学の基礎概念を体験によって学ぶことである。それによって「教育とは何か」についての認識を一層深め、教育と学習のよりよいあり方に関して、客観性と説得力のある議論ができるようになることを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(1)(2)(5)、A-4(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーションおよびガイダンス ー自らの教育・学習経験を振り返る				
2	「教育」とは何か？ー教育概念の歴史的変遷と教育思想史(プラトン、ソクラテスからデューイ、ロジャーズまで)				
3	発達と教育 ー「教えない」教育(児童中心主義の落とし穴)				
4	「教え」と「学び」の概念的関係と教育的意図 ー「教育」の範囲				
5	何を「教え」、何を「学ぶ」のか？ーコメニウスの「学校教育」構想からルソー、ペスタロッチの教育思想へ				
6	人はどのように「学ぶ」のか？ ー状況に埋め込まれた学習				
7	教育における「評価」とは？ ー指導と評価				
8	学校教育における「評価」の意味 ー教員は「評価」抜きに「相談」できるか？				
9	「教え」と「学び」を支える教育関係 ー教育関係論				
10	どのように「教える」べきか？ ー教育思想と教授法				
11	教師の役割と専門性 ーソクラテスから現代の教育思想にいたるまで				
12	親の役割と責任 ー家庭教育と学校教育(不登校からみる学校化社会)				
13	「教え」と「学び」を支える教育環境 ー生涯学習社会における「教育」と「学習」、教育の情報化				
14	特別支援教育と個性に応じた教育 ー「個に応じる」の意味とMI理論				
15	何が「よくて」、何が「わるい」のか？ ー道徳教育と教育的価値				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	ワークシート(45%)、課題(35%)、自己評価(20%)として評価します。				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。				
履修上の注意	各講義では、それまでに学習した内容を前提とした話をする場合があります。欠席した場合には、講義の内容についてテキストで自学しておくこと。				
テキスト	木村元・小玉重夫・船橋一男〔著〕『教育学をつかむ』 有斐閣				978-4-641-17711-6
ー					
ー					
参考文献	講義の中で、適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	学習心理学		副題		
担 当 者	久保 尚也				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	わたしたちの行動は、同じ環境あるいは類似した環境に繰り返しさらされることで変容する。たとえばパソコンの入力作業を繰り返すことでブラインドタッチを習得することや、繰り返し英語の発音を繰り返すことで英語の発音がよくなることなどが行動の変容の例として挙げられる。このような“経験によって生じる比較的永続的な行動変容”を心理学では学習といい、これまでにさまざまな行動の原理・原則が研究により明らかにされてきた。さらにこれらの研究成果は教育、福祉、ビジネス場面などの人間社会におけるさまざまな問題の解決に有効に適用できることが実証され、現在では行動に関する知識はヒューマンサービスの仕事を将来的に目指す人にとって有益なものとなっている。本講義では、これまでの研究により明らかにされた行動の原理・原則や諸現象について、身近な事例や動物実験の映像資料、ワークを通じて紹介していく。				
授業のねらい・到達目標	学習心理学の研究で明らかにされた行動の原理・原則の専門的な知識を身につけ、ヒトを含めた生体の行動について理解を深めることを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	学習と行動の定義				
2	行動の基礎				
3	レスポナント条件づけ				
4	レスポナント条件づけの消去				
5	レスポナント条件づけの諸現象				
6	レスポナント条件づけの新しい考え方				
7	オペラント条件づけ				
8	強化随伴性				
9	新しい行動の獲得				
10	行動の分化				
11	行動の維持と消去				
12	弱随伴性				
13	先行刺激によるオペラント行動の制御(1)-刺激性制御の基礎-				
14	先行刺激によるオペラント行動の制御(2)-より高次の刺激性制御-				
15	日常行動の分析				
期末	試験実施				
講義形式で行い、適宜資料を配布する。					
評価方法及び評価基準	評価基準: 日常でみられる行動を科学的な視点から考えられるになったか。 評価方法: 学期末試験(70%), 毎回のコメントシート(30%)により総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習: 授業計画にて次回の内容を確認し、学習心理や心理学の概論書等で下調べを行うこと。 事後学習: 各回で配布したレジメをもとに十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	・出席日数2／3以上必須 ・他の履修生に迷惑になるので授業中の私語および離席は慎むこと。				
テキスト	授業中にレジメを配布する				
－					
－					
参考文献	小野浩一(2005) 行動の基礎-豊かな人間理解のために- 培風館 2400円＋税 ISBN978-4-563-05696-4				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	発達心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	生物の一種として生まれた「ヒト」が、社会や文化をまとった「人」として、他者とかかわりながら育ち、育てられ、次の世代を育み、死に至るまでの発達の過程について学ぶ。人の心の発達、生まれつき備わった生物学的な特徴を土台として、環境とかかわる中で、さまざまなことを経験し、その経験の積み重ねのうに形づくられていく。生物学的要因という縦系と、社会・文化的要因という横系が絡まり合って、人の生涯という織物が綿密に織り上げられていく過程について学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1) 周産期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期の各発達段階における発達課題と発達支援のあり方について理解する。 2) 生涯発達心理学の観点から、人の生涯発達における個人内の変化と安定性・連続性、また個人間の異質性と類同性について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	発達とは：生涯発達心理学の理論的枠組み				
2	周産期：生命の芽生えから誕生まで				
3	乳児期：赤ちゃんがとらえる世界				
4	乳児期：愛着関係の発達				
5	幼児期：言語と遊びの発達				
6	幼児期：かかわりの中で育まれる自己				
7	児童期：仲間の中での育ち				
8	児童期：学校での学び				
9	青年期：子どもからの卒業				
10	青年期：アイデンティティの発達				
11	成人期：子育てと生涯発達				
12	成人期：職業生活における発達				
13	老年期：老いることと生涯発達				
14	老年期：サクセスフルエイジング				
15	発達におけるつまずきの理解と支援に求められる発達の観点				
期末	試験				
授業は主として講義形式で行う。簡単な実習課題を行うこともある。また理解度を確認するために小テストを実施する。					
評価方法及び評価基準	期末試験を実施する。毎回リアクションペーパーの提出を求め、その内容も加味して総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に授業内容を確認し、該当するテキスト部分を読んでおくこと。事後については配布された資料を整理し、十分な復習により知識の定着を図ること。				
履修上の注意					
テキスト	『問いからはじめる発達心理学』 坂上裕子・山口智子・林創・中間玲子(著) 有斐閣			978-4-641-15013-3	
—					
—					
参考文献	授業内で適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	教育心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	子どもを取り巻く環境が変化し、学びの質がより問われるようになった今日、教育の理解や改善のために教育心理学が果たすべき役割はますます高まっている。本講義では、教育に関する心理学的知見を広く紹介する。具体的には、発達と教育、学習のメカニズム、動機づけ、集団のダイナミクス、社会性の発達、学校場面における教授法や評価法、特別な教育的支援について扱い、具体的な教育場面と関連づけながら検討していく。				
授業のねらい・到達目標	1.発達・学習・動機付けなどの教育場面での子どもの理解を助ける知識を習得する。 2.仲間関係を始め、社会性の発達など学級経営に役立つ知識を習得する。 3.教授法と評価法など、指導計画に関連する知識を習得する。 4.子どもの行動の問題の背後にどのような要因がありうるかを整理して述べるができるようになる。 5.特別な配慮や支援を必要とする子どもに対して、適切な支援をすることができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	教育心理学とは				
2	発達を規定する要因－かえるの子はかえるか？－				
3	やる気を高める－動機づけの心理学－				
4	学習のメカニズム(1)古典的条件づけと道具的条件づけ				
5	学習のメカニズム(2)知識をしっかりと身につけるには				
6	授業の心理学(1)学習指導の理論				
7	授業の心理学(2)協同学習・学習の個性化				
8	社会性を育む				
9	自己とパーソナリティ				
10	知的能力とは何か				
11	学級の心理学				
12	特別支援教育と障害児の心理				
13	不適応と心理臨床				
14	教育評価を指導に活かす				
15	教育心理学を実践に活かすには				
期末	試験実施				
講義形式で行う。小テストを実施する。					
評価方法及び評価基準	期末試験、小テストおよび講義終了時に提出するリアクションペーパーの内容により総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また授業後は教科書と配付資料を読み復習を行い、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	『実践につながる教育心理学』 櫻井茂男(監修)・黒田祐二(編著) (北樹出版)				
－					
－					
参考文献	講義の中で、適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	教育社会学		副題		
担 当 者	喜始 照宣				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	この授業では、みなさんがこれまで身近に経験してきた教育や学校に関わる事柄について、教育社会学の言葉や視点をともに考えていきます。授業では、できるだけ具体的なデータや例を示し、教育や学校について様々な角度から見ていきます。				
授業のねらい・到達目標	この授業の目標は、教育社会学の基礎用語やものの見方を身につけることにあります。また、授業で知った用語や見方をともに、自身の学校経験やこれまで疑問に思ってきた事柄などについて、調べ、考え、自分の言葉で説明できるようにすることも、この授業のねらいです。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション:教育を社会学の視点で見ること				
2	学校と社会のつながり①:社会化と選抜・配分のはたらき				
3	学校と社会のつながり②:メリトクラシー、学歴社会と格差				
4	学校という舞台装置①:学級、授業、隠れたカリキュラム				
5	学校という舞台装置②:学校行事、校則、通過儀礼				
6	生徒の世界①:友だち関係、メディア				
7	生徒の世界②:ジェンダー、制服、サブカルチャー				
8	生徒の世界③:放課後、部活動、居場所				
9	先生の世界①:<教師－生徒>関係、学級崩壊				
10	先生の世界②:ラベリングとスティグマ				
11	先生の世界③:教師のストレス、バーンアウト				
12	教育問題①:学力低下、ゆとり教育				
13	教育問題②:いじめ、不登校、スクールカースト				
14	教育と家族①:家族の多様化、家庭教育				
15	教育と家族②:児童虐待、子どもの貧困				
期末	試験は実施しません。				
第1回の授業では、教育社会学の基本的な特徴について説明します。その後、第2回～15回の授業では、様々なテーマのもと社会のなかの教育や学校の仕組みなどを考えます。また、最終レポートを書くためのサポートも、随時、授業内でおこないます。					
評価方法及び評価基準	最終レポート(70%)、授業内で課す小レポート(30%)として評価します。なお、小レポートは授業時間内に作成し、授業の最後に毎回提出していただきます。また、授業外の学習についての自由課題も評価の対象とします。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、指定のテキストを読んでおくと、授業内容が理解しやすいと思います。事後学習としては、授業で扱ったテーマについて、配布資料などを見返し、自分の言葉で考えみてください。また、それを文章化し、自由課題として提出することもオススメです。				
履修上の注意	初回の授業では、今後の授業の流れを説明し、みなさんの教育や学校に関する疑問や考えを小レポートとして書いていただきますので、できるだけ出席してください。				
テキスト	荻谷剛彦『学校って何だろう——教育の社会学入門』ちくま文庫			978-4480421579	
—	鈴木翔・本田由紀(解説)『教室内カースト』光文社新書			978-4334037192	
—					
参考文献	授業の中で適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	教育課程論		副題		
担 当 者	菅谷 正美				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	本授業では、現在の教育課程について、関係法令との関係、並びにそれに基づく学習指導要領の編成について学ぶ。また、我が国の学校教育の中心である教育課程がどのように変遷してきたかを学び、教育課程の意義の理解に役立てる。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の点である。 1 教育課程の意義・役割と法令との関係を理解する。 2 我が国の教育課程の編成とその手順を理解する。 3 教育課程の変遷を知り、学習指導要領の内容を理解する。 4 新しい学力観の目指す学力について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	教育課程とは何か				
2	教育課程確立の歴史				
3	諸外国の教育課程				
4	我が国の教育課程 明治以前の藩校・寺子屋				
5	我が国の教育課程 戦前の学校教育				
6	我が国の教育課程 戦後の学校教育				
7	教育課程と関係法令				
8	学習指導要領と教科書				
9	学習指導要領の改訂の特色				
10	学校における教育課程の編成				
11	新しい学力観と教育課程				
12	新しい学力観と学習指導				
13	中高一貫教育の意義と内容				
14	小中一貫教育の意義と内容				
15	新教科の意義と背景				
期末	試験実施				
分担した授業の内容を調べて発表する授業を行う。発表された内容の中から、特徴的な事柄を取り上げて、討論を行うとともに、教育の歴史や社会の変化等の背景を学ぶ。					
評価方法及び評価基準	試験の得点および授業における発表の内容により総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前の学習では、授業計画に沿って授業内容を確認し文部科学省の審議会報告および文献等で下調べしておくこと。事後学習では、授業内容を整理し必要な補充を行い知識の定着を図ること。				
履修上の注意	知識理解にとどまらず、積極的に教育課程の背景にある社会の変化に興味と関心を持つことが望まれる。				
テキスト	授業に必要なプリントは配布する。				
—					
—					
参考文献	文部科学省 中学校学習指導要領 文部科学省 高等学校学習指導要領 文部科学省 特別支援学校学習指導要領				

2015/03/26(木)19:34

科 目 名	社会科教育法Ⅰ		副題		
担 当 者	一柳 武				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「社会科教育法Ⅰ」においては、中学校学習指導要領に示された社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、社会科教育のあり方について考える。				
授業のねらい・到達目標	中学校社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、中学校社会科教員として必要な基礎的知識を身につける。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド A-4 教育の理念(1)(3)(4)、 D-3 教科指導の基本 部分に相当する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション「社会科教育法Ⅰ」の概観				
2	社会科とは何か				
3	社会科の歴史				
4	記憶に残る社会科の授業と教師				
5	社会科における様々な学習形態・学習方法				
6	学習指導要領				
7	小学校学習指導要領との関連、教材研究と教科書				
8	地理的見方・考え方				
9	地図の見方・読み方				
10	歴史の見方・考え方				
11	モノ教材の活用、人物・文化遺産の扱い				
12	政治や経済の見方・考え方				
13	現代社会の課題の扱い				
14	評価の現状と課題				
15	まとめ、総合的学習との関係 授業評価と自己評価				
期末	試験実施なし				
評価方法 及び評価基準	レポート 毎授業ごとの提出物:(50点) 最終レポート:50点				
事前・事後 学習の内容	・ 授業計画にて講義内容を確認し、中学校学習指導要領の該当部分を読む。 ・ 講義内容を整理し、中学校社会科教員として必要な基礎知識の定着をはかる。				
履修上の注意	・ 社会科教育法Ⅱを必ず履修すること。 ・ 毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を出すので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。				
テキスト	中学校指導要領解説 社会編 日本文教出版 テキストは必ず購入すること			978-4-536-59005-1	
—					
—					
参考文献	中学校社会科教科書 地理的分野 歴史的分野 公民的分野(いずれも貸与する)				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	社会科教育法Ⅱ		副題		
担 当 者	一柳 武				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「社会科教育法Ⅱ」においては、履修者全員が中学校社会科の地理的分野、歴史的分野、公民的分野のそれぞれについて学習指導案を作成し、模擬授業を行うことにある。 なお、履修者の数により、学習指導案作成の時間を減らし、模擬授業の時間を増やす場合がある。				
授業のねらい・到達目標	中学校社会科の各分野の学習指導案を作成し、それに基づいて模擬授業を行い、中学校社会科教育における実践的な指導力を身につける。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド D-2 教育計画 D-3 教科指導の基本 D-4 生徒の興味・関心を活かした指導 部分に相当する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション「社会科教育法Ⅱ」の概観				
2	学習指導案と授業の組み立て方				
3	学習指導案(地理的分野) 教材研究				
4	学習指導案(地理的分野) 指導案の作成				
5	模擬授業(地理的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
6	模擬授業(地理的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
7	学習指導案(歴史的分野) 教材研究				
8	学習指導案(歴史的分野) 指導案の作成				
9	模擬授業(歴史的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
10	模擬授業(歴史的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
11	学習指導案(公民的分野) 教材研究				
12	学習指導案(公民的分野) 指導案の作成				
13	模擬授業(公民的分野)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
14	模擬授業(公民的分野)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
15	まとめ 自己評価				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	学習指導案 及び 模擬授業				
事前・事後学習の内容	・ 模擬授業をいかに組み立てていくか、教材研究および指導案作成に取り組む。 ・ 模擬授業を通して、良かった点、悪かった点を整理し、実習にいくまでの自己改善点を見い出す。				
履修上の注意	社会科教育法Ⅰを必ず履修すること				
テキスト	中学校指導要領解説 社会編 日本文教出版 テキストは必ず購入すること			978-4-536-59005-1	
－					
－					
参考文献	中学校社会科教科書 地理的分野 歴史的分野 公民的分野(いずれも貸与する)				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	公民科教育法Ⅰ		副題		
担 当 者	一柳 武				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「公民科教育法Ⅰ」においては、高等学校学習指導要領に示された公民科各科目、現代社会、倫理、政治・経済それぞれの目標・内容・内容の取扱いについて理解し、公民科教育のあり方について考える。				
授業のねらい・到達目標	高等学校公民科の現代社会、倫理、政治・経済の各科目の目標・内容・内容の取扱いについて理解し、高等学校公民科教員として必要な基礎的知識を身につける。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド A-4 教育の理念 (1)(3)(4) D-3 教科指導の基本 部分に相当する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション「公民科教育法Ⅰ」の概観				
2	公民科とは何か				
3	公民科の歴史				
4	学習指導要領				
5	中学校学習指導要領との関連、高等学校公民科各科目の内容・連携				
6	新聞、インターネット、実物教材等の扱い方				
7	ディベート、討論、プレゼンテーション等様々な学習形態に関して				
8	「現代社会」の内容と学習指導① 現代社会の特質				
9	「現代社会」の内容と学習指導② グローバル化する現代社会				
10	「倫理」の内容と学習指導① 「倫理」教育の諸問題・論争点				
11	「倫理」の内容と学習指導② 人生における宗教のもつ意義 日本人の宗教観				
12	「政治・経済」の内容と学習指導① 「政治・経済」教育の諸問題・論争点				
13	「政治・経済」の内容と学習指導② 政治的な見方・考え方 経済的な見方・考え方				
14	評価の現状と課題				
15	まとめ 総合的学習との関連 授業評価と自己評価				
期末	試験実施せず				
評価方法 及び評価基準	レポート 毎授業ごとの提出物(50点) 最終レポート(50点)				
事前・事後 学習の内容	・ 指導計画にて講義内容を確認し、高等学校公民科学習指導要領の該当部分を読む。 ・ 講義内容を整理し、高等学校公民科教員として必要な基礎知識の定着をはかる。				
履修上の注意	・ 公民科教育法Ⅱを必ず履修すること ・ 毎授業ごとにリアクションペーパーもしくは課題を提出するので、欠席をするとその分のポイントが加算されない。				
テキスト	高等学校学習指導要領解説 公民編 教育出版 テキストは必ず購入すること。			978-4-316-30023-8	
—					
—					
参考文献	高等学校公民科教科書 現代社会 倫理 政治・経済				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	公民科教育法Ⅱ		副題		
担 当 者	一柳 武				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「公民科教育法Ⅱ」においては、履修者全員が現代社会、倫理、政治・経済の各科目について学習指導案を作成し、模擬授業を行うことにある。 なお、履修者の数により、学習指導案作成の時間を減らし、模擬授業の時間を増やす場合がある。				
授業のねらい・到達目標	公民科各科目の学習指導案を作成し、それに基づいて模擬授業を行い、高等学校公民科教育における実践的な指導力を身につける。 教職課程科目履修ファイルチェックガイド D-2 教育計画 D-3 教科指導の基本 D-4 生徒の興味・関心を活かした指導 部分に相当する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション「公民科教育法Ⅱ」の概観				
2	学習指導案と授業の組み立て方				
3	学習指導案(現代社会) 教材研究				
4	学習指導案(現代社会) 指導案の作成				
5	模擬授業(現代社会)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
6	模擬授業(現代社会)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
7	学習指導案(倫理) 教材研究				
8	学習指導案(倫理) 指導案作成				
9	模擬授業(倫理)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
10	模擬授業(倫理)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
11	学習指導案(政治・経済) 教材研究				
12	学習指導案(政治・経済) 指導案作成				
13	模擬授業(政治・経済)①と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
14	模擬授業(政治・経済)②と反省・評価 この時間内で行われた模擬授業に関する反省および評価を行う。				
15	まとめ 自己評価				
期末	試験実施せず				
評価方法 及び評価基準	学習指導案 及び 模擬授業				
事前・事後 学習の内容	・ 模擬授業をいかに組み立てていくか、教材研究および指導案作成に取り組む。 ・ 模擬授業を通して、良かった点、悪かった点を整理し、実習に行くまでの自己改善点を見い出す。				
履修上の注意	公民科教育法Ⅰを必ず履修すること				
テキスト	高等学校学習指導要領解説 公民編 教育出版			973-4-316-30023-8	
	テキストは必ず購入すること				
—					
—					
参考文献	高等学校公民科教科書 現代社会 倫理 政治・経済				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	福祉科教育法Ⅰ		副 題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「福祉科教育法Ⅰ」では、教科「福祉」の目標と各科目の内容、学習指導要領の理解と展開、教育課程の編成、指導計画と学習指導案の枠組み、といった事項について講義を行い、検討する。				
授業のねらい・到達目標	上記の「授業の概要」に記した事項についての学習を通して、実際に教科「福祉」の授業を実践するのに必要不可欠な教科の主内容の理解に到達することを、最重要の目標とする。 より具体的な到達目標は以下の通り。①教科に関する学習指導要領の基本的な内容を整理して述べることができる。 ②教育目標・教育内容に応じた指導計画や指導案を作成できる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	教科「福祉」のねらいと全体構造				
3	各科目の概要と指導の展開モデル(1) — 「社会福祉基礎」				
4	各科目の概要と指導の展開モデル(2) — 「介護福祉基礎」				
5	各科目の概要と指導の展開モデル(3) — 「コミュニケーション技術」				
6	各科目の概要と指導の展開モデル(4) — 「生活支援技術」				
7	各科目の概要と指導の展開モデル(5) — 「介護過程」				
8	各科目の概要と指導の展開モデル(6) — 「介護総合演習」「介護実習」				
9	各科目の概要と指導の展開モデル(7) — 「こころとからだの理解」				
10	各科目の概要と指導の展開モデル(8) — 「福祉情報活用」				
11	「指導計画」とは何か				
12	教育実習と学習指導案				
13	学習指導案の作成				
14	学習指導案の細目				
15	ふり返りと総括				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	学期末試験(95%)、及び授業中の「報告」(5%)の得点により評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に出席すること。 復習と自主的な学習により、必要な知識の定着をはかること。				
履修上の注意	教職に就きたいと希望する者が遵守すべき当然のルールも守れないような学生には、厳しく対応する。				
テキスト	保住芳美編著『高等学校新学習指導要領の展開 福祉科編』明治図書出版株式会社				ISBN978-4-18-850919-7
—					
—					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	福祉科教育法II		副題		
担 当 者	相澤 哲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	「福祉科教育法Ⅰ」の学習内容を前提とし、教科「福祉」の教育法の理解をさらに深め、教材研究や指導案・授業計画の作成等についてより具体的・実的に学ぶこと、またそれを踏まえた模擬授業の実践を通して、来るべき教育実習に備えることを眼目とした授業である。				
授業のねらい・到達目標	上記の「授業の概要」に記したような学びを通して、実際に教壇に立って「福祉科」の授業を展開するのに必要不可欠な実践力を身につけることを、最重要の目標とする。 より具体的な到達目標は以下の通り。①教育目標・教育内容に応じた指導計画や指導案を作成できる。②作成した指導案に基づいて、適切に授業を行うことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	教材研究と授業展開例(1) 社会福祉基礎				
3	教材研究と授業展開例(2) 介護福祉基礎				
4	教材研究と授業展開例(3) コミュニケーション技術				
5	教材研究と授業展開例(4) 生活支援技術				
6	教材研究と授業展開例(5) 介護過程				
7	教材研究と授業展開例(6) こころとからだの理解				
8	模擬授業の実践(1) 社会福祉基礎				
9	模擬授業の実践(2) 介護福祉基礎				
10	模擬授業の実践(3) コミュニケーション技術				
11	模擬授業の実践(4) 生活支援技術				
12	模擬授業の実践(5) 介護過程				
13	模擬授業の実践(6) こころとからだの理解				
14	模擬授業の振り返り				
15	教育実習に向けて				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業中に提示する各種課題(20%)、模擬授業(80%)として、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に出席すること。 復習と自主的な学習により、必要な知識の定着をはかること。				
履修上の注意	教職に就きたいと希望する者が遵守すべき当然のルールも守れないような学生には、厳しく対応する。				
テキスト	保住芳美編著『高等学校新学習指導要領の展開 福祉科編』明治図書出版株式会社			ISBN978-4-18-850919-7	
—					
—					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	道徳教育の指導法		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	「道徳」とは何かを考察し、「道徳教育」の歴史的経緯を確認する。そして、現代社会における道徳教育の在り方について討議した後に、道徳教育に関する代表的な思想と理論を確認し、道徳教育のさまざまな方法を体験しながら学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	価値が多元化した現代社会における道徳教育とはどのようなものであるべきかについて考察し、道徳教育に携わる際の多様なアプローチを理解すること。そして、それぞれの方法の利点と欠点、およびそれらの方法の背景にある思想を理解することを目指す。さらに、単なる「徳目主義」とならないように、「道徳」を「教育する」ことの意味について、深く議論できるようになることをめざす。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(1)(5)、C-2(1)(4)、C-3(1)～(5)、D-1(1)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション：「道徳」とは何か。道徳教育の歴史				
2	現代社会における「道徳教育」の意義				
3	学習指導要領における「道徳教育」の位置づけ				
4	人間観(教育思想)と道徳教育に関する諸理論				
5	隠れたカリキュラムと道徳教育： 機能としての道徳教育				
6	道徳性の発達： ピアジェ、コールバーグ、ギリガン				
7	道徳教育における様々なアプローチ①： 価値の明確化				
8	道徳教育における様々なアプローチ②： エンカウンター、ピアカウンセリング				
9	道徳教育における様々なアプローチ③： モラルスキル・トレーニング				
10	道徳教育における様々なアプローチ④： VLF(思いやり育成プログラム)				
11	道徳教育における様々なアプローチ⑤： モラルジレンマ				
12	道徳教育における様々なアプローチ⑥： その他				
13	人権意識と道徳教育				
14	欧米諸国の道徳教育				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	ワークシートと授業における課題への取り組み(70%)、授業案の作成(20%)、自己評価(10%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。				
履修上の注意	講義の中で行うワークを大切にしてください。				
テキスト	諸富祥彦 編著『道徳授業の新しいアプローチ10』明治図書：受講者は全員購入			978-4188110188	
—	『中学校学習指導要領解説—道徳編—』文部科学省(日本文教出版)：中学校の免許希望者は購入			987-4-536-59004-4	
—	『高等学校学習指導要領解説—総則編—』文部科学省(東山書房)：高等学校の免許希望者は購入			978-4-8278-1480-4	
参考文献					

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	特別活動の指導法		副題		
担 当 者	菅谷 正美				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	中・高の領域である「特別活動」について、学習指導要領に書かれている意義について、正しく理解できるようにする。また、今日の学校教育に望まれる教師力についても触れる。				
授業のねらい・到達目標	特別活動の指導法では、次のように目標を設定する。 1 特別活動の意義と目的を理解し、生徒を指導できる。 2 学級活動(ホームルーム)の内容を理解し、実践できる。 3 生徒会活動の意義と内容を理解できる。 4 学校行事についての目的と内容を理解できる。 5 課外活動の意義を理解できる。 6 特別活動の指導計画を立案し、実践できる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業ガイダンス				
2	特別活動の意義と目的 望ましい集団とは				
3	学級活動と学級づくり 学級担任の役割				
4	学級活動の指導について 日常生活と健康安全				
5	学級活動の指導について 生徒指導や健全育成				
6	学級活動の指導について 進路指導と給食指導等について				
7	生徒会活動の意義と目的 生徒会および委員会の指導内容				
8	学校行事の意義と内容の理解 安全指導のあり方について				
9	遠足・集団宿泊的行事の内容構成と計画の作成				
10	遠足的行事を実施し、計画的に基づく指導方法を身に付ける				
11	遠足的行事を実施し、実施時の企画や計画等の反省を行う。				
12	儀式的行事、文化的行事についての意義と進め方				
13	健康安全・体育的行事の意義と進め方				
14	勤労生産・奉仕的行事の意義と進め方				
15	人権問題等へのかかわり方				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	試験、授業中の討議意欲等を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	中学校、高等学校ならびに特別支援学校にかかわる話題へ興味関心をもち、「なぜ」をそのままにしないようにすること。何事についても自分の考えを持つこと。				
履修上の注意	学級にかかわる内容を話題とするので、積極的に討議・討論に参加すること。				
テキスト	授業のプリントは毎回配布する。				
—					
—					
参考文献	文部科学省「中学校学習指導要領解説特別活動」海文堂出版 2008 文部科学省「高等学校学習指導要領解説特別活動」海文堂出版 2010				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教育方法と技術			副題	
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	<p>現在、私たちの身のまわりではIT化が急速に進展しており、教育の世界においても「情報化」が強力に進められてきています。しかし、ただ単に「情報機器」を使用して授業をすればよいではありません。教育の目的と学習者の実態等に応じて教育方法を工夫できることが重要です。</p> <p>本講座は、教職を目指す学生が、将来教師として創造的な授業を生み出すことができるよう、教育方法および技術に関する基礎理論を理解し、基本的な教授方法を習得し、ICT(Information and Communication Technology)を活用して授業ができるようになることを目指します。</p>				
授業のねらい ・到達目標	<p>・教育方法の基礎概念と諸理論の理解</p> <p>・個々のニーズに応じた適切な課題・宿題等を設定する方法の理解</p> <p>・主としてPCを使用した教材の作成と、教具(PCを含む)を活用するスキルの習得</p> <p>・基本的な学習指導法・集団組織の方法の習得</p> <p>・PCを利用した学習指導法の習得</p> <p>・学習指導案・学習教材の製作</p> <p>・自作教材を利用した模擬授業の実演</p> <p>・指導に応じた評価方法の理解</p> <p>・教育機器を活用する意義と、情報管理の重要性の理解</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、D-2(1)～(7)、D-3(1)～(5)、D-4(1)～(6)、D-5(1)～(3)】</p>				
授業の方法・授業計画					
1	「教育方法」とは何か(岩本・番匠)			16	視聴覚教材の作成方法(番匠)
2	「授業」、「学習指導」とは何か(岩本)			17	視聴覚教材の作成(番匠)
3	教授理論(ソクラテス、コメニウス、ルソー)(岩本)			18	黒板、ホワイトボード、スライド、PCの使い方と学習指導(岩本・番匠)
4	教授理論(ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイ)(岩本)			19	プレゼンテーション技法(番匠)
5	カリキュラムの類型と教育方法(岩本)			20	プレゼンテーション技法の実演(番匠)
6	「授業」の設計、「教える」ことの意味(岩本)			21	表計算ソフトを活用した学習指導と情報管理(番匠)
7	「授業」の組織とクラス運営(岩本)			22	視聴覚メディアを活用した学習指導(番匠)
8	学習における個人差と教育方法(岩本)			23	PCを活用した学習指導、CAI(コンピューター支援による教授法)およびeラーニングシステムの理解(番匠)
9	授業における教師の基本的な役割と基礎技術(岩本)			24	教育メディアの活用を含んだ学習指導案の作成方法(岩本・番匠)
10	教授方法(講義法:教師中心の指導方法)(岩本)			25	模擬授業の実演①(グループ1)(岩本・番匠)
11	教授方法(グループ学習、討議法、劇化法:学習者中心の指導方法)(岩本)			26	模擬授業の実演②(グループ2)(岩本・番匠)
12	教育方法とメディア(視聴覚教育の方法)(岩本)			27	模擬授業の実演③(グループ3)(岩本・番匠)
13	教師中心の授業案作成(岩本・番匠)			28	学習指導と教育課程(岩本・番匠)
14	学習者中心の授業案作成(岩本・番匠)			29	学習指導の評価方法(岩本・番匠)
15	メディアを活用した課題・宿題の作成方法(岩本・番匠)			30	校務に関わる情報機器の活用および情報管理、総括(岩本・番匠)
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物およびワークシート(30%)、模擬授業の実演(50%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	シラバスを読み、教科書で関連する箇所を事前に予習しておくことが基本である。PCで利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること。また、毎回、ワークシートが課題を出す。授業時間内に課題が完成しない場合には、翌週の授業の前日までに課題をEメールにて提出しておくこと。				
履修上の注意					
テキスト	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化 定価2,100円				978-4810064643
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	生徒指導論		副題			
担 当 者	菅谷 正美					
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3	
授業の概要	生徒指導は、学習指導とともに学校教育で行われる教師の指導の大切な仕事である。生徒指導の意義と内容を理解するとともに、本授業では、学校教育の現場で起こっている生徒のさまざまな問題行動を取り上げ、その実態、背景、指導法等について学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	授業の到達目標として次の5点とする。 1 生徒指導と学習指導の違いを理解する。 2 生徒指導の意義と内容を理解する。 3 生徒指導の指導方法を理解し、実践力をもつ。 4 生徒指導上の具体的な問題について、自分の考えを持つ。 5 キャリア教育の視点から進路指導の意義を理解する。					
授業の方法・授業計画						
1	生徒指導の意義と目的					
2	生徒指導と教育課程					
3	生徒の現状と問題行動の実態					
4	問題行動の原因と背景					
5	中学生の発達の特徴と生徒指導					
6	高校生の発達の特徴と生徒指導					
7	生徒理解の方法					
8	生徒指導の方法					
9	生徒指導と学級経営					
10	生徒指導の組織体制と家庭・地域等との連携					
11	問題行動(いじめ)への具体的対応					
12	問題行動(暴力行為)への具体的対応					
13	問題行動(不登校)への具体的対応					
14	問題行動(自殺等)への具体的対応					
15	進路指導の内容と方法					
期末	試験実施					
各回の授業の内容について、学生が事前に文献に当たり調査し、発表する。その中から、最も重要なことをとりあげ、その背景、教育的意義、教育者としての行動等について説明する。						
評価方法及び評価基準	試験の得点及び授業中の発表の内容および、授業への参加意欲・態度等を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	分担された発表予定する内容については、文献にあたり調べておくこと。また、日頃から教育問題に関心をもち、自分の言葉で意見を述べるができるようにする。					
履修上の注意	受け身の授業参加ではなく、問題に対して積極的に自分の考えをもつこと					
テキスト	授業に必要なテキストは配布する。					
—						
—						
参考文献	文部科学省「生徒指導提要」教育図書 2011					

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教育相談		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	子どもと教育をめぐる諸問題に、教育現場における相談活動の視点から、理論的・実践的に考えていく。教育学、心理学、福祉学の理論と学校現場の実践の協働が教育相談には必要である。現代の子どもたちがストレスにさらされ、家族内のストレスが一番弱者である子どもに向けられることも多くなっている。課題を抱えながらも、子どもが親や教師に求めていることは「自分のことを認めてほしい」という素朴でけなげな願いではないかと思われる。授業では、ひととのつながりのなかで人は成長していくということを基盤とし、つながることとつなげることを大切にした教育相談について説明していく。				
授業のねらい・到達目標	教育相談とは何かについて自らの理解を深める。教育学、心理学、福祉学の理論を踏まえ、学校現場の諸問題について取り組めるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション				
2	教師に求められる臨床的視点				
3	子どもの発達課題と教育相談				
4	学校現場における「問題行動」と教育相談(1):問題行動のとらえ方と指導				
5	学校現場における「問題行動」と教育相談(2):意欲の乏しい子どもと指導・支援				
6	特別支援教育と教育相談				
7	予防・開発的取り組みと教育相談(1):構成的グループエンカウンター				
8	予防・開発的取り組みと教育相談(2):ソーシャルスキル教育				
9	保護者への支援と教育相談				
10	校内の相談システムと教育相談				
11	スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと教育相談(1):スクールカウンセラーの仕事				
12	スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと教育相談(2):スクールソーシャルワーカーの仕事				
13	専門機関との支援ネットワークと教育相談(1):校外の専門機関とのネットワーク				
14	専門機関との支援ネットワークと教育相談(2):ネットワーク支援を有効にするために必要なこと				
15	まとめ				
期末	試験実施				
教科書を中心に講義を行うが、グループワークも実施する。					
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加度・リアクションペーパー・学期末試験によって総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	日頃から、学校問題・福祉問題に関心を持つようにする。				
履修上の注意	授業内にグループワークを実施するので、遅刻・欠席をしないこと。 教員免許取得のための必須科目です。(教職に関する科目)				
テキスト	春日井敏之・伊藤美奈子編『よくわかる教育相談』ミネルヴァ書房			978-4-623-05878-5	
－					
－					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教育実習指導			副題	
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	事前指導として、教育実習の目的と内容および諸注意・心得について講義を行い、教育実習に行く前に準備しておくべき事柄と教育実習に必要な基礎知識を学ぶ。また、実習校との事前のやり取り、教育実習における実習校における振る舞い等、マナーや基本的な態度についても指導する。そして、教育実習を有意義なものとするために、教職への意識を高められるよう、「履修ファイル」を用いて、教師として必要な資質・能力について確認していく。 事後指導においては、実習報告と討議をおこない、レポートを提出してもらうことで教育実習の経験を批判的に振り返り、自らの足りない知識や技術等の課題を理解させる。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は、以下の3点である。第1に、教育実習を行う意味を理解すること。その為に、教育実習のガイダンスおよびオリエンテーションを行う。事前指導として、実習期間を有効に活用するための準備についての意識を向上させる。第2に、教育実習において学校教育現場を直接観察・参加することで、教職の意義ややりがいを知ると同時に教職の大変さを知ることとなる。それによって、教員となるための自らの資質を確かめ、教職への意欲を高められるよう指導する。第3に、これまで生徒・学生の視点からみてきた「教育」という営みを、教師の視点から捉えられるようになることを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：B－1(7)、C－1(2)、C－2(4)、C－3(1)～(5)、C－4(1)～(8)、D－1(1)、D－2(1)～(7)、D－3(1)～(5)、D－4(1)～(6)、D－5(1)～(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、教育実習の意義と目的			16	実習の報告と反省(実習における自己課題の確認、グループディスカッション)、実習日誌・記録と課題の確認
2	教育実習とは何か、教育実習の基礎知識			17	実習の自己評価、実習現場の評価と自己評価との比較検討
3	実習内規の説明、実習の日程と配当等について			18	実習を通しての自己課題のレポート提出・グループディスカッション
4	実習の心構え、留意点、「望ましい教育実習生」とは			19	
5	実習に対する抱負についてレポート提出・グループディスカッション			20	
6	実習現場の理解(現場の教員による講演)			21	
7	実習校でのオリエンテーションの受け方等について			22	
8	実習のねらいと内容、自己課題の設定			23	
9	安全への配慮と事故への対応			24	
10	学習指導案、実習の評価について			25	
11	実習テーマ(自己課題)と履修ファイルについて			26	
12	実習日誌の書き方、手引きの活用、記録等について			27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法及び評価基準	受講態度(30%)・授業における課題(60%)・自己評価(10%)をもとに、総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	教育実習に関する資料や文献、手引き、履修ファイル等を用いて、事前準備をしっかりとしてから実習に臨むことが必要です。また、自己課題については、特に、自ら資料等を調べ、教員に質問しに行き、実習を有効にするための学習が不可欠です。事後指導においても、実習の課題について、授業外の時間に「履修ファイル」を用いて自ら振り返る時間を設けることが必要です。				
履修上の注意	事後指導においては、個別面談による実習の振り返りの時間を設けます。				
テキスト	本学の教育実習の手引き、教育実習日誌、履修ファイルを使用する。				
－					
－					

参考文献	教育実習を考える会 編、『新編 教育実習の常識—事例にもとづく必須66項』、蒼丘書林 柴田義松・木内剛 編著(2011)、『教育実習ハンドブック[改訂版]』、学文社 高野和子・岩田康之 編(2010)、『教育実習 〔教師教育テキストシリーズ15〕』、学文社 その他にも、講義のテーマに関係する参考書および参考資料を授業の中で適宜紹介する。
------	--

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教育実習I		副題			
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美					
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4	
授業の概要	実習校における教育実習である。実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加などがある。教職課程で学んできた知識や技術が、実際の教育現場ではどのように実践されているのかを確認し、自らの教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。					
授業のねらい・到達目標	<p>①教師の行う多様な仕事を観察し、その一部を直接経験することで、教職の深さと責任の重さ、やりがいを実感すること。</p> <p>②実践を通して自らに足りない知識や技術を確認し、教師としての職務を遂行するうえで必要とされる最低限の知識と技能を身につけること。</p> <p>③児童・生徒の実態に応じた学習指導計画の立案および教育実践とその評価を通して、学習指導の在り方や計画と実践の関係を理解すること。</p> <p>④学習指導、道徳・人権教育、健康・安全教育、特別活動、教育相談・生徒指導等が、学習指導要領および学校における教育目標に基づいて行われていることを理解すること。</p> <p>⑤学級担任、校務分掌等の各種業務が、学校の組織的運営のもとに行われていることを理解すること。</p> <p>⑥学校教育が、家庭や地域との密接なかかわりのもとに行われていることを理解すること。</p> <p>上記の6つの目標(共通課題)の他に、「教職実践演習」のための「履修ファイル」を用いて、これまでの大学における学修を振り返り、教育実習での学びをよりよいものにするために、「自己課題」を設定して教育実習に臨むことになります。</p>					
授業の方法・授業計画						

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教育実習II		副題		
担 当 者	岩本 親憲、菅谷 正美				
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	実習校における教育実習(中学校社会科)である。実習校でのオリエンテーション、講話、観察・見学、参加実習(学習指導、生徒指導、学級経営)、課外活動等への参加などがある。教職課程で学んできた知識や技術が、実際の教育現場ではどのように実践されているのかを確認し、自らの教師としての資質能力、実践的指導力を高めることを目指していく。				
授業のねらい・到達目標	<p>①教師の行う多様な仕事を観察し、その一部を直接経験することで、教職の深さと責任の重さ、やりがいを実感すること。</p> <p>②実践を通して自らに足りない知識や技術を確認し、教師としての職務を遂行するうえで必要とされる最低限の知識と技能を身につけること。</p> <p>③児童・生徒の実態に応じた学習指導計画の立案および教育実践とその評価を通して、学習指導の在り方や計画と実践の関係を理解すること。</p> <p>④学習指導、道徳・人権教育、健康・安全教育、特別活動、教育相談・生徒指導等が、学習指導要領および学校における教育目標に基づいて行われていることを理解すること。</p> <p>⑤学級担任、校務分掌等の各種業務が、学校の組織的運営のもとに行われていることを理解すること。</p> <p>⑥学校教育が、家庭や地域との密接なかかわりのもとに行われていることを理解すること。</p> <p>上記の6つの目標(共通課題)の他に、「教職実践演習」のための「履修ファイル」を用いて、これまでの大学における学修を振り返り、教育実習での学びをよりよいものにするために、「自己課題」を設定して教育実習に臨むことになります。</p>				
授業の方法・授業計画					

2015/03/26(木)19:35

科 目 名	教職実践演習(中・高)		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	最初「履修カルテ」や「ライフコース図」(これまで受けてきた教育歴やライフイベントと、今後の予想を図示したもの)を用いて、4年間の教職課程での履修および自らの人生を振り返る作業を行う。また、自己分析の一環として、「話し方、きき方」に関するワークシートや「エゴグラム」等を用いて、コミュニケーション能力および性格の分析を行う。 ①教師としての責任感・意欲・愛情、②社会性や人間関係能力、③スクールカウンセリング(生徒理解と相談)に関する基本的知識と技能、④学校運営、学級経営等の技能、⑤「知ること」や「教えること」への意欲や自信(学習指導の技能)の観点から、自己評価、学生同士の相互評価、指導教員による形成的評価を随時行い、最後にレポートを作成させ総括的に評価する。				
授業のねらい・到達目標	本授業の到達目標は以下の2点である。第1に、これまでの教職課程の履修と自らの人生経験を振り返る作業を通して、4年間の履修の総括および自己分析(課題、長所・短所、コミュニケーションスキルの分析)を行うことを目標とする。第2に、自己分析の結果と教師に必要とされる資質能力とを照らし合わせ、教職への適性を考えること。今後のキャリア形成における課題(不足している知識や技能等)を自覚させ、教員として最小限必要な資質能力の統合・形成を目指すことを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目:全て】				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションおよび構成的エンカウンター。「履修カルテ」を用いた振り返り(自己分析)と、教育実習の課題の確認。(岩本、菅谷)				
2	「ライフコース図」を用いた振り返り(自己分析)と自らの人生の課題の確認。「話し方、きき方」ワークシートによるコミュニケーションスキルの確認と訓練。(岩本)				
3	社会性・人間関係能力について (講義、討論、訓練) (岩本)				
4	教師に必要とされる資質能力とは何か(講義、ペアワーク、討論) (岩本、菅谷)				
5	教師としての責任感・意欲・愛情とは① (教育実習で感じたこと、討論) (菅谷)				
6	教師としての責任感・意欲・愛情とは② (事例検討、討論) (菅谷)				
7	スクールカウンセリングに関する基本的知識と技能① (学級経営等の集団指導、特別支援教育とチーム援助、教育相談面接、守秘義務の扱い方) (岩本)				
8	スクールカウンセリングに関する基本的知識と技能② (アサーション、傾聴訓練、校内連携の方法、保護者対応、クレーム対応、) (岩本)				
9	教科指導に関する技能① (講義、教育実習での経験についてスピーチ) (菅谷)				
10	教科指導に関する技能② (講義、教育実習での経験についてスピーチ、討論) (菅谷)				
11	模擬授業(授業観察の方法、教師役・生徒役でのロールプレイ) (岩本、菅谷)				
12	模擬授業(教師役・生徒役でのロールプレイ、授業案の検討) (岩本、菅谷)				
13	模擬授業の授業分析と討論 (岩本、菅谷)				
14	ゲストティーチャー(現職の教員又は教員勤務経験者)による講話 (岩本、菅谷、ゲストティーチャー)				
15	「履修ファイル」の再確認および各自の課題と履修のまとめ (岩本、菅谷)				
期末	試験実施せず				
一人ひとりが自分の課題を確認しながら不十分な知識と技能を補うことができるように、VTRや実際の授業の観察、傾聴訓練のペアワーク、ワークシートによる作業、少人数での討論、プレゼンテーション、模擬授業等の多様な学習方法を組み合わせて学んでいく。					
評価方法及び評価基準	筆記試験は実施しない。出席状況、受講態度(発言、発表、ペアワーク、コミュニケーションスキルの訓練、模擬授業、ロールプレイ)とレポートを基にして総合的に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	授業および、教育実習と教職課程全体の記録(「履修ファイル」、成績評価)等を振り返り、自らに足りない課題を補う学習を随時すすんで行うこと。				
履修上の注意	「教職実践演習」を受講できるのは、中学校社会、高校公民、高校福祉のいずれかの教育実習が修了している学生(もしくは、その見込み)に限られる。				
テキスト	原田恵理子・森山賢一編著(2014)『自己成長を目指す教職実践演習テキスト』、北樹出版、(2014年3月末刊行予定)				
—	本学「履修ファイル」および教育実習に関する書類(教育実習の手引き、教育実習日誌や記録等)				
—					
参考文献	授業時に教材プリント・資料を配布する。また、講義のテーマに関係する参考書および参考資料を、授業の中で適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:45

科 目 名	福祉マインド実践講座			副題	
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	本講座は、これから社会福祉を広く学ぶ学生に対する具体的・実践的な「福祉マ インド」を醸成するための導入教育であり、座学と実践的なフィールド ワーク を織り交ぜた授業である。 毎回の講義で地域の福祉活動の紹介やボランティア募集が行われる。				
授業のねらい・到達目標	様々な形態による社会貢献活動への参加を通じて、「地域に深く根ざした大学」に通う学生としての自覚と責任感を持ち、さらには「他者との連帯」や「我欲・利己を捨てて奉仕する心」といった、福祉を学ぶ者としての重要な資質を早期に身につけることをねらいとする。 また、早期に福祉現場と関わることで、将来の進路に対する理解を深め、福祉人材としての意識の向上をめざす。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業の構成)			16	赤い羽根共同募金の説明と準備
2	ボランティア活動について(心構え)			17	赤い羽根共同募金活動の活動発表と反省
3	ボランティア活動について(対象と領域)			18	外部講師招聘による福祉マインド醸成講義
4	ボランティア活動について(先輩の体験)			19	ボランティア活動体験発表会
5	卒業生の体験談			20	ミニたまゆりの詳細について(必修選択ボランティア活動)
6	当事者の要望			21	ミニたまゆりへの参加
7	ミニたまゆり、地域パソコン倶楽部について			22	
8	赤い羽根共同募金等について			23	
9	夏期ボランティア(自由選択ボランティア)活動について			24	
10				25	
11				26	
12				27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末				期末	期末試験実施
評価方法及び評価基準	期末試験、授業態度、レポート、プレゼンテーションを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、授業の方法・授業計画に示された内容について教員・図書館・インターネットなどを活用して情報収集しておく。 事後学習として、ボランティア活動後の活動記録作成を必ず行い整理しておく。				
履修上の注意	授業が不定期であるため、でんでんぱんの掲示に留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	授業内で案内する。				

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	日本国憲法		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日本国憲法は、主権者である国民によって確定された最高法規である。我が国は法治国家であり、現在効力を有している法律は約1800件ある中で、憲法は、「国民主権」「平和主義」「基本的人権の保障」の基本原則を掲げて、これらの法律の頂点に位置している。本講義では、わたしたち国民によって作られ、わたしたちのための日本国憲法について、より深い理解を得られるようになることを目指す。				
授業のねらい・到達目標	本学は人生のはじめから終焉までの各段階の社会福祉を担う人材を育てる大学であるが、社会福祉とは、人間の生活そのものに接することで人々に幸せをもたらす、社会に密着した分野といえる。社会福祉を担う人材の育成にあたっては、我が国社会の仕組みの根幹を定める日本国憲法全般、中でも第25条に定める「社会福祉」について学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では、日本国憲法についての、より一層の深い理解を図ることを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の本質				
3	日本国憲法の歴史				
4	日本国憲法における基本三原理(国民主権・平和主義・基本的人権の保障)				
5	日本国憲法の「前文」の意義				
6	基本的人権保障の意義				
7	基本的人権の保障―権利主体、自由権など				
8	基本的人権の保障―第25条に定める「社会福祉」の意義				
9	基本的人権の保障―その他				
10	日本国憲法が定める国家・社会の仕組みと制度―「天皇」「三権分立」「地方自治」「その他」				
11	国の立法権―国会				
12	国の行政権―内閣				
13	国の司法権―裁判所				
14	地方自治				
15	ここまでの確認。憲法の意義とは				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行う。					
評価方法及び評価基準	期末課題、コメントシート及び授業内の活動の得点を総合評価。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。				
履修上の注意	自分達によって作られ、自分達のための日本国憲法を、より広く、より深く理解しようという熱意で、本科目に取り組むことを期待する。指定テキストは、授業の際に必ず持参するようにすること。				
テキスト	井上正仁他編『ポケット六法 平成27年版若しくは28年度版』(有斐閣) 初宿正典他編著『目で見る憲法』(有斐閣)				
―					
―					
参考文献	授業の進行、必要に応じ適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	球技スポーツ【エントリー】		副題		
担 当 者	山本 享				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「友達づくり」と「健康づくり」 興味があったら履修してみよう。 集団スポーツ活動の実践を通じて、「スポーツコミュニケーション」「ヘルスリテラシー」を身につけ、「社会人基礎力」を育成することを目的とする。スポーツ活動は体育館半面ずつ実施する2種目から各自選択する。 1) 授業展開 2) 挨拶・出欠確認 3) 準備運動 4) 事前指導(安全面の確認、チームづくり、チームでの作戦会議・役割確認) 5) スポーツ活動 6) 片づけ・振り返り(レポート記入) ※社会人基礎力 「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」				
授業のねらい・到達目標	[授業のねらい] 集団スポーツ活動の実践を通じて、「スポーツコミュニケーション」「ヘルスリテラシー」を身につけ、「社会人基礎力」を育成する。 [到達目標] 「スポーツコミュニケーション」誰とでも認め合い、協力することができるようになる。 「ヘルスリテラシー」日常生活の中にスポーツ実践を取り入れ、活動的なライフスタイル行動者となる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業説明、注意点など)				
2	学校における体育活動の役割(座学)				
3	バスケットボール1(男女別) 基礎技術練習				
4	バスケットボール2(男女別) ミニコートを使ったチーム練習				
5	バスケットボール3(男女別) ミニゲーム				
6	フットサル1(男女別) 基礎技術練習				
7	フットサル2(男女別) ミニコートを使ったチーム練習				
8	フットサル3(男女別)				
9	選択(混合) バスケットボール／フリンゴ(バレーボール)				
10	選択(混合) バスケットボール／フリンゴ(バレーボール)				
11	選択(混合) フットサル／ゲートボール チーム練習				
12	選択(混合) フットサル／ゲートボール ゲーム				
13	アルティメット(混合)1 基礎技術練習				
14	アルティメット(混合)2 チーム練習・ゲーム				
15	レクリエーションスポーツ1 基礎技術練習				
期末	試験実施なし				
種目は適時順番を変更する場合があります。毎時間、授業開始時に挨拶、準備運動、事前指導を行い、授業終了時に片づけと振り返りを行う。					
評価方法及び評価基準	平常点 30点 ⇒ コミュニケーション・技能・態度を評価 レポート点 70点 ⇒ 振り返りによる授業の達成度を評価				
事前・事後学習の内容	[事前] ルール等個人で調べられることは授業前に各自調べておく。授業では、人が集まってできることを行う。 [事後] 日常生活の中にスポーツ実践を取り入れ、活動的なライフスタイル行動者となる。				
履修上の注意	マナーを守って楽しく活動しよう。授業中は、スポーツウェアと体育館シューズ(屋内シューズ)を使用すること。				
テキスト					
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	スポーツ・コミュニケーション【エントリー】		副題		
担 当 者	外川 重信				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	将来、スポーツを楽しみ、実践するための授業とする。バレーボール、バスケットボール、バドミントン、フットサル、卓球などを主な教材として、理論と実技を併用した授業をおこなう。実技では、楽しみながら実践するので、ゲームを中心におこなう。理論では、スポーツの概念と歴史、体カトレーニングを学習する。また個々のスポーツではルール、怪我の防止、なども学習する。				
授業のねらい・到達目標	メジャースポーツの基本的な技術の習得と、体力の維持・向上をめざす。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、スポーツの理論1(概念と歴史)				
2	バレーボール1(基本技術:トスとサーブ)				
3	バレーボール2(基本技術:アタックとレシーブ)				
4	バレーボール3(男女別ゲーム)				
5	バレーボール4(男女混合ゲーム)				
6	バスケットボール1(基本技術:ドリブルとシュートとパス)				
7	バスケットボール2(ゲーム:マンツーマンデフェンス)				
8	バスケットボール3(ゲーム:ゾーンデフェンス)				
9	バドミントン1(基本技術:ハイクリアーとドライブなど)				
10	バドミントン2(シングルスとダブルスゲーム)				
11	卓球1(基本技術:サーブとラリー)				
12	卓球2(シングルスとダブルスゲーム)				
13	フットサル1(基本技術:ドリブルとシュート)				
14	フットサル1(ゲーム)				
15	スポーツの理論2(体カトレーニング)				
期末	試験実施せず				
スポーツ種目は適時順番を変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力・学習意欲・学習態度及び授業の理解度を総合して評価する				
事前・事後学習の内容	(事前)ルール等をよく調べた上で授業に臨むこと。(事後)反復練習によって技術の向上を図ること。				
履修上の注意	①履修希望者が多い場合、人数制限をすることがある。②授業中は、スポーツウェアと体育館用シューズを使用すること。③着替えは体育館更衣室におこない、必ず貴重品は体育館フロアに持ってくる。教員控え室には、貴重品を入れるロッカーとその鍵がある。④更衣室に、常時私物を置かないこと。⑤シャワーを使用したい時は、教員に連絡すること。				
テキスト	必要に応じて配付する。				
—					
—					
参考文献	なし				

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	アドベンチャー・スポーツ		副題			
担 当 者	外川 重信					
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1	
授業の概要	ロッククライミングや沢登り、イカダで湖を横断するなどの挑戦を主眼とした冒険活動を体験する。宿泊はバンガローに泊まり、自炊もおこなう。					
授業のねらい・到達目標	冒険活動によって、人とのコミュニケーション、個人の挑戦、グループで挑戦する体験を経験する。そして自分の可能性や人と協力しておこなう事の可能性について深め、セルフディスカバリー（自己発見）の一助とする。					
授業の方法・授業計画						
<p>夏休みに3泊4日の集中授業として実施する。</p> <p>スケジュール</p> <p>1日目：イニシアティブゲーム、いかだを作って湖を横断する（アイスブレイク）</p> <p>2日目：ロッククライミング（個人の挑戦）</p> <p>3日目：沢登り（グループで挑戦）</p> <p>4日目：まとめ（ふりかえり）</p> <p>＜日程は、天候などによって変更があり得る。＞</p> <p>実施期日（予定）：9月上旬</p> <p>実施場所（予定）：山梨県西湖及び神奈川県丹沢</p> <p>宿泊形態：バンガロー泊で自炊</p> <p>募集人数：16名とし、参加者が多い場合は抽選とする。</p> <p>持ち物：水着、スポーツシューズ、懐中電灯など家庭で準備できるものは各自で持参するが、ヘルメット、ザイルなどの専門の道具は現地で貸与する。</p>						
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。					
事前・事後学習の内容	（事前）オリエンテーションに参加すること。安全なアウトドアーを行うための理論をよく調べておくこと。（事後）理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。					
履修上の注意	普段から体力作りをしていることが望ましい。団体に宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。					
テキスト	必要に応じて配付する。					
－						
－						
参考文献	なし					

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	スキー・スポーツ		副題		
担 当 者	外川 重信				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	スノースポーツの一つであるスキーの基本的な技術及び理論を習得する。実技では、技術レベルに応じた班別の指導とする。夜の講義の理論では、スキーの構造と回転の仕組み、安全行動のとマナーを学習する。事前のオリエンテーションもおこなう。				
授業のねらい・到達目標	スキーのもつ楽しさと、自然の美しさ・厳しさを感じながら、基本的な技術と安全行動を習得する。				
授業の方法・授業計画					
<p>春休みに3泊4日の集中授業として実施する。「スノーボード・スポーツ」と並行しておこなうので、二つの集中授業を同時に履修することはない。</p> <p>スケジュール</p> <p>1日目: バス移動 午後:実技講習 夜:講義</p> <p>2日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義</p> <p>3日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義</p> <p>4日目:午前:実技講習 バス移動</p> <p><3日目に希望者のみSAJ公認パッチテストをおこなう></p> <p>実施期日:2月中旬から3月上旬</p> <p>実施場所:未定</p> <p>宿泊形態:旅館又はホテル</p> <p>募集人数:無制限</p> <p>持ち物:スキーはレンタルが可能、ウェアは大学にて無料貸出が可能。詳しいことは、事前オリエンテーションで説明する。</p>					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	(事前)オリエンテーションに参加すること。安全なスキー上達のための理論をよく調べておくこと。(事後)スキーの理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。				
履修上の注意	普段から体力作りをしていることが望ましい。団体に宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。				
テキスト	必要に応じて配付する。				
—					
—					
参考文献	なし				

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	スノーボード・スポーツ		副題		
担 当 者	外川 重信				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	スノースポーツの一つであるスノーボードの基本的な技術及び理論を習得する。実技では、技術レベルに応じた班別の指導とする。夜の講義の理論では、スノーボードの構造と回転の仕組み、安全行動のとマナーを学習する。事前のオリエンテーションもおこなう。				
授業のねらい・到達目標	スノーボードのもつ楽しさと、自然の美しさ・厳しさを感じながら、基本的な技術と安全行動を習得する。				
授業の方法・授業計画					
春休みに3泊4日の集中授業として実施する。「スキー・スポーツ」と並行しておこなうので、二つの集中授業を同時に履修することはない。 スケジュール 1日目: バス移動 午後:実技講習 夜:講義 2日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 3日目:午前:実技講習 午後:実技講習 夜:講義 4日目:午前:実技講習 バス移動 ＜3日目に希望者のみSAJ公認パッチテストをおこなう＞ 実施期日:2月中旬から3月上旬 実施場所:未定 宿泊形態:旅館又はホテル 募集人数:無制限 持ち物:スノーボードはレンタルが可能、ウェアは大学にて無料貸出が可能。詳しいことは、事前オリエンテーションで説明する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	(事前)オリエンテーションに参加すること。安全なスノーボード上達のための理論をよく調べておくこと。(事後)理論及び反復練習によって技術の向上を図ること。				
履修上の注意	普段から体力作りをしていることが望ましい。団体に宿泊し、生活時間も授業と考える。健康診断を受けていて、心身共に4日間の集中授業ができること。				
テキスト	必要に応じて配付する。				
－					
－					
参考文献	なし				

2015/03/26(木)19:47

科 目 名	英語コミュニケーション/英語コミュニケーション【エントリー】			副題	
担 当 者	Scott A Ree				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日常的なトピックと社会福祉現場の場面ごとに必要な語彙や表現を学びます。テープによるモデル会話の聴解、教員との会話、学生同士のペアワークやロールプレイングなどの作業を通して、コミュニケーション能力を向上させます。なお、学生の発話を促し、活動的で楽しい授業にするためにゲームなども利用する予定です。授業は主に下記テキストを中心に進めますが、必要に応じて補助教材を配付します。				
授業のねらい・到達目標	本講座は、日常生活に必要な「聞く」力と「話す」力を高め、身近な事柄についての的確に対応する基本的なコミュニケーション能力を身につけることを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス	16	お昼:リスニング		
2	子育て英語の初歩:リスニング	17	お昼:スピーキング		
3	子育て英語の初歩:スピーキング	18	トイレの声掛け:リスニング		
4	ようこそ、保育園へ!:リスニング	19	トイレの声掛け:スピーキング		
5	ようこそ、保育園へ!:スピーキング	20	喧嘩:リスニング		
6	時間と数字:リスニング	21	喧嘩:スピーキング		
7	復習	22	怪我と病気:リスニング		
8	方角:リスニング	23	怪我と病気:スピーキング		
9	方角:スピーキング	24	電話:リスニング		
10	クラスメイトのとお出会う:リスニング	25	電話:スピーキング		
11	クラスメイトのとお出会う:スピーキング	26	遠足:リスニング		
12	送り迎え:リスニング	27	遠足:スピーキング		
13	送り迎え:スピーキング	28	赤ちゃんケア		
14	保育園での仕事	29	卒業式		
15	会話を発表する	30	会話を発表する		
期末	実行なし	期末	実行なし		
評価方法及び評価基準	出席状況、授業態度、課題、小テスト等によって、総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前: 前回レッスンで登場した単語と表現を復習し、宿題を完了する。 事後: テキストを復習し、新しい単語や表現を練習としてクラスメイト、教員と会話で使う。				
履修上の注意	出席ならびに授業中の積極性が重視されます。上記目標達成には、積極的に授業に参加しようとする学生の意欲と予習・復習が必須です。				
テキスト	Angela Buckingham, Miles Craven and David Williamson, Get Real New Edition Student Book 1, Macmillan.				
—					
—					
参考文献	必要に応じて、授業中に紹介します。				

2015/03/26(木)19:48

科 目 名	実用英語I/実用英語			副題	
担 当 者	久村 研				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	世界の3人～4人に1人が、何らかのコミュニケーションの手段として、英語を使用しているといわれています。科学技術、経済、文化などの分野はもちろん、福祉・介護の分野でも、インターネット上で英語による情報が溢れています。これからは、ネット上の英語による情報を手に入れる必要性がますます高まるものと考えられます。そこで、本講座は、福祉・介護を専攻する学生の学習に役立つテキストを選びました。福祉・介護関連の英文を読み、英語による関連用語に親しんでもらいます。さらに、一般的な英語力の養成も必要なので、投げ込み教材を用いてリスニングの練習も行います。				
授業のねらい・到達目標	福祉・介護関連の英語の用語に慣れ親しむことにより、最終的にネット上の福祉関連の英語情報を何とか理解できるようになることが目標です。同時に、リスニング練習を加えることによって、英語力全般の強化を目指しています。				
授業の方法・授業計画					
1	授業説明。英語力診断テスト。			16	前期復習、用語テスト
2	Unit 1 The Four Keys to Successful Caregiving (Reading)、リスニング(私信1)			17	Unit 7 Helping People Change Their Position (Reading)、リスニング(指示文1)
3	Unit 1 続き(Dialogue)、リスニング(私信2)			18	Unit 7 続き(Dialogue)、リスニング(指示文2)
4	Unit 2 Using Mobility and Lifting Aids (Reading)、リスニング(数字など)			19	Unit 8 Helping with Recreational Activities (Reading)、リスニング(健康1)
5	Unit 2 続き(Dialogue)、リスニング(曜日、日付など)			20	Unit 8 続き(Dialogue)、リスニング(健康2)
6	Unit 3 Helping People with Meals (Reading)、リスニング(時刻など)			21	Unit 9 Helping People to Communicate (Reading)、リスニング(サービス1)
7	Unit 3 続き(Dialogue)、リスニング(道案内)			22	Unit 9 続き(Dialogue)、リスニング(サービス2)
8	Units 1-3の復習、リスニング(総合)			23	Units 7-9 復習、リスニング(総合)
9	Unit 4 Helping People Use the Toilet (Reading)、リスニング(交通手段1)			24	Unit 10 Helping People Suffering from Disease and Illness (Reading)、リスニング(注文1)
10	Unit 4続き(Dialogue)、リスニング(交通手段2)			25	Unit 10 続き(Dialogue)、リスニング(注文2)
11	Unit 5 Helping People with Their Bath (Reading)、リスニング(体調1)			26	Unit 11 Helping Children to Develop (Reading)、リスニング(お金1)
12	Unit 5 続き(Dialogue)、リスニング(体調2)			27	Unit 11 続き(Dialogue)、リスニング(お金2)
13	Unit 6 Helping People with Dressing and Grooming (Reading)、リスニング(職業1)			28	Unit 12 Helping with Domestic Duties in a Client's Home (Reading)、リスニング(標識1)
14	Unit 6 続き(Dialogue)、リスニング(職業2)			29	Unit 12 続き(Dialogue)、リスニング(標識2)
15	Units 4-6 復習、対話練習、リスニング(総合)			30	Units 10-12 復習、対話練習、リスニング(総合)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
原則として、新しいUnitに入る場合は、CDIによるリスニング練習(プリント配付)→リーディングの単語チェック→読み→内容把握→音読→英語によるQ&A、の手順で進める。「Unitの続き」の授業では、CDIによるリスニング練習(プリント配付)→リーディング単語テスト→Dialogueの単語チェック→読み→内容把握→対話練習(音読)の順で行う。					
評価方法及び評価基準	単語などの小テストと復習テスト(約7割)と予習状況および授業参加度(約3割)など総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	ReadingとDialogueの予習(単語調べ、内容理解)は必須。さらに、小テストを頻繁に行うので、復習は欠かせない。				
履修上の注意	本講座は、英語に興味・関心がある学生に向いており、基礎英語をやり直そうとする学生には不向きです。				
テキスト	A Helping Hand--Comprehensive English for Caregivers 「福祉・介護系学生のための総合英語」清水雅子、南雲堂				978-4-523-17557-5
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)19:48

科 目 名	実用英語I/実用英語			副題	
担 当 者	塚本 まゆみ				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	世界の3人～4人に1人が、何らかのコミュニケーションの手段として、英語を使用しているといわれています。英語は「国際語」としてその地位が確立されていると考えられます。科学技術、経済、文化などのあらゆる分野で、国際交流を英語で実践している人々がいます。最近では、日本の会社でも、社内の会議は英語で行うところも出てきました。このような社会で、まったくの英語音痴では、世の中の動きについていくことが難しくなっています。そこで、少なくとも、これまで学習してきた英語の基礎をやり直し、少しでも使えるようになっておくことが重要です。本講座は、入門期を終えた英語学習者が、個人生活や大学生活などの場面で、簡単に意味のある質問や、手短かだが的確な応答ができるようになることを目指します。テキストは、この狙いに沿うよう編集されたものを選びました。つまり、日常的で具体的な場面で、リスニング、リーディング、文法の3部構成で学習し、総合的な英語力のパワーアップを図ることになります。				
授業のねらい・到達目標	日常的な場面で、確実に意味が通る英語の質問や応答ができる、基礎的な英語使用者の力をつけることを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション(基礎力テスト、授業の進め方、評価方法、など)			16	前期授業内容の復習テストと解説・演習
2	Unit 1 自己紹介(名詞の用法)			17	Unit 13 機内で(時・天候などを表すit)
3	Unit 2 家族・ペット(動詞の用法)			18	Unit 14 空港で(接続詞)
4	Unit 3 趣味(語順)			19	Unit 15 ホテルで(不定詞)
5	Unit 4 大学生活(人称代名詞)			20	Unit 16 レストランで(形容詞)
6	Unit 5 食べ物(疑問詞)			21	Unit 17 ショッピング(頻度を表す副詞)
7	Unit 6 コンサート(Howの用法)			22	Unit 18 ベースボール(比較級)
8	Units 1～6の復習			23	Units 13～18の復習
9	Unit 7 道案内(助動詞can, may, must)			24	Unit 19 ミュージカル鑑賞(現在完了形)
10	Unit 8 日本文化紹介(助動詞would, could, should)			25	Unit 20 旅行案内(受動態1)
11	Unit 9 ジェスチャー(前置詞)			26	Unit 21 トラブル・シューティング(受動態2)
12	Unit 10 観光案内(過去形、現在形、未来形)			27	Unit 22 体調不良(分詞)
13	Unit 11 航空券をNetでGet(現在進行形)			28	Unit 23 電話での申し込み(動名詞)
14	Unit 12 Emailを送る(文法のまとめ)			29	Unit 24 さよなら、アメリカ！(文法のまとめ)
15	Units 7～12の復習とまとめ			30	Units 19～24の復習とまとめ
期末	試験実施なし			期末	試験の実施なし
各Unitは音声によるリスニングとスピーキングから入り、リーディング、文法に進みます。随時復習テストを実施して、知識の定着を確認します。					
評価方法及び評価基準	原則として授業内で実施するテスト70%、授業参加度(態度、積極性、自主性など)30%で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前:授業計画にて授業内容を確認し、テキストの該当部分の下調べをする。 事後:小テストにそなえて、十分な復習をし、知識の定着をはかる。				
履修上の注意	授業では、辞書を持参し、自主的な学習が求められるので、向上心のある学生の履修が望ましい。				
テキスト	Forerunner to Power-Up English(総合英語パワーアップ<入門編>)、JACETリスニング研究会、南雲堂				978-4-523-17624-4
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)19:48

科 目 名	コンピュータ・リテラシーI/コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	社会におけるコンピュータの利用率は年々高まり、大学の学習活動においてもコンピュータは必要不可欠なものとなっている。またインターネットを代表とする高度情報通信技術の発達により国内および・海外との情報交換・情報収集も本格的に行われるようになり、学生がコンピュータを自分の道具として手軽に利用できるようになることは大変重要な課題である。				
授業のねらい・到達目標	情報および基礎的なコンピュータの概念を学ぶ。キーボード入力、周辺機器の利用、アプリケーションの利用、学内ネットワークの利用など情報とコンピュータを活用する上で必要となる基礎知識および基礎技術を学ぶ。具体的には、インターネットや電子メールなどのネットワーク活用、レポート作成やビジネス文書などの文書作成、数式・関数を利用した計算やグラフ作成などの表計算ソフトの利用方法を身につける。				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、個人情報について			16	表計算ソフトの概要と計算式に必要な数学の復習
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	表計算1)データ入力と編集、数式
3	インターネットの基礎と情報検索			18	表計算2)相対参照と絶対参照
4	文書作成1)文書作成ソフトの基礎(入力と編集)			19	表計算3)セルの書式設定、罫線
5	文書作成2)文書の書式設定(ページレイアウト、印刷など)			20	表計算4)グラフ作成1(用途と基本構成)
6	文書作成3)文章の書式設定(箇条書き、行間、文字修飾)			21	表計算5)グラフ作成2(グラフの設定変更)
7	文書作成4)表作成と図の挿入			22	表計算6)関数1(合計、平均、最大、最小、カウント)
8	文書作成5)レポート作成サポート			23	表計算7)関数2(順位、四捨五入、判定など)
9	プレゼンテーション1)情報整理法と発表技法			24	表計算8)関数3(条件による集計、表の検索)
10	プレゼンテーション2)PCプレゼンテーション基礎			25	表計算9)データベースと集計(データ並替え、抽出)
11	プレゼンテーション3)PCプレゼンテーション応用			26	表計算応用1)アンケート作成とデータ
12	文書応用1)広報紙のデザイン			27	表計算応用2)アンケートデータ単純集計
13	文書応用2)広報紙の作成			28	表計算応用3)アンケートデータクロス集計
14	文書作成の総合演習問題1(ビジネス文書)			29	総合演習問題1(表計算総括)
15	文書作成の総合演習問題2(レポート作成)			30	総合演習問題2(文書作成と表計算の複合)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
評価方法及び評価基準	授業内評価とする。授業への取り組み姿勢および課題(40%)、総合演習問題等(60%)によって評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当部分のテキストを予習した上で授業に臨むこと。授業後は、十分な復習を行い、知識・技術の定着をはかる。				
履修上の注意	Microsoft Office2013を使用して授業を行う。				
テキスト	『30時間アカデミック 情報リテラシー Office2013』(実教出版)				978-4-407-33253-7
—					
—					
参考文献	必要に応じてプリントを配付する。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	障害児教育論		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	平成19年度の法改正により、従来の特殊教育は特別支援教育へと大きく転換した。過去の障害児教育の歴史や障害観、教育観を学び、これからの特別支援教育の在り方を展望する。特別支援教育の理念、教育課程、障害種別の指導法を探る。				
授業のねらい・到達目標	障害児教育全般について触れるが、特に特殊教育から特別支援教育への転換の背景にあるもの、たとえば国際的な潮流であるインクルージョンや障害観の変遷について概観し、各障害別の指導課題について学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	障害児教育の歴史(世界編)				
2	障害児教育の歴史(日本編)				
3	障害の分類及び学習児童要領の理解				
4	特殊教育から特別支援教育へ				
5	視覚障害の教育				
6	聴覚障害の教育				
7	知的障害の教育				
8	自閉症の教育①自閉症の特徴				
9	自閉症の教育②自閉症の教育支援				
10	肢体不自由・重度・重複障害の教育				
11	病弱・身体虚弱の教育				
12	学習障害(LD)の教育				
13	注意欠陥多動性障害(ADHD)の教育				
14	高機能自閉症・アスペ[ルガー]症候群の教育				
15	個別の指導計画・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメを中心にした講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価、および学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	よくわかる障害児教育 石部元雄他編 ミネルヴァ書房				
—					
—					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	知的障害者の心理		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	知的障害児の心理特性や発達に応じた教育ができるように、能力の水準に応じて考えるべき問題と、能力の水準に関係なく蓄積されていく知識や経験の区別について学び、知的障害児の心理特性に応じた教育のあり方について理解を深める。具体的には、心理アセスメントの結果に基づいて、個人の心理特性を理解し、個別の指導計画に結びつける手だてについて学習する。また生涯発達の視点にたって、知的障害をもった人とその家族の生活を豊かにすることができるような支援のあり方について考える。				
授業のねらい・到達目標	1. 知的障害の定義と分類について理解する。 2. 知的障害の心理アセスメント法について学ぶ。 3. 知的障害のある人の認知・学習過程の特性と援助について学ぶ。 4. 知的障害のある人の生活・行動に関する援助について学ぶ。 5. 知的障害のある人の家族への心理的援助のあり方について考える。				
授業の方法・授業計画					
1	知的障害とは				
2	知的障害の早期発見・早期療育				
3	知的障害児の就学相談				
4	心理アセスメントの活かし方				
5	知的障害児の心理特性と発達支援(1)知覚				
6	知的障害児の心理特性と発達支援(2)刺激・反応の学習				
7	知的障害児の心理特性と発達支援(3)刺激クラスの学習				
8	知的障害児の心理特性と発達支援(4)言語の機能				
9	知的障害児の心理特性と発達支援(5)言語獲得に対するアプローチ				
10	知的障害児の心理特性と発達支援(6)数の概念				
11	知的障害児の心理特性と発達支援(7)記憶				
12	知的障害と関連する障害の理解(1)自閉症				
13	知的障害と関連する障害の理解(2)ダウン症				
14	知的障害と関連する障害の理解(3)LD・ADHD				
15	家族への心理的援助				
期末	試験実施なし				
主として講義形式で行う。					
評価方法及び評価基準	提出物(リアクションペーパー、課題)、期末レポートなどを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、教科書で予習をしてくる。また事後学習としては、教科書、プリント、ノートなどで復習し、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	『知的障害の心理学―発達支援からの理解』 小池 敏英・北島 善夫 (著) (北大路書房)				ISBN-10: 4762822159
—					
—					
参考文献	授業時に適宜紹介する。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	知的障害者の生理・病理		副題		
担 当 者	長田 洋和				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	知的障害 (intellectual disability) は、その用語ですら、いまだ流動的であり、世界中での理解が統一されていないと言えます。例えば、アメリカ精神医学会のDSM-5では知的能力障害 (知的発達症／知的発達障害) とされている一方、アメリカの公法では精神遅滞 (mental retardation) とされています。世界保健機構のICD-11 では、知的能力障害とされています。診断基準も徐々に改訂が進んでいます。知的障害の生理・病理についての現在のおよび発展しつつある理解と社会の中での人々の生活に影響を与える要因を取り入れるためにも、世界的な基準をもとに知的障害の生理・病理を理解し、知的障害を有する児・者をよりよく援助するための知識を得ます。				
授業のねらい・到達目標	知的障害児・者の定義、分類を世界的な基準をもとに学びます。世界保健機構の理論的モデルの理解から、診断基準、分類 (分類体系および病因と予防) に焦点を当てます。必要に応じて、知的障害医療の現状についても講義する他、病理・生理の実際を視聴覚教材を用いて、より具体的かつ実践的な理解を目指します。				
授業の方法・授業計画					
1	講義方針の確認				
2	知的障害の定義				
3	理論的モデルの理解				
4	知的障害の操作的定義				
5	知的障害の定義の変遷				
6	知的障害の多次元性				
7	知的障害の病因				
8	診断のための知能評価法				
9	診断のための適応行動評価法				
10	知的障害の分類体系				
11	知的障害の病因論 (危険因子)				
12	知的障害の病因 (行動的表現型)				
13	知的障害児・者にみられる身体的健康の障害				
14	知的障害児・者にみられる精神障害				
15	まとめと最新研究動向				
期末	試験実施なし				
プレゼンテーション (PPT, Keynote) での講義を行います。 視聴覚教材を用いた講義の際には、課題を出します。					
評価方法及び評価基準	授業内レポート (60%)、平常点評価 (40%)				
事前・事後学習の内容	事前: シラバスにて授業計画を確認の上、最低限の知識の整理を行う。 事後: 配布プリントに従い授業を進めるので、授業中に指示する参考文献で補習する。				
履修上の注意	試験の際は、配布プリントは持ち込み可とします。				
テキスト	プリントを配布します。				
—					
—					
参考文献	授業中に適宜、指示します。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	肢体不自由者の心理		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	肢体不自由児の発達の一般的特徴を各発達領域にわけて講義します。また肢体不自由の大部分をしめる脳性まひ、知的障害を随伴した肢体不自由児の心理的特徴について講義します。さらには、肢体不自由児の生涯発達にかかわる理論と支援のあり方、中途障害の心理的適応と支援、家族への支援、介助者の心理などについても事例の検討を交えながら講義します。				
授業のねらい・到達目標	1. 肢体不自由の定義・分類について学ぶ。 2. 肢体不自由児の発達とその特徴について学ぶ。 3. 肢体不自由児の心理的特徴に基づいた支援のあり方について学ぶ。 4. 肢体不自由児の家族への心理的援助について考える。				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由とは				
2	肢体不自由児の発達(1)発達のとらえ方				
3	肢体不自由児の発達(2)発達と環境との関係				
4	肢体不自由児の発達(3)教材づくり				
5	肢体不自由児の心理的特性と指導(1)視知覚認知の発達				
6	肢体不自由児の心理的特性と指導(2)コミュニケーションの発達				
7	肢体不自由児の心理的特性と指導(3)コミュニケーションの指導				
8	肢体不自由児の心理的特性と指導(4)情緒・社会性の発達				
9	肢体不自由児の心理的特性と指導(5)ボディイメージの発達				
10	肢体不自由児の心理的特性と指導(6)動作法				
11	中途障害児(者)の心理的特徴				
12	脳性まひ児の心理的特徴				
13	重症心身障害児の心理的特徴				
14	進行性筋ジストロフィー児の心理的特徴				
15	肢体不自由児の家族への支援				
期末	試験実施なし				
授業は主として講義形式で行います。					
評価方法及び評価基準	課題の提出状況、期末レポートの内容を基に総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	授業で配布される資料に基づき予習・復習をし、疑問点があれば次回の授業で質問をすること。				
履修上の注意	配布資料が多いため、資料を整理するためのファイルを用意してください。				
テキスト	授業中にプリントを配布します。				
—					
—					
参考文献	講義の中で、適宜参考文献を紹介します。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	肢体不自由者の生理・病理		副題		
担 当 者	宮崎 敦子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	肢体不自由児・者が持つ、生活上あるいは学習上の困難性を理解し、療育、教育、支援に必要な発達の知識とその障害、脳病理、リハビリテーションなどについて概説する。さらに、肢体不自由の代表的疾患とした脳性麻痺を中心に脳疾患の合併症、後遺症、病的に随伴しやすい障害を詳細に取り上げ、リハビリテーションについての考え方も含め解説する。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由児・者の現状及び動向を理解し、そのために求められる障害を配慮した知識や対応策を身につける。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、講義の目的、内容、進め方、評価方法、参考書について 肢体不自由についての概説				
2	正常な運動と発達(1) 骨格器				
3	正常な運動と発達(2) 反射・神経				
4	肢体不自由者の理解(1) 肢体不自由の定義と肢体不自由の起因疾患について				
5	肢体不自由者の理解(2) 脳性麻痺について、肢体不自由児に重複してみられる障害とその病理について				
6	肢体不自由児の理解(3) 筋ジストロフィー、二分脊椎等の病理について、肢体不自由との重複障害児の生理・病理				
7	肢体不自由児の教育(1) 脳損傷性肢体不自由と生理、病理に応じた自立活動の実際				
8	肢体不自由児の教育(2) 非脳損傷性肢体不自由と生理、病理に応じた自立活動の実際				
9	肢体不自由児の教育(3) 様々な合併症及び知的障害と病弱の重複障害児の病理・生理・心理に応じた指導について				
10	病理・生理の特徴から見た医療的ケアの基本的な考え方				
11	障害児者に関する法律と制度				
12	障害児・者のQOL(quality of life 生活の質)				
13	リハビリテーション医療の現状				
14	バリアフリー 肢体不自由の心理・生理・病理を踏まえた物理的、社会的、心理的バリアについて				
15	まとめ				
期末	テスト				
座学。					
評価方法及び評価基準	授業への参加度と期末テストに基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	事後学習 宿題として出された課題に取り組むこと。 事前学習 事前に提示された課題について下調べを行うこと。				
履修上の注意					
テキスト	肢体不自由児、病弱・身体虚弱児教育のためのやさしい医学・生理学/ジアース教育新社/竹田一則				9784921124915
－					
－					
参考文献	講義使用の際に文献を提示する。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	知的障害児教育I		副題		
担 当 者	竹村 洋子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	知的障害児の障害の特徴について、認知面、行動面、心理面などから捉える。そのことを通して、知的障害児の状態像についてイメージを持つ。イメージを持った上で、様々な事例や特別支援学校など現場での対応について触れながら、教育的対応について学ぶ。知的障害を伴うことの多い疾患の特徴についても、教育の観点から触れる。				
授業のねらい・到達目標	知的障害児の教育について、その概要を知る。				
授業の方法・授業計画					
1	知的障害児の教育史				
2	知的障害児の教育体系				
3	知的障害児教育と教育課程編成の原理				
4	知的障害児教育と個別指導計画				
5	知的障害児の発達と環境との関係				
6	知的障害児の感覚・知覚の発達				
7	知的障害児の言語・認知の発達				
8	知的障害児の心理				
9	知的障害児の運動の発達				
10	知的障害児の情緒・社会性の発達				
11	ダウン症児の特徴と教育的対応				
12	知的障害児の診断・評価				
13	知的障害児の学校生活と教育課程				
14	自閉症児の特徴と教育的対応				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
講義					
評価方法及び評価基準	レポート 授業における取り組みなどを併せて総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業内容について、テキスト、講義ノート等を用いて予習・復習を行い、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	積極的な参加を求めます。特別支援学校見学等の学外研修も企画する予定です。				
テキスト	『知的障害教育総論』太田俊己・宮崎英憲(放送大学教育振興会)				9784595311833
—					
—					
参考文献	適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	知的障害児教育II		副題		
担 当 者	竹村 洋子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	「知的障害児教育Ⅰ」で得た基礎知識を元に、知的障害児の教育について、実習や現場における活動の中で生かせる実践的な知識を身につけていくことを目的とする。				
授業のねらい・到達目標	知的障害児の状態像について、諸検査や行動観察などによるアセスメントにも触れながら知識を得るとともに、それらの結果に対応した教育的対応について知る。これらの内容について、特別支援学校など現場での教育的対応や配慮・工夫とも照らし合わせながら学んでいく。				
授業の方法・授業計画					
1	知的障害児教育の指導原理				
2	児童理解と実態把握の方法1:行動観察				
3	児童理解と実態把握の方法2:諸検査等				
4	教育課程と指導内容1:教科別、領域別の指導				
5	教育課程と指導内容2:領域・教科を合わせた指導				
6	重複障害児と教育課程				
7	各教科の指導法1:指導計画				
8	各教科の指導法2:授業の実際				
9	合わせた指導の指導法1:日常生活の指導・遊びの指導				
10	合わせた指導の指導法2:生活単元学習・作業学習				
11	特別活動・道徳の指導法				
12	自立活動の指導法				
13	日常生活動作の指導法				
14	教師の工夫				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
講義					
評価方法及び評価基準	レポート 授業における取り組みを併せて総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業内容について、テキスト、講義ノートや参考文献等を用いて予習・復習を行い、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	積極的な参加を求めます。特別支援学校見学等の学外研修も企画する予定です。				
テキスト	『これからの「知的障害教育」関係の形成と集団参加』筑波大学附属大塚特別支援学校(明治図書)				9784180826261
—	特別支援学校 幼稚部教育要領・特別支援学校小学部・中学部学習指導要領・特別支援学校高等部学習指導要領(文部科学省)				9784303124229
—					
参考文献	『知的障害教育総論』太田俊己・宮崎英憲(放送大学教育振興会) その他、適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	肢体不自由児教育Ⅰ		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	特殊教育は特別支援教育へと大きな転換が図られ、個別のニーズに合わせた指導が求められている。従来の肢体不自由教育の理論や実践を学びつつ、これからの肢体不自由教育の課題を探る。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由教育の歴史、障害観の変遷を概観し、教育課程の編成を理解する。肢体不自由教育の指導内容・指導方法について、特に障害の多様化・重度重複化に応じた指導のあり方を学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由教育の歴史①				
2	肢体不自由教育の歴史②歴史上の課題について				
3	肢体不自由教育の現状と課題				
4	特殊教育から特別支援教育へ（ICIDHからICFへ）				
5	教育課程と指導上の特徴				
6	学習指導要領と教育課程の編成				
7	特別支援学校の役割				
8	自立活動の概要				
9	高等部の教育				
10	個別の指導計画の作成と活用				
11	授業づくり				
12	指導案づくり				
13	個別の教育支援計画の作成と活用				
14	インクルーシブ教育への展望				
15	障害者の人権・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	肢体不自由教育Ⅰを履修した者は、肢体不自由教育Ⅱを履修すること				
テキスト	肢体不自由教育の基本とその展開 日本肢体不自由教育研究会監修 慶應義塾大学出版会				
—					
—					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:40

科 目 名	肢体不自由児教育II		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	特殊教育は特別支援教育へと大きく転換し、個別のニーズに合わせた教育が求められている。従来の肢体不自由教育の理論や実践を学びつつ、特に個々の課題を見据えた指導法のあり方を探る。				
授業のねらい・到達目標	肢体不自由の自立活動に焦点を当てた指導のあり方を学ぶ。特に肢体不自由特別支援学校の授業見学において学んだ指導の実践を課題別に研究する。				
授業の方法・授業計画					
1	コミュニケーション能力のアセスメント				
2	コミュニケーション意欲向上の指導				
3	教材教具の工夫と開発①教材教具の開発の意義				
4	教材教具の工夫と開発②自作教材教具の活用				
5	肢体不自由特別支援学校の教育①小学部				
6	肢体不自由特別支援学校の教育②中学部				
7	肢体不自由特別支援学校の教育③高等部				
8	肢体不自由特別支援学校の教育④地域支援				
9	他障害を併せ持つ子どもの指導				
10	動作法の活用				
11	芸術活動の取組				
12	補助具・自助具の活用				
13	小児マヒ児の指導				
14	難治性てんかん児の指導				
15	移行支援教育・まとめ				
期末	期末試験				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	試験による評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	肢体不自由教育Ⅱを履修する者は、肢体不自由教育Ⅰを履修すること				
テキスト	肢体不自由教育の基本とその展開 日本肢体不自由教育研究会監修 慶應義塾大学出版会				
—					
—					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	障害児の心理・生理・病理		副題		
担 当 者	長田 洋和				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	障害児の定義は、世界共通というわけにはいかないのですが、少なくとも、わが国でも歴史的変遷があります。障害児を指導するにあたっては、定義、分類体系、支援法を詳細に学ぶことは不可欠です。また、教育だけではなく、福祉、医療、そして心理学分野の知識を併せ持つことも望まれます。心理学から言えば、カウンセリング・マインドを持って指導に当たることは、障害児教育に限らず、重要なことです。学際的領域から、障害児への理想的な関わりができるよう、様々な角度から知識を得ます。				
授業のねらい・到達目標	障害児の定義、分類、および支援体系を、わが国および世界的な基準を概観しながら学びます。合わせて、カウンセリング・マインドの必要性、重要性を理解し、柔軟な態度で、障害児教育を担えるような演習も合わせて行います。				
授業の方法・授業計画					
1	障害児の定義の変遷(わが国)				
2	障害児の定義の変遷(世界)				
3	知的能力障害(知的発達症)児の理解				
4	知的能力障害(知的発達症)児への支援				
5	限局性学習症児の理解				
6	限局性学習症児への支援				
7	注意欠如多動症児の理解				
8	注意欠如多動症児への支援				
9	自閉スペクトラム症児の理解				
10	自閉スペクトラム症児への支援				
11	コミュニケーション症児の理解				
12	コミュニケーション症児への支援				
13	視覚障害児の理解および支援				
14	聴覚障害児の理解および支援				
15	まとめと今後の障害児教育の展望				
期末	試験実施なし				
プレゼンテーション(PPT, Keynote)での講義を行います。 視聴覚教材を用いた講義の際には、課題を出します。					
評価方法及び評価基準	授業内レポート(60%)、平常点評価(40%)				
事前・事後学習の内容	事前:シラバスにて授業計画を確認の上、最低限の知識の整理を行う。 事後:配布プリントに従い授業を進めるので、授業中に指示する参考文献で補習する。				
履修上の注意	試験の際は、配布プリントは持ち込み可とします。				
テキスト	プリントを配布します。				
—					
—					
参考文献	適宜、指示します。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	病弱教育論		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	何らかの病気のために入院・加療しながら教育を受けている病弱児の教育のあり方を学ぶ。病弱教育の歴史を学び、現在の課題を探る。病院などで教育を受けている病弱児の教育は、学校・家庭・医療機関との密接な連携が必要になるが、望ましい連携のあり方についても学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	病弱・虚弱児の教育課程の編成を理解し、具体的な指導内容・指導方法について学ぶ。対象となる疾患の理解とそれに応じた適切な指導のあり方を探る。				
授業の方法・授業計画					
1	主要疾患とその指導法(1)悪性腫瘍、循環器疾患				
2	主要疾患とその指導法(2)腎疾患、呼吸器系疾患、糖尿病				
3	主要疾患とその指導法(3)膠原病、てんかん				
4	特別支援教育時代の新たな疾患①心身症、拒食症				
5	特別支援教育時代の新たな疾患②不登校				
6	子どもの虐待と病弱教育				
7	病弱・虚弱児の学校教育(1)病弱・虚弱教育の歴史				
8	病弱・虚弱児の学校教育(2)指導の実際				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テスト、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	病弱・虚弱児の医療・療育・教育 宮本信也他編 金芳堂				
—					
—					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	視覚障害者指導法		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	視覚に障害のある児童生徒は、障害の状況によって盲と弱視に分けられ、その指導方法は異なっている。就学の場合も盲学校、弱視の特別支援学級、通級指導教室があり、インクルージョンの時代を迎えて、通常の学級で学ぶ者も増えてきている。このような状況にある視覚障害教育のシステムや指導法を学ぶ。また、視覚障害の歴史や今日的課題を見すえ、特別支援教育時代の視覚障害教育のあり方を探る。				
授業のねらい・到達目標	視覚障害教育の教育課程の編成を学び、具体的な指導方法・指導内容について理解する。また、視覚障害教育の歴史を探り、今日的な課題を明らかにする。				
授業の方法・授業計画					
1	目の機能と視覚障害				
2	視覚障害教育の歴史				
3	視覚障害児童生徒の教育と就学支援				
4	教育課程と指導計画				
5	盲児や弱視児への指導				
6	視覚障害児のための教材教具、補償機器				
7	盲学校における指導				
8	視覚障害者と共生社会				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末	試験実施せず				
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	視覚障害に携わる方のために 香川邦生編 慶應義塾大学出版会				
－					
－					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	聴覚障害者指導法		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	聴覚に障害のある児童生徒の指導は、従来は聾学校を中心とする教育制度の中に位置づけられてきた。しかし、特別支援機養育の時代を迎えて、その様相が大きく変わってきている。聴覚障害教育の歴史を探り、今日的意義と課題を明らかにする。				
授業のねらい・到達目標	聴覚障害教育の教育課程の編成を理解し、その指導方法や指導内容を学ぶ。また、聴覚障害の歴史を学び、今日的な課題を探る。				
授業の方法・授業計画					
1	聴覚障害教育の歴史				
2	聴覚障害の言語とコミュニケーション				
3	手話と日本語				
4	手話コミュニケーション				
5	特別支援教育における聴覚障害教育				
6	聾学校の教育①幼稚部の指導				
7	聾学校の教育②小・中学部の指導				
8	聾学校の教育③高等部・専攻科の指導				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末					
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	特になし				
履修上の注意	特になし				
テキスト	聴覚障害教育の基本と実際 中野善達他編 田研出版				
－					
－					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	LD・ADHD等教育総論		副題			
担 当 者	竹村 洋子					
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2	
授業の概要	LD・ADHD等について、その障害の特徴を認知面、行動面、心理面などから捉え、その状態像に関するイメージを持ち、その教育的対応や配慮について学ぶ。さらに教育制度など教育的処遇に関する知識を得て、特殊教育から特別支援教育への転換について、その意義等を学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	LD・ADHD児等への教育について、その概要を知る。					
授業の方法・授業計画						
1	LD・ADHD等とは					
2	学習障害					
3	注意欠陥多動性障害					
4	広汎性発達障害					
5	その他の障害(重複障害)					
6	理解のためのアセスメントと教育実践					
7	集団場面での理解と対応 学校教育					
8	集団場面での理解と対応 家庭支援					
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
期末	実施なし					
講義						
評価方法及び評価基準	授業における取り組みを総合的に評価します(小テストを含む)。					
事前・事後学習の内容	毎回の授業内容について、テキスト、講義ノート等を用いて予習・復習を行い、知識の定着を図ること。					
履修上の注意	積極的な参加を求めます。					
テキスト	『改訂新版LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド』（国立特殊教育総合研究所）				9784491029337	
—						
—						
参考文献	適宜紹介します。					

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	重複障害者教育指導法		副題		
担 当 者	鈴木 文治				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	1975年「特殊教育の改善に対する調査研究会」による報告書に「重度・重複障害児」の名称が初めて使用された。それは障害を2つ以上併せもつ者、重度の知的障害と重度の肢体不自由を併せ持つ者、及び重度の知的障害と重度の行動障害を併せ持つ者、という3つの面から重度・重複障害児は定義される。とりわけ、障害の状況は個々異なるため、個別のニーズ応じた指導が何より求められている。この障害の特性と指導のあり方を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	重度・重複障害児教育における教育課程の編成を理解し、その指導方法や指導内容を学ぶ。重度・重複障害児教育の歴史を探り、今日的な課題を明らかにする。				
授業の方法・授業計画					
1	肢体不自由児の特性				
2	運動発達の道すじ				
3	重度・重複障害児の特性				
4	重度・重複障害児の指導				
5	専門的指導法				
6	重度・重複障害児の教育課程				
7	医療的ケア				
8	訪問指導				
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
期末					
教科書やレジュメによる講義形式					
評価方法及び評価基準	授業における小テストによる評価、及び学習意欲、学習態度、授業の理解度を総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習・事後学習は必須である。				
履修上の注意	配付資料をファイルして繰り返し読むこと。				
テキスト	特別支援学校における重度・重複障害児の教育 姉崎弘著 大学教育出版				
－					
－					
参考文献	授業の中で指示する。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	特別支援教育実習指導		副題		
担 当 者	竹村 洋子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	現場において特別支援教育に携わるためには、机上での知識のみでは不足する。これまでの講義などで得た知識を、実際の学校現場において生かすために必要な知識や技術について学ぶ。具体的には、特別支援教育の教育課程や指導案の書き方などについて、実例を通して学ぶ。実習校との打ち合わせも含め、実習を受けさせていただく上での実習校とのやりとりについても指導する。				
授業のねらい・到達目標	特別支援学校における教育実習を行うために必要な知識を得て、円滑かつ有意義な実習を行えるようにすることを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	特別支援教育の教育課程				
3	特別支援学校における教育の実際：知的障害				
4	特別支援学校における教育の実際：肢体不自由				
5	特別支援教育の学習指導案：知的障害				
6	特別支援教育の学習指導案：肢体不自由				
7	特別支援教育の学習指導案：略案作り				
8	特別支援教育の教材研究：文献を通して学ぶ				
9	特別支援教育の教材研究：教材作りを計画する				
10	特別支援教育の教材研究：教材を作る				
11	特別支援教育の学習指導案：細案作り				
12	特別支援学校における教員の職務				
13	教育実習のための事前準備				
14	実習先との連絡の取り方、指導の受け方				
15	まとめ				
期末	試験				
演習					
評価方法及び評価基準	レポート、平常点により、総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	テキストや授業時に配布する資料を活用するとともに、授業の進行に従って、各自、必要な資料を検索・準備することが必要になります。				
履修上の注意	積極的な参加を求めます。				
テキスト	特別支援教育実習 実習の手引き(配布します)				
－					
－					
参考文献	適宜紹介します。				

2015/03/26(木)19:41

科 目 名	特別支援教育実習		副題		
担 当 者	竹村 洋子				
開講期	集中	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	学校現場において学校教育の現状を肌で感じながら、授業や課外活動などの場面で児童・生徒と交流し、教育的指導・支援の初歩を習得すべく、実践的な取り組みを行う。学校現場での教育実践を通して、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会でもある。 事前指導、事前オリエンテーション及び事後指導を含む一連の活動を通して、教職に関する実践的知識・技術を習得していく。研究授業および授業研究会が教育実習における山場の一つである。				
授業のねらい・到達目標	学校現場において、学校教育の現状を肌で感じ、理解する。 実際に教壇に立ち、学校教育における実践的知識・技術の初歩を習得する。 教職に対する自らの適性、教職を志すに当たっての自らの課題を見極める。				
授業の方法・授業計画					
実習指導を踏まえて、実習校におけるオリエンテーションを受けることから教育実習は始まる。実習期間中には、観察実習、参加実習、授業実習を通して、大学の講義や演習で学んだ理論や知識、技術を実際の教育活動の中で総合的に実践する。そのことを通して、自らの足りない知識や技術を理解し、習得への努力を行うことも重要である。実習期間中の経験は、実習期間中のみならず、事後指導でも振り返り、教職への適性や教職につくための今後の課題を見極めていくこととなる。 主な学習課題は以下の通りである。 ・学校の組織と役割について学ぶ。 ・児童・生徒の発達に対する理解を深める。 ・授業を行う―指導・支援の実際を学ぶ。 ・教師の仕事について学ぶ。 ・学校の管理・運営について学ぶ。 ・実践記録の書き方を学ぶ。 ・学校環境の全般について学ぶ。 ・障害児教育に対する理解を深める。 ・障害のある児童・生徒とのかかわりについて学ぶ。 ・実践的活動を通して、理論と実践を統合する。					
評価方法及び評価基準	実習校による評価、学生による自己評価、校内教員による評価を踏まえて、総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	これまでの大学内・外における学習を整理し、実習指導を通して十分な準備を行い、実習に臨む必要がある。実習期間中の取り組みについて、実習校実習担当の先生方、本学実習担当教員から指導を受け、実習日誌を中心として記録を整理し、事後指導につなげることが必要である。				
履修上の注意	実習校への感謝の気持ちと教職を志す学生としての自覚を持ち、真摯な態度で取り組むこと。				
テキスト	特別支援教育実習 実習の手引き（特別支援教育実習指導で配布します。）				
－					
－					
参考文献	適宜紹介します。				

本学の教員免許状（幼稚園教諭一種）にかかる教職課程開設科目（平成 26 年度以降入学者対象）

教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目

免許法施行規則に定める 科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目			備 考
科 目	単位数	授業科目	単位数		
			必修	選択	
日本国憲法	2	日本国憲法	2		
体育	2	スポーツⅠ	2		
外国語コミュニケーション	2	英語	2		
情報機器の操作	2	コンピュータ・リテラシー	2		

教科に関する科目

免許法施行規則に定める 科目区分	左記に対応する開設授業科目			備 考
	授業科目	単位数		
		必修	選択	
音楽	音楽Ⅰ 音楽Ⅱ	2 2		
図画工作	子どもと造形表現Ⅰ 子どもと造形表現Ⅱ	2 2		
体育	子どもと運動Ⅰ 子どもと身体表現Ⅰ 子どもと運動Ⅱ 子どもと運動Ⅲ 子どもと身体表現Ⅱ	1 1 2 2		
国語	国語Ⅰ（日本語と子ども） 国語Ⅱ（文学と子ども）	 2	2 2	
生活	生活		2	

教職に関する科目

免許法施行規則に定める科目区分等			左記に対応する開設授業科目			備 考
科 目	各科目に含める必要事項	単位数	授業科目	単位数		
				必修	選択	
教職の意義等に関する科目	・ 教職の意義及び教員の役割 ・ 教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。） ・ 進路選択に資する各種の機会の提供等	2	教職概論	2		
教育の基礎理論に関する科目	・ 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	6	教育の原理	2		
			幼児教育史		2	
	発達心理学		2			
	教育心理学			2		
	乳幼児発達心理学			2		
・ 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項		2				
教育課程及び指導法に関する科目	・ 教育課程の意義及び編成の方法	18	教育課程論	2		
	・ 保育内容の指導法		保育内容総論	1		
			保育内容（健康Ⅰ）	1		
			保育内容（健康Ⅱ）	1		
			保育内容（人間関係Ⅰ）	1		
			保育内容（人間関係Ⅱ）	1		
			保育内容（環境Ⅰ）	1		
			保育内容（環境Ⅱ）	1		
			保育内容（言葉Ⅰ）	1		
			保育内容（言葉Ⅱ）	1		
			保育内容（表現Ⅰ）	1		
			保育内容（表現Ⅱ）	1		
			児童文化Ⅰ	2		
			子どもの遊び	1		
	・ 教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）			保育方法の研究	2	
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	・ 幼児理解の理論及び方法	2	保育実践入門	1		
	・ 教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法		教育相談	2		
教育実習		5	幼稚園教育実習Ⅰ	1		
			幼稚園教育実習指導Ⅰ	1		
			幼稚園教育実習Ⅱ	3		
			幼稚園教育実習指導Ⅱ	1		
教職実践演習		2	保育・教職実践演習（幼稚園）	2		

2015/03/26(木)17:13

科 目 名	日本国憲法		副題		
担 当 者	國見 真理子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	日本国憲法は、主権者である国民によって確定された最高法規である。我が国は法治国家であり、現在効力を有している法律は約1800件ある中で、憲法は、「国民主権」「平和主義」「基本的人権の保障」の基本原則を掲げて、これらの法律の頂点に位置している。本講義では、わたしたち国民によって作られ、わたしたちのための日本国憲法について、より深い理解を得られるようになることを目指す。				
授業のねらい・到達目標	本学は人生のはじめから終焉までの各段階の社会福祉を担う人材を育てる大学であるが、社会福祉とは、人間の生活そのものに接することで人々に幸せをもたらす、社会に密着した分野といえる。社会福祉を担う人材の育成にあたっては、我が国社会の仕組みの根幹を定める日本国憲法全般、中でも第25条に定める「社会福祉」について学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では、日本国憲法についての、より一層の深い理解を図ることを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	はじめに				
2	法の本質				
3	日本国憲法の歴史				
4	日本国憲法における基本三原理(国民主権・平和主義・基本的人権の保障)				
5	日本国憲法の「前文」の意義				
6	基本的人権保障の意義				
7	基本的人権の保障―権利主体、自由権など				
8	基本的人権の保障―第25条に定める「社会福祉」の意義				
9	基本的人権の保障―その他				
10	日本国憲法が定める国家・社会の仕組みと制度―「天皇」「三権分立」「地方自治」「その他」				
11	国の立法権―国会				
12	国の行政権―内閣				
13	国の司法権―裁判所				
14	地方自治				
15	ここまでの確認。憲法の意義とは				
期末	試験実施なし				
講義を中心に、演習や視聴覚教材などを組み合わせて授業を行う。					
評価方法及び評価基準	期末課題、コメントシート及び授業内の活動の得点を総合評価。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。				
履修上の注意	自分達によって作られ、自分達のための日本国憲法を、より広く、より深く理解しようという熱意で、本科目に取り組むことを期待する。指定テキストは、授業の際に必ず持参するようにすること。				
テキスト	石川明他『法学六法』(2015年版、信山社) 初宿正典他編著『目で見る憲法』(有斐閣)				
—					
—					
参考文献	授業の進行、必要に応じ適宜紹介します。				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	スポーツ			副題	
担 当 者	外川 重信				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	将来、スポーツを楽しむ、実践するための授業とする。バレーボール、バスケットボール、バドミントン、フットサル、卓球などを主な教材として、理論と実技を併用した授業をおこなう。実技では、楽しみながら実践するので、ゲームを中心にこなう。理論では、そのスポーツの概念と歴史、トレーニング、指導者の役割、などを学習する。また幼稚園・保育園でおこなっている基本的な運動も体験する。				
授業のねらい・到達目標	メジャースポーツや様々なスポーツの基本的な技術の習得と、体力の維持・向上をめざす。また幼稚園・保育園でおこなうスポーツのマスターと指導ができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション、スポーツの理論1(スポーツ概論)			16	スポーツの理論4(体力トレーニング論:トレーニングの方法)
2	スポーツの理論2(体力トレーニング論:防衛体力と行動体力)			17	バドミントン1(基本技術:ハイクリアーとドライブ)
3	バレーボール1(基本技術:トスとサーブ)			18	バドミントン2(シングルスゲーム)
4	バレーボール2(基本技術:アタックとレシーブ)			19	バレーボール4(男女別ゲーム)
5	バレーボール3(ミニゲーム)			20	バレーボール5(男女混合ゲーム)
6	バスケットボール1(基本技術:ドリブルとシュート)			21	バスケットボール4(男女別ゲーム)
7	バスケットボール2(基本技術:パスとシュート)			22	バスケットボール5(男女混合ゲーム)
8	バスケットボール3(ゲーム:マンツーマンディフェンスとゾーンディフェンス)			23	卓球3(ダブルスゲーム)
9	卓球1(基本技術:サーブとラリー)			24	フットサル3(ゲーム)
10	卓球2(シングルスゲーム)			25	バドミントン3(ダブルスゲーム)
11	フットサル1(基本技術:ドリブルとシュート)			26	保育園/幼稚園でのスポーツ1(マット運動・鉄棒など)
12	フットサル2(男女別ゲーム)			27	保育園/幼稚園でのスポーツ2(縄跳び・フラフープなど)
13	様々なレクリエーションスポーツ1(ドッジボール)			28	保育園/幼稚園でのスポーツ3(運動会)
14	様々なレクリエーションスポーツ2(フリスビーなど)			29	スポーツの理論5(スポーツコーチング論)
15	スポーツの理論3(スポーツの安全管理)			30	まとめ
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
スポーツ種目は適時順番を変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力・学習意欲・学習態度及び授業の理解度を総合して評価する。保育園/幼稚園でのスポーツ種目は、授業内でテストをおこなう。				
事前・事後学習の内容	(事前)ルール等をよく調べた上で授業に臨むこと。(事後)反復練習によって技術の向上を図ること。				
履修上の注意	①授業中は、スポーツウェアと体育館用シューズを使用すること。②着替えは体育館更衣室におこない、必ず貴重品は体育館フロアに持ってくる。教員控え室には、貴重品を入れるロッカーとその鍵がある。③更衣室に、常時私物を置かないこと。④シャワーを使用したい時は、教員に連絡すること。				
テキスト	必要に応じて配付する。				
—					
—					
参考文献	なし				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	久村 研				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	テキストの各ユニットの構成は、新出語彙の確認、導入の英語会話、英文法の演習問題、語句の並べ替えや和文英訳、リーディング、リスニング、新出語彙の復習という総合的な活動を通して1つの話題を発展的に学習できるようになっています。授業では主にテキストを使って学習しますが、週1回の授業だけでは学習効果は期待できません。テキストにはCD-ROMが付属しています。そのCD-ROMを活用すれば、テキストの復習と発展学習が効果的にできるようになっています。授業では、CD-ROMを使った週2～3回の自己学習と補充教材学習を奨励し、それを前提に進めていきます。				
授業のねらい・到達目標	これまでに学習した内容をやり直し、しっかりした基礎力を養成することが目的です。学習した文法事項を使った自己表現力、ある程度限られた日常的な場面における会話表現力、150語程度の身近で記述的なパラグラフを素早く読み取る英文理解力をつけることを目指します。				
授業の方法・授業計画					
1	英語と日本語の違い	16	Fishing is exciting! (1) (趣味の話題)		
2	I love junk food (1) (文の成り立ち)	17	Fishing is exciting! (2) (不定詞)		
3	I love junk food (2) (文の種類)	18	Angels in white (1) (健康の話題)		
4	A new member (1) (人物紹介)	19	Angels in white (2) (動名詞)		
5	A new member (2) (時制)	20	Robot (1) (ロボットの話題)		
6	Help! (1) (コンサートの話題)	21	Robot (2) (分詞)		
7	Help! (2) (1～3文型)	22	Band contest (1) (音楽の話題)		
8	Pet! Pet! Pet! (1) (ペットの話題)	23	Band contest (2) (比較)		
9	Pet! Pet! Pet! (2) (4-5文型)	24	Let's go to a museum! (1) (芸術に関する話題)		
10	Have you seen a UFO? (1) (UFOの話題)	25	Let's go to a museum! (2) (関係詞)		
11	Have you seen a UFO? (2) (現在完了形)	26	Miss you (1) (感情の表現)		
12	Online Shopping (1) (通販の話題)	27	Miss you (2) (仮定法)		
13	Online Shopping(2) (助動詞)	28	Goodbye Linda (1) (別れの挨拶)		
14	Lucky Charm (1) (お守りの話題)	29	Goodbye Linda (2) (否定表現)		
15	Lucky Charm (2) (受動態)	30	文法のまとめ		
期末	試験実施なし	期末	試験実施なし		
次の手順で行います。 リスニングーロール・プレイングーディクテーションー文法演習(並べ替え、和文英訳)ーリーディングーリスニングー語彙練習ー小テスト					
評価方法及び評価基準	原則として小テストなど試験70%、平常点(自己学習、授業態度、課題提出など)30%を目安とし、総合的に評価します。なお、各学期に10回程度家庭自習学習としてリーディング教材を課し、それも課題に含まれます。				
事前・事後学習の内容	・事前:単語の下調べ、文法、作文問題の予習 ・事後:授業の復習、単語とダイアログの暗記、小テストの準備 ・家庭自習課題(リーディング教材)は指示に従いからなず提出のこと。				
履修上の注意	期末にそれぞれの試験範囲のCD-ROM課題を提出してもらいます。				
テキスト	Hiroshi Ono他、English Quest (Basic), 桐原書店			978-4-342-54750-8	
—					
—					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	塚本 まゆみ				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、高校初級までに学習した基本事項をやり直します。文法・語法を基本から学び直し、バランスの取れた4技能(Reading・Listening・Writing・Speaking)修得のための基礎を築きます。 テキストの各ユニットは、Listening Warm Up・Conversation・Grammar Points・Grammar Check・Express Yourselfの4つのセクションで構成されています。それぞれのユニットの総合的な活動を通して、知識ならびに4技能の定着を図ります。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:英語の基礎力を充実させる。 到達目標:身近な事柄や、自分自身のことを表現することができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	Unit 1 (Grammar Points ・Grammar Check)			16	Unit 8 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
2	Unit 1 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			17	Unit 9 (Grammar Points ・Grammar Check)
3	Unit 2 (Grammar Points ・Grammar Check)			18	Unit 9 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
4	Unit 2 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			19	Unit 10 (Grammar Points ・Grammar Check)
5	Unit 3 (Grammar Points ・Grammar Check)			20	Unit 10 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
6	Unit 3 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			21	Unit 11 (Grammar Points ・Grammar Check)
7	Unit 4 (Grammar Points ・Grammar Check)			22	Unit 11 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
8	Unit 4 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			23	Unit 12 (Grammar Points ・Grammar Check)
9	Unit 5 (Grammar Points ・Grammar Check)			24	Unit 12 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
10	Unit 5 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			25	Unit 13 (Grammar Points ・Grammar Check)
11	Unit 6 (Grammar Points ・Grammar Check)			26	Unit 13 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
12	Unit 6 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			27	Unit 14 (Grammar Points ・Grammar Check)
13	Unit 7 (Grammar Points ・Grammar Check)			28	Unit 14 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
14	Unit 7 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)			29	Unit 15 (Grammar Points ・Grammar Check)
15	Unit 8 (Grammar Points ・Grammar Check)			30	Unit 15 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
毎回の授業で「復習テスト」と「理解度確認テスト」の2種類の小テストを行い、知識の定着を確認します。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内で実施する小テストの結果で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習: 授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。 事後学習: 十分な復習をして知識の定着をはかり、復習テストに備える。				
履修上の注意	授業には必ず辞書を持参すること。 欠席した場合、小テストは0点となります。 遅刻3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	Robert Hickling、Misato Usukura、English First Starter、金星堂				978-4-7647-3969-7
－					
－					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	印藤 京子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	この講座では、高校初級までに学習した基本事項をやり直します。文法・語法を基本から学び直し、バランスの取れた4技能(Reading・Listening・Writing・Speaking)修得のための基礎を築きます。 テキストの各ユニットは、Listening Warm Up・Conversation・Grammar Points・Grammar Check・Express Yourselfの4つのセクションで構成されています。それぞれのユニットの総合的な活動を通して、知識ならびに4技能の定着を図ります。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらい:英語の基礎力を充実させる。 到達目標:身近な事柄や、自分自身のことを表現することができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	Unit 1 (Grammar Points ・Grammar Check)	16	Unit 8 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
2	Unit 1 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	17	Unit 9 (Grammar Points ・Grammar Check)		
3	Unit 2 (Grammar Points ・Grammar Check)	18	Unit 9 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
4	Unit 2 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	19	Unit 10 (Grammar Points ・Grammar Check)		
5	Unit 3 (Grammar Points ・Grammar Check)	20	Unit 10 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
6	Unit 3 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	21	Unit 11 (Grammar Points ・Grammar Check)		
7	Unit 4 (Grammar Points ・Grammar Check)	22	Unit 11 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
8	Unit 4 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	23	Unit 12 (Grammar Points ・Grammar Check)		
9	Unit 5 (Grammar Points ・Grammar Check)	24	Unit 12 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
10	Unit 5 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	25	Unit 13 (Grammar Points ・Grammar Check)		
11	Unit 6 (Grammar Points ・Grammar Check)	26	Unit 13 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
12	Unit 6 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	27	Unit 14 (Grammar Points ・Grammar Check)		
13	Unit 7 (Grammar Points ・Grammar Check)	28	Unit 14 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
14	Unit 7 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)	29	Unit 15 (Grammar Points ・Grammar Check)		
15	Unit 8 (Grammar Points ・Grammar Check)	30	Unit 15 (Listening ・Conversation ・Express Yourself)		
期末	試験実施なし		期末	試験実施なし	
毎回の授業で「復習テスト」と「理解度確認テスト」の2種類の小テストを行い、知識の定着を確認します。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内で実施する小テストの結果で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習:授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。 事後学習:十分な復習をして知識の定着をはかり、復習テストに備える。				
履修上の注意	授業には必ず辞書を持参すること。 欠席した場合、小テストは0点となります。 遅刻3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	Robert Hickling, Misato Usukura、English First Starter、金星堂			978-4-7647-3969-7	
－					
－					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	英語			副題	
担 当 者	印藤 京子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	<p>この講座では、初級の総合教材を用いて英語の基礎力を再構築します。具体的には、be動詞と一般動詞の使い方の違いなどの基本的な文法事項、語い、語順などを学習し、身近なことを英語で表現する練習を行います。また、随時CDによる聞き取り練習を行います。</p> <p>テキストは、ある会社の日本人若手社員が海外から赴任してきたジルと出会い、お互いの文化の違いを発見し、仕事で失敗を繰り返しながら成長していくという物語仕立てになっています。このストーリーを軸に、読む・聴く・書く・話す、の4つの技能を養成するさまざまな練習問題で構成されています。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>授業のねらい: 英語に対する苦手意識を払拭して英語学習を習慣化させる。</p> <p>到達目標: 身近な事柄に関する平易な質問や応答ができるようになる。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	日本語と英語			16	We Are Invited! (Sections 1 & 3)
2	文の要素			17	Where Are We? (Section 2)
3	Welcome to the Company! (Section 2)			18	Where Are We? (Sections 1 & 3)
4	Welcome to the Company! (Sections 1 & 3)			19	Immigration (Section 2)
5	For All Your Needs! (Section 2)			20	Immigration (Sections 1 & 3)
6	For All Your Needs! (Sections 1 & 3)			21	Can I Ask You a Few Questions? (Section 2)
7	Trouble with a Machine (Section 2)			22	Can I Ask You a Few Questions? (Sections 1 & 3)
8	Trouble with a Machine (Sections 1 & 3)			23	A Large Order! (Section 2)
9	A Business Letter (Section 2)			24	A Large Order! (Sections 1 & 3)
10	A Business Letter (Sections 1 & 3)			25	Cheers! (Section 2)
11	Customers' Questions (Section 2)			26	Cheers! (Sections 1 & 3)
12	Customers' Questions (Sections 1 & 3)			27	It's Quick and Easy! (Section 2)
13	Tips for Visiting Japan (Section 2)			28	It's Quick and Easy! (Sections 1 & 3)
14	Tips for Visiting Japan (Sections 1 & 3)			29	The Path to Success (Section 2)
15	We Are Invited! (Section 2)			30	The Path to Success (Sections 1 & 3)
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
毎回の授業で「復習テスト」と「理解度確認テスト」の2種類の小テストを行い、知識の定着を確認します。					
評価方法及び評価基準	原則として、授業内で実施する小テストの結果で評価します。				
事前・事後学習の内容	事前: 授業計画にて授業内容を確認し、該当部分の下調べをする。 事後: 十分な復習をして知識の定着をはかり、復習テストに備える。				
履修上の注意	授業には必ず辞書を持参すること。 欠席した場合、小テストは0点となります。 遅刻3回で欠席1回とみなします。				
テキスト	津村 修志他、Good Job! Basic Skills for Better English、金星堂				978-4-7647-3876-8
－					
－					
参考文献	必要に応じて授業中に指示します。				

2015/03/26(木)17:14

科 目 名	コンピュータ・リテラシー			副題	
担 当 者	番匠 一雅				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	現在、私たちの身のまわりでは、IT 化が急速に進展しています。教育の世界でも、大学を始め、高・中・小学校にいたるまで「教育の情報化」が強力に進められています。本講座は、大学生として必要不可欠な情報技術を身に着けるとともに、保育を志す学生が将来、創造的な保育を生み出すことができるよう、パソコンを利用した教材作成の理論・技術を修得すること、および、それを保育で有効に活用する能力を育成することを主なねらいとします。				
授業のねらい・到達目標	・情報および基礎的なコンピュータの概念の習得 ・キーボード操作、周辺機器の利用、学内ネットワークの利用方法の習得 ・PCを利用した保育に関する資料の収集・活用に関する技能の修得 ・PCを利用した、素材・イラストの作成スキルの習得 ・自作の保育教材の製作および自作教材を利用したプレゼンテーションの実演				
授業の方法・授業計画					
1	授業概要と学内システムの説明、個人情報について			16	オリエンテーション
2	電子メールの基礎と送受信、メール作成のマナー			17	データベース基礎
3	インターネットの基礎と情報検索			18	データベース応用
4	文書作成1(文書作成ソフトの基礎)			19	スライド教材の作成1(テキスト作成)
5	文書作成2(文書の書式設定)			20	スライド教材の作成2(スライドのビジュアル化)
6	文書作成3(文章の書式設定)			21	スライド教材の作成3(アニメーション)
7	文書作成4(表作成と図の挿入)			22	プレゼンテーション準備
8	文書作成5(イラスト作成基礎)			23	プレゼンテーション技法
9	文書作成6(イラスト作成応用)			24	ホームページによる授業紹介1(テキスト作成)
10	表計算1(基本操作)			25	ホームページによる授業紹介2(作成)
11	表計算2(出席管理)			26	ホームページによる授業紹介3(公開と活用)
12	表計算3(成績管理)			27	自作スライドによる発表1(テキストの評価)
13	表計算4(グラフ作成)			28	自作スライドによる発表2(ビジュアルの評価)
14	表計算5(データ分析)			29	自作スライドによる発表3(表現方法の評価)
15	文章作成7(レポート作成)			30	まとめ
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
評価方法 及び評価基準	授業に臨む態度(20%)、授業中の作成物(30%)、レポート課題(50%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	毎回事前にテキストの該当部分について熟読のうえ授業に臨むこと。利用するアプリケーションは、授業時間外でも定期的に操作を行い、機能やメニュー構成を理解するよう心がけること。授業時間内に課題が完成しない場合、翌週の授業までに課題を完成させておくこと。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『保育者のためのパソコン講座 Windows7 Office2007/2010/2013対応版』 萌文書林 定価2,000円+税				978-4-89347-190-1
—					
—					
参考文献	『教育の方法と技術』平沢茂 図書文化				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	音楽I			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	歌とピアノの演奏技術の習得と共に、音楽活動に伴う基礎的な知識を学ぶ。実技は、子どもの歌の弾き唱いとピアノ曲を中心とし、個人レッスンの形態をとる。理論は集団授業とする。実技の教材選択は、履修者それぞれの音楽経験に応じて対応する。弾き唱いの曲目選択に当たっては、適宜その範囲を指示する。理論は、前期は主に読譜の基礎、後期はその発展となる内容で進め、適宜小テストを行う。				
授業のねらい・到達目標	保育の場で求められる音楽実技の技術と音楽の基礎的な知識の習得を目指す。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(習熟度調査)			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期復習)
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名)			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階)
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名復習)			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階発展)
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音名まとめ)			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階復習)
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム)			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階まとめ)
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム発展)			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(音階小テスト)
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズム復習)			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音)
8	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(リズムまとめ)			23	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音発展)
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子)			24	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音復習)
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子発展)			25	歌・ピアノ実技おさらい会
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子復習)			26	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音まとめ)
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(拍子まとめ)			27	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(和音小テスト)
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(前期まとめ)			28	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論(後期まとめ)
14	前期発表会準備			29	後期発表会準備
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
* 進度により、適宜、理論の中で歌の集団指導を行うことがある。					
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を生かし、練習しておくこと。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	『おんがくのしくみ』今川恭子、他(教育芸術社)				
—	『簡易伴奏による こどもの歌名曲アルバム』松山祐士(ドレミ楽譜出版社)				
—	その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
参考文献	必要に応じて紹介する。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	音楽II【エントリー】			副題	
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	音楽Ⅰで身に付けた力を基とし、歌とピアノの演奏技術のステップアップと共に、場に応じた音楽活動が行えるよう、技術と知識の両面から学ぶ。授業形態は、音楽Ⅰの方針を踏襲し、適宜課題の提出を求める。				
授業のねらい・到達目標	音楽Ⅰで身に付けた演奏技術や音楽の知識をより確かなものとし、感じたことや考えたことを自分なりに表現できる力の習得を目指す。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション			16	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（復習）
2	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード）			17	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ）
3	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード発展）			18	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ発展）
4	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード復習）			19	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジ復習）
5	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードまとめ）			20	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（アレンジまとめ）
6	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム）			21	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作）
7	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム発展）			22	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（創作課題提出）
8	ピアノ実技レッスン及び前期合唱			23	歌・ピアノ実技レッスン及び後期合唱
9	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネーム復習）			24	歌・ピアノ実技おさらい会
10	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コードネームまとめ）			25	後期発表会準備
11	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け）			26	後期発表会グループ決め
12	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（コード付け小テスト）			27	後期発表会曲決め
13	歌・ピアノ実技レッスン及び音楽理論（総まとめ）			28	後期発表会曲目最終決定
14	前期発表会準備			29	後期発表会予行演習
15	前期発表会			30	後期発表会
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
評価方法 及び評価基準	発表会への取り組み 授業への取り組み、提出課題を合わせて総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	授業時に指示された曲目を事前に練習しておくこと。 事後は、授業で受けた内容を生かし、練習しておくこと。				
履修上の注意	・ B4の紙が貼付可能なスケッチブックと配布資料を保存するファイルを用意すること。 ・ 爪は必ず切ること。				
テキスト	音楽Ⅰで使用したテキスト その他、開講時に習熟度に応じたテキストを指示する。				
—					
—					
参考文献	必要に応じて紹介する。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと造形表現I			副題	
担 当 者	中原 篤徳				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	幼児の創造性を育み、表現活動を支援するために必要な基礎的造形力を養成する。造形における基本を実習し、素材に対する知識、技能を習得する。前期授業では絵画表現を中心とした平面的な表現、後期授業では紙工作など立体的な表現を中心に実践的に学んでいく。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは基礎的造形の実践により、創造する喜びや感動を幼児と共有できる美的感性を深めることにある。また、生活の中から、造形の要素を発見し、創作に結び付ける感性を錬磨することもねらいである。そして、幼児の表現活動を適切に支援できる造形力と感性を本授業で獲得することを、到達目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)(3)(4)、D-3(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	◆オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	◆後期授業オリエンテーション・授業に関する諸注意
2	◆基礎デッサン(手を描く)			17	◆工作―紙を使って1(紙を用いたからくり)
3	◆基礎デッサン(果物を描く)			18	◆工作―紙を使って2(ジャバラ折りの切り紙)
4	◆基礎デッサン(自画像を描く)			19	◆工作―紙を使って3(紋切りの基礎)
5	◆絵の具を用いた技法1(デカルコマニー)			20	◆工作―紙を使って4(自分の家紋を創作する)
6	◆絵の具を用いた技法2(にじみ、ぼかし)			21	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・構想とパーツ制作)
7	◆絵の具を用いた技法3(流し絵、ドロッピング)			22	◆工作の応用(切り紙のみを用いて風景や人物を表現する・張り付けと仕上げ)
8	◆絵の具を用いた技法4(はじき絵)			23	◆工作―紙を使って5(ちぎり絵)
9	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像する世界を描く・構想と下描き)			24	◆工作―紙を使って6(ペープサート)
10	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、想像する世界を描く・色付けと仕上げ)			25	◆工作―身近にある素材を使って1(自然から素材を見つける)
11	◆絵の具を用いた技法5(スクラッチ)			26	◆工作―身近にある素材を使って2(布、紙、糸を使って)
12	◆絵の具を用いた技法6(コラージュ)			27	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・構想と下描き)
13	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・構想と下描き)			28	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・技法の工夫と色付け)
14	◆技法の応用(これまで学んだ技法を用い、絵本の挿絵を描く・色付けと仕上げ)			29	◆自己表現(これまで学んだ技法を用いて自分自身を表現する・仕上げと発表)
15	◆総括			30	◆まとめ
期末	[試験実施]			期末	[試験実施]
評価方法及び評価基準	試験 毎時の個人指導・講評会・提出作品による総合評価。授業課題、自己課題への取り組みとその成果を評価する。				
事前・事後学習の内容	事前には、制作において新しい試みが出来るよう、参考図書などで研究すること。事後には、配布したプリントをファイルに整理し、工夫した点、今後改善すべき点等について考察すること。				
履修上の注意	絵具や粘土などの造形材料を用いるので、運動性があり汚れてもよい服装で授業に臨むこと。 授業に際しては、大きさF6・画用紙・20ページ以上のスケッチブックを各自用意して臨むこと。 なお、詳細に関してはオリエンテーションにて説明する。				
テキスト					
―					
―					
参考文献	必要に応じ、授業時に紹介する。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと造形表現Ⅱ【エントリー】			副題	
担 当 者	河原 真利				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	子どもと造形表現Ⅰ（図画工作Ⅰ）で習得した造形力を基に新たな造形素材や技法に取り組み、自分らしい創作活動を発展させてゆきます。身近な素材や日常生活の中から、子どもとともに楽しむ造形活動を自ら創出できる発想力を養うため、素材研究や共同制作も行います。				
授業のねらい・到達目標	本授業では、様々な素材や造形技法にふれ、実践することで、子どもの造形活動を適切に支援出来る知識と造形力を獲得する。また創造する楽しさや素晴らしさを感じ、保育現場で子どもと共にいきいきと楽しめる造形課題を自ら発想出来る感性を養うことを目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション・授業に関する諸注意			16	石膏による手形制作1（型取り）
2	版画1ステンシル（構想・原画制作）			17	石膏による手形制作2（着色）
3	版画2ステンシル（型紙制作）			18	風船はりこによる造形1（デッサン・構想）
4	版画3ステンシル（着色）			19	風船はりこによる造形2（貼りこみ）
5	染色1マーブリング			20	風船はりこによる造形3（部品制作）
6	染色2板染め			21	風船はりこによる造形4（着色）
7	塑造1（デッサン）			22	素材研究2-1羊毛フェルト（フェルトシート制作）
8	塑造2（芯棒制作）			23	素材研究2-2羊毛フェルト（フェルトボール制作）
9	塑造3（粘土づけ）			24	素材研究2-3羊毛フェルト（ニードルによる造形）
10	塑造4（着色）			25	素材研究2-4羊毛フェルト（組み立て）
11	素材研究1-1 身近な素材から①共同制作（構想・計画）			26	素材研究3-1身近な素材から②（素材研究・構想）
12	素材研究1-2 身近な素材から①共同制作（部品制作）			27	素材研究3-2身近な素材から②（部品制作）
13	素材研究1-3 身近な素材から①共同制作（構造・組み立て）			28	素材研究3-3身近な素材から②（組み立て）
14	素材研究1-4 身近な素材から①共同制作（仕上げ）			29	素材研究3-4身近な素材から②（仕上げ）
15	前期のまとめ・作品発表と講評			30	まとめ・作品発表と講評
期末	前期試験は実施しない 造形あそびのレポートを提出			期末	期末試験は実施しない
評価方法 及び評価基準	自己課題への取り組み姿勢とその成果、レポート提出、提出作品を総合して評価する。				
	事前に示された必要な道具、材料を必ず準備して授業に臨むこと。 各制作課題は完成させて写真で記録する。				

事前・事後 学習の内容	講義内容を整理し、指摘を受けた内容や改善すべき点について考察したものを記録、 ファイリングする。	
履修上の注意	F6程度のスケッチブック、B4ファイル(20ポケット程度) 水彩えのぐ、はさみ、カッターナイフ、のりなどを用意。 授業に際して、課題ごとに指示された必要な材料や道具を準備すること。 運動性があり汚れてもよい服装でのぞむこと。 詳細に関してはオリエンテーションで説明します。	
テキスト		
—		
—		
参考文献	必要に応じて授業時に紹介。	

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと運動I		副題		
担 当 者	本永 直子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	本授業では、乳幼児期の子どもの運動発達の重要性を理解し、保育に必須である様々な遊具の特性や活用方法および保育環境の留意点を学ぶことによって、楽しく活動するための技術を身につける。また、自らが実際に身体を動かし、運動遊びを体験する事によって、身体を使った遊びが子どもの運動の世界をいかに拓くかを考える。講義と実践を通して、子どもの発育発達に即した身体活動を活発に展開できる態度・構えを養う。				
授業のねらい・到達目標	①幼児期の運動発達の重要性と基礎理論を理解する。 ②運動遊びの場における安全管理及び安全教育に必要な知識を身につける。 ③運動・表現遊びを実際に体験し、支援者としての態度・構えを養う。 ④運動・表現遊びの活動の実際について、理解を深める。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	素材を使った運動遊び①				
3	素材を使った運動遊び②				
4	移動遊具を使った運動遊び①				
5	移動遊具を使った運動遊び②				
6	野外での運動遊び(自然・からだ・固定遊具)				
7	用具を使った運動遊び①				
8	用具を使った運動遊び②				
9	表現遊び①				
10	表現遊び②				
11	活動案の作成				
12	活動案の発表				
13	活動案の修正				
14	活動の実践				
15	振り返り、まとめ				
期末	試験実施なし				
* 1回目と15回目は講義形式で行います。 * 授業内容によって教室移動・服装などの変更があるかもしれませんので、教員の指示に注意すること。					
評価方法及び評価基準	平常点(授業態度)25%、授業内課題50%、レポート提出25%				
事前・事後学習の内容	事前: 日頃から規則正しい生活を心がけ、休まず授業に参加する。 事後: 毎時間の振り返りを積み上げ、保育・教育現場にいかせるように心がける。				
履修上の注意	* 体調管理には十分気を付ける。 * 運動着を基本として、運動にふさわしい服装で参加する。(スウェット・フード付きはNG) * 装飾品ははずし、長い髪は必ず結び、安全に活動できるようにする。 * 運動用シューズを持参すること。屋外で活動することもあるので指示に気を付ける。 * 授業にはテキストと筆記用具を持参すること。				
テキスト	岩崎洋子編著『保育と幼児期の運動遊び』萌文書林2000円				
—					
—					
参考文献	必要に応じて、授業内にて紹介する。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと身体表現I		副題		
担 当 者	佐藤 みどり				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	保育者としてふさわしい身体感覚を磨くために、身体意識を高め、しなやかな体をつくるエクササイズを体験する。また、幼児の表現あそびを自ら動きながら理解し、保育現場での実践の仕方や援助のあり方を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	自らが体で表現することを楽しみ、保育者にふさわしい身体感覚を身につけること、幼児の豊かな身体表現活動を育む技術と方法を学ぶこと、これら2つをねらいとする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	リズムあそび-スキップ・ステップの指導法				
3	リズムあそび-多様なリズムの指導法				
4	幼児のダンス-体操教材の研究-音や声からのアプローチ				
5	幼児のダンス-体操教材の研究-振付からのアプローチ				
6	幼児のダンス-体操教材の研究-総合的なアプローチ				
7	表現あそびの展開-自分の表現を見つける				
8	表現あそびの展開-自分の表現を伝える				
9	小作品の創作-テーマ(主題)を見つける				
10	小作品の創作-イメージと動きをつなぐ				
11	小作品の創作-ふさわしい音楽を探る				
12	小作品の創作-仕上げと踊り込み				
13	小作品の発表-仲間に伝わる作品構成				
14	小作品の発表-鑑賞と相互評価				
15	まとめ-実践につなげるための心得				
期末	試験実施なし				
リズムあそびや表現あそびを自ら体験しながら、現場での実践方法を探る実技授業です。 受講生には、童心に戻って素直に体を動かし、仲間と積極的に関わってくれることを期待します。					
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業での活動状況(80%)、レポート(20%)として評価する。なお、授業への主体的かつ積極的な取り組み姿勢を重視する。				
事前・事後学習の内容	速やかに着替えを済ませ、事前に軽くストレッチをして体をほぐしておくこと。授業後は心身を整えるために、クールダウンを行うこと。				
履修上の注意	動きやすい服装で出席すること。				
テキスト					
—					
—					
参考文献	西洋子、本山益子編著『子どもの身体表現』市村出版				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと運動II【エントリー】			副題	
担 当 者	外川 重信				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	アウトドアスポーツの中のキャンプの基本的な技術及び理論を習得する。学内で理論とその応用、集中授業としての学外でのキャンプでは、テントに宿泊し、自炊しながら、キャンプのゲーム、キャンプファイアー、登山、思い出作りなどのプログラムをおこなう。				
授業のねらい・到達目標	子どもを対象に、子どもの興味・関心に惹きつけて、キャンプ活動の意欲を高め、安全で楽しいキャンプ指導ができることとする。日本キャンプ協会公認のキャンプインストラクターの資格取得に準拠しており、資格試験も実施する。学内では、テキスト「キャンプ指導者入門」を用いて、その技術と理論を学ぶ。集中授業では、特に、飯ごう炊飯、キャンプファイアー、集団登山、思い出作りが指導できることとする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業説明、服装など)			16	様々なアクティビティ1(実技:キャンプファイアーの進め方)
2	キャンプの特性1(理論:目的と意義、組織と種類)			17	様々なアクティビティ2(実技:キャンプファイアーのゲーム)
3	キャンプの特性2(理論:ルールとマナー、環境教育)			18	様々なアクティビティ3(実技:キャンプファイアーの歌)
4	キャンプの対象1(理論:人間と自然)			19	様々なアクティビティ4(実技:アイスブレイクゲーム)
5	キャンプの対象2(理論:人間理解、自然理解)			20	様々なアクティビティ5(実技:イニシアティブゲーム)
6	キャンプの生活技術1(実技:ロープワーク、天気予報)			21	様々なアクティビティ6(実技:トラストゲーム)
7	キャンプの生活技術2(実技:テント設営、工具及び道具の使用法)			22	日本キャンプ協会公認キャンプインストラクターの資格について
8	キャンプの生活技術3(実技:ガス器具による野外炊事)			23	全体のまとめと反省会
9	キャンプの指導1(理論:インストラクターの役割、カウンセリング)			24	学外集中に充当(キャンプ生活の実際)
10	キャンプの指導2(理論:コミュニケーションスキル)			25	学外集中に充当(コミュニケーション作りのためのゲーム)
11	キャンプの指導3(理論:観察と記録)			26	学外集中に充当(薪による野外炊事)
12	キャンプの安全1(理論:考え方、実技:危険予知とその対処)			27	学外集中に充当(日帰り登山:地図の見方、コンパスの使い方等の実践)
13	キャンプの安全2(理論:安全管理と実際、事故判例)			28	学外集中に充当(日帰り登山:集団登山の実践)
14	キャンプの安全3(実技:ファーストエイド、フィールド調査)			29	学外集中に充当(キャンプファイアーの指導実践)
15	集中授業のオリエンテーション			30	学外集中に充当(思い出作り)
期末	試験実施せず			期末	試験実施せず
授業内容の順番は、適時変更する場合がある。 また毎回、授業の始まりと終わりに「あいさつ」を実施する。学外集中では、8月中旬に2泊3日でおこない、その分後期の後半7回分は授業を実施しない。経費は、学内活動費(食事代など)、集中2泊3日キャンプ経費(交通費除く)で約8000円がかかります。					
評価方法及び評価基準	授業内評価とし、運動能力、学習態度、受講態度及び授業の理解度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	(事前)テキストで理論及び技術を熟読しておくこと。(事後)必ず復習をしておくこと。特に安全への配慮をしっかりとマスターすること。				
履修上の注意	①体育館シューズを持参すること。②また日本キャンプ協会公認のキャンプインストラクターの資格取得の希望する学生は、別途15000円(予定)がかかります。				
テキスト	キャンプ指導者入門(監修)星野敏男、神崎清一、(社)日本キャンプ協会。かならず最新版を購入のこと。				
—					
—					
参考文献	必要に応じて配付する				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと運動Ⅲ【エントリー】			副題	
担 当 者	藤原 隆詞				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	こどもの発育発達や特徴を知り、接し方や伝え方(話し方や見せ方)・指導現場での留意事項等、さまざまな角度から指導について考えます。 授業は、講義・実技(指導実践含む)・ディスカッション等を交えながら展開していきます。 ※川崎フロンターレスクールへの見学も予定しています。				
授業のねらい・到達目標	本授業を通じて、指導者になるための意識、心構えを身につけてください。 主要な到達目標は次の2点です。 ・自分の考えを伝えるために、事前の準備から発表に至るまで努力が出来る。 ・こどもの興味・関心を惹きつけて、活動への意欲を高めさせるための努力が出来る。				
授業の方法・授業計画					
1	前期ガイダンス＋実技 ゲーム			16	後期ガイダンス＋実技 ゲーム
2	実技 コミュニケーション			17	講義 コミュニケーションスキル(必要性、問答のスキル)
3	講義 こどもへの指導(環境の変化、指導を考える)			18	講義 コミュニケーションスキル(説明・報告・分析のスキル)
4	実技 動きづくり			19	実技 ボールフィーリング(蹴る)
5	講義 こどもへの指導(発育発達)			20	講義 スピーチトレーニング(論理的に話すとは)
6	実技 鬼ごっこ			21	講義 スピーチトレーニング(発表)
7	講義 コーチング法			22	講義 スピーチトレーニング(発表、まとめ)
8	実技 ボールフィーリング(ボールを扱う)			23	講義 指導実践に向けて(指導案作成)
9	実技 ボールフィーリング(運ぶ)			24	指導実践＋ディスカッション(Aグループ発表)
10	講義 熱中症とケガの処置			25	指導実践＋ディスカッション(Bグループ発表)
11	講義 いろいろな遊びを考えてみよう			26	指導実践＋ディスカッション(Cグループ発表)
12	実技 グループ指導実践			27	指導実践＋ディスカッション(Dグループ発表)
13	講義 前期テストに向けて			28	指導実践＋ディスカッション(Eグループ発表)
14	筆記テスト			29	指導実践(まとめ)
15	実技 ゲーム			30	実技 ゲーム
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
評価方法及び評価基準	授業へ積極的に取り組むことを前提として、実技・筆記テスト・スピーチ・指導実践・ディスカッション等を考慮し、総合的に判断します。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、必要な下調べをした上で目的意識をもって参加してください。 また、今後の実習や将来を見据えて、学んだことを身につけるようノートを作成、知識を定着させるために記録してください。				
履修上の注意	運動着、室内シューズを用意してください。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	必要に応じて、随時授業中に紹介します。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	子どもと身体表現II【エントリー】			副題	
担 当 者	佐藤 みどり				
開講期	通年	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	前期は、ストレッチやダンス基礎を通して保育者に必要な柔軟性や瞬発力を鍛え、さらにダンス応用を通して表現力やコミュニケーション力を深める。 後期は、表現あそびの教材研究を通して、より実践的な幼児へのアプローチ方法を学ぶ。終盤には創作活動も行い、幼児の豊かな表現を育むための姿勢を身につける。				
授業のねらい・到達目標	本授業では、幼児の豊かな身体表現を育むための指導方法を身につけ、からだでコミュニケーションのとれる身体感覚の優れた保育者になることを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション	16	幼児の身体表現と幼児ダンス		
2	ストレッチ入門～脱力からの身体意識	17	手あそびの教材研究(3～4歳児対象)		
3	ストレッチ入門～身体部位の意識	18	手あそびの教材研究(4～5歳児対象)		
4	ボディーワーク～美しい立位姿勢と歩き方	19	表現あそびの教材研究(3～4歳児対象)		
5	ボディーワーク～体の歪みを知る	20	表現あそびの教材研究(4～5歳児対象)		
6	ボディワーク～他者とのコミュニケーション	21	幼児ダンスの教材研究(3～4歳児対象)		
7	ボディーワーク～クラス全体のコミュニケーション	22	幼児ダンスの教材研究(4～5歳児対象)		
8	ダンスの基礎～軽快なステップ	23	幼児ダンスの創作～身近な動きの発見		
9	ダンスの基礎～多様なジャンプ	24	幼児ダンスの創作～動きにふさわしい選曲		
10	ダンス応用～リズムを感じて踊る	25	幼児ダンスの創作～作品構成と空間		
11	ダンス応用～音楽を感じて表現する	26	幼児ダンスの創作～仕上げと踊り込み		
12	ダンス応用～空間意識を広げる	27	発表会～リハーサルと運営		
13	ダンス創作～動きのデッサン	28	発表会～全グループの発表と鑑賞		
14	ダンス創作～動きとイメージ	29	映像の鑑賞と相互評価		
15	ダンス創作～作品構成と発表	30	総まとめ		
期末	試験実施なし	期末	試験実施なし		
ボディーワーク・ダンス・表現を中心とした実技授業です。 受講生には、積極的に表現し、体を動かし、仲間と関わってくれることを期待します。					
評価方法 及び評価基準	授業内評価 授業への出席と活動状況、レポートを総合して判断する。なお、授業への主体的な取り組み姿勢を重視する。				
事前・事後 学習の内容	着替えは速やかに行い、事前にストレッチ等で身体をほぐしておくこと。 また、授業後はクールダウンを行い、心身を整える時間を確保すること。				
履修上の注意	運動着(ジャージなど)に着替え、装飾品は取り外すこと。				
テキスト					
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	国語Ⅰ(日本語と子ども)		副題	日本語を知る	
担 当 者	染谷 裕子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	現代日本語の音声、文字、語彙、文法について、その成り立ちや基本的なしくみについて講義する。これらの知識を子どもの言語の発達と関連づけた上で、母語としての知識の獲得、語彙や表現の育成のために、自分たちの体験や現場での実例を参考にして、具体的にどのような教育方法が効果的であるかを考えていく。				
授業のねらい・到達目標	将来、保育や幼児教育の現場で、子どもの言語の成長を手助けする重要な役割を担う者として、日本語の基本的な知識を習得する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーションー世界の中の日本語				
2	日本語の音1「しじみ」と「ちぢみ」				
3	日本語の音2「箸を持って橋の端を渡っておいで」				
4	日本語の音3 日本語の音を利用した遊び				
5	日本語の文字1「さくら」「サクラ」「桜」「櫻」「SAKURA」				
6	日本語の文字2「おおかみ」?「おうかみ」?「うなずく」?「うなづく」?				
7	日本語の文字3「漢字」の話流入の歴史、その利点と問題点、漢字教育など				
8	日本語の語彙1 泊まるなら「宿屋」「旅館」「ホテル」?				
9	日本語の語彙2 階段を「あがる」?「のぼる」?				
10	日本語の語彙3 語彙を「増やす」ということ				
11	日本語のしくみ1 日本語は「主語」がない?				
12	日本語のしくみ2「彼が来た」と「彼は来た」				
13	日本語のしくみ3「ちょっと待った」の「た」は過去?				
14	ことば遊び				
15	幼児教育と日本語				
期末	試験実施せず				
講義形式の授業ですが、一方的な授業で終わることはなく、毎回皆さんの知識を確認したり、意見を聞いたりしていきます。積極的に授業にのぞんでください。					
評価方法及び評価基準	毎回のコメントシート(40%)と小テスト(60%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて必ず授業内容を確認し授業に臨むこと。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	「国語Ⅱ」と合わせて取ることが望ましい。				
テキスト	プリントを配付する。				
－					
－					
参考文献	授業中に指示する。				

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	国語II(文学と子ども)		副題	昔話・童話を読む	
担 当 者	鳶田 明子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	子どもの感性や表現力を豊かにするという保育の課題を考えるにあたって、文学作品を様々な視点をもってより深く理解し、鑑賞する能力を養うことは重要である。 本講義では、絵本・昔話・童話をとりあげ、考察していく。作品の背景や関連作品(日本近代文学や海外児童文学など)についても紹介し、理解を深めていく。その過程において、作品の魅力を発見し、考え、表現する能力を身につける。				
授業のねらい・到達目標	1. 日本児童文学史の知識を習得し、代表作を読むことで、文学に対する興味への契機とする。 2. 子どもの実態や保育・教育のねらいに基づき、教材研究を適切に行う基本を身につける。 3. 子どもの興味・関心を惹きつけて、活動への意欲を高めるために、自分の得意な分野を見つけ、それを活用できるようにする。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス 文学・児童文学の魅力				
2	絵本を読む(絵と文の分業)				
3	日本児童文学史1(明治～大正)				
4	昔話を読む 桃太郎				
5	童話を読む1 芥川龍之介作「蜘蛛の糸」				
6	童話を読む2 小川未明作「野薔薇」				
7	日本児童文学史2(大正～昭和)				
8	童話を読む3 芥川龍之介作「白」				
9	童話を読む4 浜田広介作「竜の目の涙」				
10	発表準備1 物語の魅力を伝える(内容紹介の方法)				
11	発表準備2 物語の魅力を伝える(解釈・鑑賞)				
12	発表1 物語の魅力を伝える				
13	発表2 物語の魅力を伝える				
14	児童文学とメディア				
15	児童文学とは何か				
期末	期末試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業内評価 授業への参加度20% 提出物40パーセント 小テスト40パーセントの総合で評価する。ただし、小テストを受験できる者は、全授業の2／3以上出席した者とする。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認すること。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかること。				
履修上の注意	プリント類を整理するためのファイルを用意すること。				
テキスト	授業中にプリントを配布する				
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)17:05

科 目 名	生活		副題		領域(環境)～生活科へ	
担 当 者	清水 一豊					
開講期	半期	単位数	2		配当年次	3
授業の概要	平成元年に創設された小学校低学年の教科である生活科の目標や内容について理解するとともに、幼児教育や保育との関連性を明らかにしながら、この時期の子どもの学びや育ちを考えていく。また、具体的な単元を取り上げながら、身近な人や社会、自然とかかわる活動を体験しつつ、子どもたちの思いや願いをはぐくむ指導を学んでいく。授業のなかでは、実際に身の回りの事物・事象を生かした遊びや制作などの活動を体験することにより幼児教育と密接にかかわる生活科への理解を深める。					
授業のねらい ・到達目標	授業のねらい ・到達目標 ・小学校学習指導要領(生活編)と幼稚園教育要領の比較を通して、生活科の目標および内容が幼稚園教育の領域(環境)のねらいや内容と密接な関わりのあることを理解するとともに、学びと育ちを接続する幼保小の連携の現状や在り方について考えることができる。 生活科の教科書や映像記録をもとに体験活動を重視する生活科の教科としての特性に気づくことができる。					
授業の方法・授業計画						
1	生活科の創設の経過と背景 生活科授業を振り返る					
2	体験の価値 子どもの発達課題					
3	幼児期の発達と学び 映像資料から考える					
4	生活科の目標 内容 領域(環境)との比較					
5	生活科の内容と階層					
6	思いや願いを追究する生活科の学習過程					
7	生活科授業の実際 学習活動場面における教師の役割					
8	学習活動「秋となかよし」 どんぐり					
9	学習活動「秋となかよし」 振り返り 伝え合う					
10	学習活動「つくってあそぼう」 うごくおもちゃ					
11	学習活動「つくってあそぼう」 振り返り伝え合う					
12	子どもの空間認識 子ども世界を「生活科マップ」で表現する					
13	「私の原風景」 生活科マップで伝え合おう					
14	アプローチカリキュラムとスタートカリキュラム					
15	まとめ 学びと育ちをつなぐ生活科の役割・可能性					
期末						
テキストや資料を活用した講義形式を中心とする。その中でテーマに基づく意見交換、個の追究活動を取り入れる。また、身近な素材を活用しての制作活動や遊ぶ活動等も設定する。これらのなかでプレゼンテーションなど多様な表現活動を取り入れ相互の交流を図る。						
評価方法 及び評価基準	原則として毎時間簡単なレポートの提出を求める。 課題レポート・課題作品(40%) 期末レポート(30%) 授業への参加度(30%)					
事前・事後 学習の内容	各回の授業で扱う項目について所定のテキストや資料を読み、理解できたこと、できなかったところを明確にして授業に望むこと。授業で指示した課題に取り組んだり、不十分な内容については図書館等で調べること					
履修上の注意						
テキスト	小学校学習指導要領 解説 生活編 文部科学省 日本文教出版					
—						
—						
参考文献						

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	教職概論		副題	保育者をめざすための保育者論	
担 当 者	矢萩 恭子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	職業としての保育者(保育士・幼稚園教諭)について、関係法令を知るとともに、その制度的位置づけを確認する。また、保育・教育職として、その仕事の内容や責務について理解する。さらに、保育者の専門性について考え、保育者同士が協働し合い、保護者や地域社会・専門機関等と連携しながら成長するありようについて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1. 保育士・幼稚園教諭の制度的位置づけおよびその役割と意義について理解する。 【「履修ファイル」の対応項目:A-2(2)(4),A-4(1)】 2. 保育者の職務内容および専門性について理解する。 【「履修ファイル」の対応項目:A-2(4),A-4(1),C-1(1)(2)】 3. 専門職としての保育者について各々の保育者像を形成し、成長し続ける姿勢を獲得する。 【「履修ファイル」の対応項目:C-1(1)】				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション(保育者に求められる姿勢) ※【履修ファイル】持参				
2	保育・教育の基本にかかわる法令について／【「履修ファイル」の対応項目:A-2(2)】				
3	保育者の位置づけにかかわる法令について／【「履修ファイル」の対応項目:A-2(2)(4),A-4(1)】				
4	職業としての保育者①(保育者の職責と服務義務)／【「履修ファイル」の対応項目:C-1(1)】				
5	職業としての保育者②(資料にみる保育所・幼稚園・認定こども園の現状)				
6	保育者の一日と職務内容①(一日の流れと仕事内容)				
7	保育者の一日と職務内容②(子どもとともに生きる保育者の生活)				
8	保育者の一日と職務内容③(保育の循環性)／中間テスト				
9	保育者に求められる専門性①(記録と省察)／【「履修ファイル」の対応項目:C-1(2)】				
10	保育者に求められる専門性②(保育の計画と実践:保育課程・教育課程・指導計画)				
11	保育者に求められる専門性③(子ども理解とカウンセリングマインド)				
12	保育者に求められる専門性④(地域や専門機関との連携)				
13	保育者としての成長①(協働する保育者)				
14	保育者としての成長②(専門性向上の努力)				
15	本授業のまとめ(現代社会の課題と保育者の役割)				
期末	試験実施なし				
講義を中心とするが、配付資料の読み取りやテーマに関する検討などの際、グループでの話し合いなども行う予定である。また、自らの保育者像を形成していくために、テーマについての意見をリアクションペーパーを用いて記述する機会を適宜設ける。					
評価方法及び評価基準	確認のための中間テスト、授業のまとめ課題、受講態度などを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習としては、授業計画からテキストの該当箇所を予習し、事後学習としては、配付資料の復習やテキストの内容確認を行うこと。こうした学習の過程で、自らの保育観・保育者観を磨くことが期待される。				
履修上の注意	・授業後は、配付資料の整理・確認を行うこと。 ・欠席により後日資料が欲しい場合は、各自自分で対応すること。 ・日頃から保育・教育に関する社会の出来事や情報に積極的な関心をもって生活し、自分なりの意見をもつことが望ましい。				
テキスト	古橋和夫編、『改訂 教職入門 未来の教師に向けて』,萌文書林,2009			978-4-89347-123-9 C3037	
—	田園調布学園大学教職課程委員会編『田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科「履修ファイル」』※大学より全員に配付				
—					
参考文献	『保育者論—共生へのまなざし—』(第2版),榎沢良彦・上垣内伸子編著,同文書院,2010,ほか 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2008 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館,2008 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館,2014				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	教育の原理		副題		
担 当 者	生田 久美子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	1
授業の概要	「教育の原理」という学問は、教育という仕事を行う人々が心得ておくべき基本的な「知」―教育の目的や内容や方法―の解明を目的としている。現代において教育の仕事の中で、社会的に中核の地位を占めるのがいわゆる「学校」とそれに類するさまざまな機関である。本講では、まずは歴史的な観点から「教育とは何であったか」という素朴な問いを問うことから始め、「学校教育」、「家庭教育」、そして「社会教育」の特徴と課題を明らかにした上で、あらためて「教育とは何か」を問いつつ、新たな教育の可能性について展望する。				
授業のねらい・到達目標	・「教育とは何であったか」「教育とは何か」について各自の解答を導き出せる。(履修ファイルにおける項目A-2(1)に対応。) ・「学校教育」「家庭教育」「社会教育」のそれぞれの特徴と課題を述べることができる。(履修ファイルにおける項目A-2(2)に対応。) ・新たな教育の可能性について論じることができる。(履修ファイルにおける項目A-2(1)に対応。)				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション―「教育の原理」とはどのような学問か				
2	「教育の原理」が対象とする「教育」とはいったい何か				
3	歴史的な観点から「教育とは何であったか」を考察する				
4	「保育」と「教育」の関係について考える				
5	「教育」という言葉の意味を探る- 日常言語の中の「教育」				
6	「教育」という言葉の意味を探る―「教育」という言葉の定義				
7	教育観とその類型(モデル)―手細工モデルと農耕モデル				
8	プラトンとルソーの教育思想に示される二つの教育観				
9	二つの教育観の対立				
10	教育の「場」とその役割―「学校教育」とは何か				
11	教育の「場」とその役割―「家庭教育」とは何か				
12	教育の「場」とその役割―「社会教育」とは何か				
13	新たな教育の可能性―J.R.マーティン著『スクールホーム』が示唆すること				
14	新たな教育の可能性―J.R.マーティン著『カルチュラル・ミスエデュケーション』が示唆すること				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	小レポート(20%)、確認テスト(70%)、授業態度(10%)				
事前・事後学習の内容	毎回配布する資料を読み予習をして授業に臨むこと、また、授業後は自分のノートをまとめ復習し、次回の授業に臨む必要がある。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	毎時間配布するパワーポイントの資料をテキストとする。				
―					
―					
参考文献	授業内で適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	幼児教育史		副題	子どもは「誕生」し、そして「消滅」したか	
担 当 者	杉下 文子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	幼児教育の歴史を学ぶことは、取りも直さず「子ども(幼児)」という概念がいかなるものとして人々に抱かれてきたか、を検討することである。本講ではまず、17世紀～20世紀前半に活躍した欧米の教育思想家や実践家が「子ども」や相応しい教育をどのようなものと考えたか、を学習する。その上で、明治期以来、西洋幼児教育思想やそれを反映した教育制度がわが国に導入されてきた過程を追ひ、近現代日本の幼児教育への理解を深めると共に、私たちの社会の「子ども」が如何なる存在であると言えるのか、考察することへと繋げていく。				
授業のねらい ・到達目標	・「子ども」「幼児」という社会的存在への眼差しの歴史を理解すること。 ・現代社会における「幼児」をめぐる諸問題について論じることができること。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション:子どもへの眼差しの歴史 序論				
2	17世紀以前の「子ども」たち:コメニウス、ロックの教育論				
3	ルソーによる「子ども」の発見—『エミール』より				
4	ロックとルソー —近代的孩子観をめぐって				
5	ペスタロッチからフレーベルへ「幼稚園」創設				
6	フレーベルと「遊び」の教育学				
7	新教育運動① モンテッソーリと「子どもの家」				
8	新教育運動② 幼児の発達への科学的眼差し				
9	西洋幼児教育思想のわが国への影響—明治初期の幼児教育制度				
10	わが国における幼児教育の成立—倉橋惣三の活躍				
11	わが国における幼児教育の発展				
12	現代の「子ども」たち① 「規範意識の低下」「低い自尊感情」?				
13	現代の「子ども」たち② 情報化、国際化の流れのなかで				
14	「子ども」という概念の歴史—「子ども」は誕生し、消滅したのか?				
15	まとめと授業内試験				
期末	試験実施なし				
配布資料及びパワーポイントを利用した講義を中心とする。					
評価方法 及び評価基準	授業内試験(40%)、小レポートなどの授業内提出物(30%)、授業態度(30%)				
事前・事後 学習の内容	予習用資料がある際には予め読んで授業に望むこと、授業内容は各自復習して次講に望むことが必要である。				
履修上の注意	初回授業時に出欠席や提出物の扱いについて説明するので、履修希望者は出席することが望ましい。				
テキスト	毎時間配布する資料をテキストとする。				
—					
—					
参考文献	ニール・ポストマン『子どもはもういない』(小柴一訳)1995年、新樹社				

2016/11/10(木)11:15

科 目 名	発達心理学		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	人は生涯をかけて、発達し続ける。 本講義では、人の発達の各時期における特徴や障がいについて概観する。人の心や身体、そしてそれを取り巻く環境が、段階を経てどのように変化するのかについて学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	・各発達段階の心理学的な特徴がわかる。 ・発達における遺伝と環境の影響を理解する。 ・これらの学びを踏まえて、子どもの年齢や個人差に応じた適切なサポートのあり方を考えることができる。 「履修ファイル」の対応項目 :A-3(1)~(3), B-1(1)~(7)				
授業の方法・授業計画					
1	発達心理学とは				
2	発達の法則性、発達段階				
3	発達の要因(遺伝と環境)				
4	胎児期(胎児の発達・親子関係)				
5	乳児期(赤ちゃんの能力)				
6	幼児期(認知発達)				
7	幼児期(社会性)				
8	児童期(学習理論)				
9	児童期(達成動機)				
10	発達障がいの理解とその支援				
11	青年期(アイデンティティ)				
12	青年期(性役割・親子関係・友人関係)				
13	成人期(キャリア発達、夫婦・親としての発達)				
14	中年期(アイデンティティ)				
15	老年期(死の受容・自己実現)				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	参加態度(30%)、小テスト(20%)、期末試験(50%)から総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	事前に授業内容を確認し、課題が示されている場合は必ず準備をして授業に臨むこと。 事後は毎回必ず復習をし要点はしっかりとノートにまとめることにより、知識の定着をはかること。 また、授業で学んだ知識や考え方をもとに、自分のこれまでの成長を振り返ったり、今後について考える機会をもつことを期待する。				
履修上の注意	知識の定着をはかるため、授業中に課題や小テストを予定している。				
テキスト	特になし。				
—					
—					
参考文献	適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	教育心理学		副題		
担 当 者	本多 潤子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	子どもを取り巻く環境が変化し、学びの質がより問われるようになった今日、教育の理解や改善のために教育心理学が果たすべき役割はますます高まっている。本講義では、教育に関する心理学的知見を広く紹介する。具体的には、発達と教育、学習のメカニズム、動機づけ、集団のダイナミクス、社会性の発達、学校場面における教授法や評価法、特別な教育的支援について扱い、具体的な教育場面と関連づけながら検討していく。				
授業のねらい・到達目標	1.発達・学習・動機付けなどの教育場面での子どもの理解を助ける知識を習得する。 2.仲間関係を始め、社会性の発達など学級経営に役立つ知識を習得する。 3.教授法と評価法など、指導計画に関連する知識を習得する。 4.子どもの行動の問題の背後にどのような要因がありうるかを整理して述べるができるようになる。 5.特別な配慮や支援を必要とする子どもに対して、適切な支援をすることができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	教育心理学とは				
2	発達を規定する要因－かえるの子はかえるか？－				
3	やる気を高める－動機づけの心理学－				
4	学習のメカニズム(1)古典的条件づけと道具的条件づけ				
5	学習のメカニズム(2)知識をしっかりと身につけるには				
6	授業の心理学(1)学習指導の理論				
7	授業の心理学(2)協同学習・学習の個性化				
8	社会性を育む				
9	自己とパーソナリティ				
10	知的能力とは何か				
11	学級の心理学				
12	特別支援教育と障害児の心理				
13	不適応と心理臨床				
14	教育評価を指導に活かす				
15	教育心理学を実践に活かすには				
期末	試験実施				
講義形式で行う。小テストを実施する。					
評価方法及び評価基準	期末試験、小テストおよび講義終了時に提出するリアクションペーパーの内容により総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画に基づき、事前に教科書を読んでおくこと。また授業後は教科書と配付資料を読み復習を行い、知識の定着を図ること。				
履修上の注意	授業への積極的な参加を求めます。				
テキスト	『実践につながる教育心理学』 櫻井茂男(監修)黒田祐二(編著)(北樹出版)				4779303257
－					
－					
参考文献	講義の中で、適宜紹介する。				

2016/11/10(木)11:14

科 目 名	乳幼児発達心理学		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	2
授業の概要	乳幼児期は著しく変化の大きい時期である。本講義では、子どもの「育ち」に関する心理学の先行研究を紹介する。様々な角度から子どもの発達の特徴をとらえ、サポートのあり方を考える機会としたいと考える。				
授業のねらい ・到達目標	・乳幼児期の子どもの発達のな特徴を理解する。 ・子どもの発達の個人差について理解し、それぞれの子どもの発達の様子をとらえることができる。 ・それぞれの子どもに適したサポートのあり方を考え、実行できるようになる。 「履修ファイル」の対応項目 :A-3(1)~(3), B-1(1)~(7)				
授業の方法・授業計画					
1	乳幼児発達心理学とは				
2	発達理論				
3	運動の発達				
4	自己認知				
5	因果性の理解				
6	愛着の個人差と文化差				
7	情動の発達				
8	ことばの発達とコミュニケーション				
9	社会性の発達				
10	遊びの発達と仲間関係				
11	道徳性の発達				
12	食の発達				
13	発達のつまずき				
14	子どもを取り巻く環境				
15	子育て支援				
期末	試験実施				
評価方法 及び評価基準	授業への取り組み(30%)、および試験(70%)から総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	事前に、授業計画にて授業内容を確認し、事前に示された課題に取り組んでから授業に出席すること。事後は、十分な復習により知識の定着をはかること。また、乳幼児と接する機会には、子どものことをよく観察することを心がけ、実体験をもって乳幼児の発達についての理解を深めることを期待する。				
履修上の注意	基本的には講義形式であるが、ワークシートや発表なども取り入れる予定である。積極的な参加が求められる。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	教育行政学			副題	
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	学校や社会教育施設などにおける教育活動は、法律を根拠とした「教育制度」や「教育行政」によって成り立っている活動である。それゆえに、教育活動に携わる専門職は、これらの教育法規・教育行政等に関する基本的な知識を身につけておくことが必要不可欠である。また、こんにち、教育を取り巻く環境は大きく変わりつつあり、それに伴って、教育行政のあり方も再考をせまられてきている。本講義では、教育現場への理解を深めつつ、学校教育に必要な基本的な法律や制度を中心に扱っていく。				
授業のねらい・到達目標	教育行政に関する基礎知識や関連法規を学び、行政学の観点から見た現在の学校教育現場の課題について深い議論ができるようになることを目標とする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(2)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	現代の学校教育の諸問題①（非社会的行動：不登校）				
3	現代の学校教育の諸問題②（反社会的行動：いじめ、非行）				
4	教育行政とは				
5	幼児教育・保育制度				
6	公教育制度				
7	学校教育における「中立性」				
8	教育法規				
9	教育財政				
10	生涯学習と社会教育制度				
11	教職員の制度的位置づけ				
12	教育課程と教科書				
13	学校評価				
14	学校選択制				
15	まとめ				
期末	試験実施せず				
評価方法及び評価基準	ワークシート（75%）、小テスト（20%）、自己評価（5%）で評価する。発表等で講義に貢献した分も評価の対象とする（プラス評価に利用）				
事前・事後学習の内容	講義で扱う予定の内容に関するテキストの該当箇所を事前に読んでおくこと。また、講義で触れなかった部分を読んで復習し、考えを深めること。				
履修上の注意					
テキスト	川口洋誉・中山弘之、『未来を創る教育制度論』、北樹出版			978-4-7793-0372-2	
—					
—					
参考文献	講義の中で、適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	教育課程論		副題		
担 当 者	岩本 親憲				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	教育課程(カリキュラム)とは何かを明らかにし、現代におけるカリキュラムのあり方を、社会とのかかわりの中で考えていく。そして、「文化」・「知識」の伝達としての教育と、子ども中心主義の教育の両方の思想を踏まえながら、教育課程の編成について理論的・実践的に考察していく。また、幼稚園教育要領、保育所保育指針、法規等の理解に基づいて、実際にカリキュラム編成するための基礎知識を学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	授業のねらいは、以下の3点である。 ①「教育課程」(カリキュラム)とは何か、を理論的に説明できるようになること。 ②教育課程と関連する法規・法令等を理解すること。 ③教育課程の編成と手順について理解し、実際に指導計画を作成できるようになること。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(1),A-4(4),A-4(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス、教育課程(カリキュラム)とは何か(清水、岩本)				
2	幼児教育における教育課程の変遷と理論的背景(岩本)				
3	学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針(岩本)				
4	文化伝達としての教育課程(岩本)				
5	子ども中心主義の教育課程(岩本)				
6	カリキュラムの類型、スコープとシークエンス(岩本)				
7	隠れたカリキュラム(岩本)				
8	幼稚園、保育所における教育課程・保育課程編成の基礎知識、小テスト(清水、岩本)				
9	指導計画を作成するには(清水)				
10	指導計画の実際(1) ー幼稚園ー (清水)				
11	指導計画の実際(2) ー保育所ー (清水)				
12	指導計画の実際(3) ー異年齢児の保育等ー (清水)				
13	教育・保育計画と評価(清水)				
14	教育・保育計画、教育課程と実践(清水)				
15	地域や小学校との連携と教育課程、まとめ(清水、岩本)				
期末	試験実施				
授業は、講義形式を中心としつつ、ワークシートを利用した少人数でのグループワークも取り入れて行う。					
評価方法及び評価基準	①授業態度(10%)、②小テスト+ワークシート(30%)、③期末試験(60%)				
事前・事後学習の内容	予習・復習をして授業に臨むこと。特に復習を大切にすること。資料プリントを配布するので、該当箇所を熟読の上授業に臨むこと。				
履修上の注意	資料を整理するファイルを用意すること。				
テキスト	配布資料をテキストとする。				
—					
—					
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容総論		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育の中で生じた様々な具体例を題材に、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」において示されている保育内容の基本的な位置づけや原理について学び、子どもの育ちを支える保育の在り方について理解を深めていきます。また、実習などの経験に基づいて具体的な子どもの姿をイメージしながら、保育内容に関連する保育の諸課題への対応を考える姿勢を持つようし、幼稚園・保育所の保育内容のあるべき姿を検討していきます。				
授業のねらい・到達目標	幼稚園・保育所における保育内容についての基礎的な概念を理解するとともに、乳幼児期の特徴を保育内容の視点から捉える姿勢を形成し、保育観の再構築や保育者のあるべき姿を検討し、力に繋がる多様な視点を獲得していくことを目標としています。 【「履修ファイル」の対応項目: A-4(3)(4), D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容とは何か				
3	子ども理解と保育内容				
4	「遊び」から捉えられる保育内容(1)～歴史的変遷を手がかりに～				
5	「遊び」から捉えられる保育内容(2)～保育における遊びの意味とは～				
6	「生活」から捉えられる保育内容～保育の一日～				
7	「発達」から捉えられる保育内容(1)～低年齢児の生活と保育内容～				
8	「発達」から捉えられる保育内容(2)～3歳以上児の生活と保育内容～				
9	様々な保育形態とその背景としての保育内容				
10	幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容の捉え方				
11	様々な配慮を必要とする子どもの園生活と保育内容				
12	社会の変化と保育内容				
13	保育所・幼稚園と小学校との連携と保育内容				
14	保育内容と保育者の専門性				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業内に実施する小テスト、コメントシート、提出物、授業への参加意欲・態度など総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習では、授業計画の内容を確認し、自分なりの意見や疑問をもって参加してください。また、授業後は資料や記録を振り返り理解を深めるようにしてください。				
履修上の注意	資料、記録等を整理・保管するファイル等を各自用意し、毎時間持参するようにしてください。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(健康I)		副題		
担 当 者	安村 清美				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの生活と遊びを基盤とした、保育における健康の考え方と実際について、領域特性と他領域との関連性を考慮に入れつつ学ぶ。 さらに、乳幼児期の心身の育ちを理解しつつ、この期の 具体的な子どもの遊びとその援助について、相互の関連性を考慮しながら、子どもの育ちを支える保育者のあり方を考えていく。				
授業のねらい・到達目標	1.保育内容健康について基本的知識および考え方を学び、これを基礎に、健康にかかわる乳幼児の心と身体の育ちについての理解を深める。【「履修ファイル」の対応項目：A-3(1),(3)】 2. 乳幼児期の心身の発達に即した、具体的な遊びや生活の援助について考察する事ができるようになる。さらに、保育者として子どもとかわることの視点と方法に繋がるような実践について考えることができるようになる。【A-3(2),D-2(1),(2),(3),(5),D-3(1),(2)】				
授業の方法・授業計画					
1	心身の健康に関する領域・健康の意味				
2	保育内容健康と他領域との関連性、総合性について				
3	子ども理解、保育者の役割と領域健康				
4	発達のとらえ方・子どもにとっての心身の発達				
5	身体および運動の発達の基礎知識				
6	基本的生活習慣・生活習慣の獲得と乳幼児期				
7	子どもにとっての基本的生活習慣とあそび				
8	運動あそびの考え方①子どもにとっての運動あそびの意味				
9	運動あそびの考え方②運動あそびの分類と特徴				
10	生活リズムと基本的生活習慣① 健康にかかわる子どもの生活実態				
11	生活リズムと基本的生活習慣②遊び、食育、生活リズム				
12	運動あそびの実際― 事例比較				
13	運動あそびの実際― 遊びと教材				
14	指導計画の作成と検討				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
講義及び演習を通して授業を行う。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業における小テスト(40%)、課題レポート(30%)、授業態度及び授業中の活動(30%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に配布する資料を参考に、教科書の指定ページを事前に熟読すること。 事後は、資料を読み返し、授業内容について重要事項をまとめることが望ましい。				
履修上の注意	授業は、講義および演習形式で行う。このため、主体的に参加し、自ら考える姿勢での出席が望ましい。 また、子どもの姿についての検討にあつては、映像資料を参考にすることがある。				
テキスト	『保育内容 健康』 榎沢、入江編著 建帛社				978-4-7679-3251-4
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業時に紹介する。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(健康II)		副題		
担 当 者	有川 いずみ				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	子どもの心と身体の健康を守り育てるために必要な活動についての理解を深める。 それらを保育活動の中で、安全に活用するための実践方法や知識を学ぶ。 指導計画や指導案を作成し、実践、応用展開できるようにする。				
授業のねらい・到達目標	1. 保育における、健康指導と健康管理の役割と実践方法を学ぶ。 2・子どもの心と身体の健康を維持・促進するために、保育目標や発育・発達に応じた指導案を作成する。 3. 作成した指導案に基づいて、適切に活動を行うことができるようにする。 4. 模擬保育で保育者と子どもそれぞれの立場に立ち、安全の確認、子どもの興味や関心を引き出す働きかけ、子ども同士の学び合いの工夫など、指導方法を検討し理解する。 5. 保育環境や保育教材を、子どもの状況に応じて柔軟に対応し、発展的に応用展開できる力をつける。 6. 保育者として、保育活動を行う上での自分の特性、特技を発見する。 【「履修ファイル」の対応項目: A-3(1)～(3), D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション 保育者としての健康管理と、子どもの心と身体の健康指導				
2	エクササイズ 生活の中での健康指導				
3	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(0～2歳児)				
4	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(3～4歳児)				
5	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(5～6歳児)				
6	エクササイズ 子どもの健康指導 発育・発達から(まとめ)				
7	エクササイズ発表(健康につながる身体の動かし方)				
8	ビデオによる子どもの活動研究				
9	教材・指導案作り				
10	模擬指導Ⅰ 指導と援助方法の検討 (身体をたくさん動かせる遊び)				
11	模擬指導Ⅱ 指導と援助方法の検討 (リズムに乗って一緒に遊ぼう)				
12	模擬指導Ⅲ 指導と援助方法の検討 (リング・ボールを使った遊び)				
13	模擬指導Ⅳ 指導援助方法の検討 (なわ・その他体育教材を使った遊び)				
14	模擬指導Ⅴ 指導と援助方法の検討 (しんぶんしなど生活教材を使った遊び)				
15	まとめ				
期末	無し				
評価方法 及び評価基準	学習意欲・受講態度・毎回の授業の理解度(35%) 模擬指導・教材作成(35%)、実技試験(30%)として評価する。				
事前・事後 学習の内容	事前に示した課題について、下調べをする。 授業で取り組んだ課題について、工夫した点、改善する点などをまとめる。				
履修上の注意	活動にふさわしい服装(体育着・体育館履きなど)、及び筆記用具など指示に従ってください。 必要に応じて資料を配布するので、ファイリング保存すること。				
テキスト					
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年)				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(人間関係I)		副題		
担 当 者	高嶋 景子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教育要領や保育所保育指針における保育内容の基本的な捉え方を踏まえつつ、領域「人間関係」の意義や内容について学びます。その上で、多くの具体的な事例やビデオなどを通して、子どもたちが遊びや生活のなかで、人とのかかわりを広げ深めていく過程について理解を深めていきます。そして、それらのかかわりや、そのかかわりを通しての個々の子どもの育ちを支えていく保育者の視点や援助について、グループ討議などを通して検討し合い、学びを深めていくことを目指します。				
授業のねらい・到達目標	保育における領域「人間関係」の意義と位置づけについて理解し、子どもたちのかかわりの世界の広がりや深まりを読み解くための基本的な視点を獲得すると同時に、それらの育ちを支える保育者の援助の在り方について考えることを目的としています。 【「履修ファイル」の対応項目：B-1(4)(5)(6)(7),D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	保育内容の捉え方と領域「人間関係」				
3	「人間関係」にかかわる現代社会の状況と諸課題				
4	人とのかかわりが育つ道筋(1)～乳児期を中心に～				
5	人とのかかわりが育つ道筋(2)～幼児期を中心に～				
6	人とのかかわりをみる視点(1)～自立を支える「心の拠り所」～				
7	人とのかかわりをみる視点(2)～いざこざ・トラブル・葛藤～				
8	人とのかかわりをみる視点(3)～イメージの共有・協働する経験～				
9	遊びの中で育つ人とのかかわり(1)～保育における遊びと学び～				
10	遊びの中で育つ人とのかかわり(2)～遊びを支える保育者の援助～				
11	「個」と「集団」の育ちを支える保育者の理解と援助(1)～保育の両義性の理解～				
12	「個」と「集団」の育ちを支える保育者の理解と援助(2)～仲間集団の課題への援助～				
13	子どものかかわりの世界を支えるおとなの人間関係(1)～保護者の育ちを支える保育者の役割～				
14	子どものかかわりの世界を支えるおとなの人間関係(2)～省察を生み出す対話的關係の構築へ向けて～				
15	まとめ				
期末	試験実施				
評価方法及び評価基準	学期末試験および授業内の提出課題、授業への参加態度等により総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習については、授業計画にて予め各階の内容を確認し、テキストの該当箇所を熟読の上、授業に参加してください。また、授業後は十分な復習を行い、各自の理解を深めることが望まれます。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『最新保育講座(8)保育内容「人間関係」』森上史朗・小林紀子・渡辺英則編(ミネルヴァ書房)			978-4-623-05498-5	
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(人間関係Ⅱ)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	乳幼児期における人とかかわりが育つための保育者の援助や保育の在り方について、子どもを取り巻く環境の変化も視野に入れながら実践事例を通して理解を深めていきます。事例検討では、グループディスカッションやロールプレイング等を行いながら他領域との関係や保育者、保護者、地域等人とかかわりの重要性など総合的に学びます。				
授業のねらい・到達目標	子どもの視点から人とかかわりを捉え、生活や遊びを総合的に支えていける保育者の役割について検討していくとともに、乳幼児が人とかかわる力を身に着けていく過程や、「個」と「集団」の育ちを支える保育者の役割や援助についても理解を深めていくことを目標とします。 【「履修ファイル」の対応項目: B-1(4)～(7), D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	人とかかわりを育てる保育の実践(1)～人とかかわれない、かわらない子どもたち～				
3	人とかかわりを育てる保育の実践(2)～人とかかわる力が育つプロセスとは～				
4	気になる子どもと他児とのつながり～型はめにならないために～				
5	気になる子どもと他児とのつながり～子どもの育ちを支える保育者の援助～				
6	保育の両義性から考える「個」と「集団」の育ちを支える保育者の役割～				
7	子どもたちの関係性を捉える保育者のまなざし～遊びにおけるいざこざ～				
8	人とかかわりを育てる保育者の役割(1)～共に生活するモデルとして～				
9	人とかかわりを育てる保育者の役割(2)～理解者・援助者として～				
10	人とかかわりを育てる保育者の役割(3)～対話が生まれる場の保育～				
11	保護者支援と保育者の役割～子どものかかわりを育てる保護者との関係～				
12	地域・関係機関との連携～子どものかかわりを育てる地域社会～				
13	保育者の協働性と保育者の成長～子どもが育つ場、保育者が育つ場～				
14	領域「人間関係」と他領域との関連～ホリスティックな保育実践をめざして～				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業内に実施する小テスト、コメントシート、提出物、授業への参加意欲・態度など総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習では、授業計画の内容を確認し、テキストの該当箇所を熟読するなど自分なりの意見や疑問をもって参加してください。また、授業後は資料や記録を振り返り理解を深めるようにしてください。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	『最新保育講座(8)保育内容「人間関係」』森上史朗・小林紀子・渡辺英則編(ミネルヴァ書房)			978-4-623-05498-5	
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(環境I)		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	<p>幼児教育において「環境を通して行う教育」という表現が通例化して用いられている。この表現には保育者の願いや意図を環境を通して実現するという意味合いも込められているが、保育における環境は第一義的には子ども自身によって経験され、意味を与えられる「生きられる空間」であると言える。</p> <p>子どもの側から環境の意味を考えることが保育実践における環境構成の基礎となる。本授業では子どもがそれをいかに経験するかという観点から実践事例や文献の検討を通して保育における環境構成の問題について考えていく。</p>				
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none">・ 保育における環境を子どもがいかにそれを経験するかという視点から考えること。・ 子どもによる環境の経験を充実させるという観点から保育者のあり方を考えること。・ 保育の実践事例や保育現場の環境構成の事例を通して具体的な環境構成の方法について考えること。 【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	子どもが保育空間を生きるとはどのようなことか(1) 保育者との関係に支えられて				
3	子どもが保育空間を生きるとはどのようなことか(2) 園が子どもの居場所となること				
4	保育理念を表現した環境構成の事例				
5	現代の子どもの遊び環境				
6	物的環境と子どもの友だち関係(1) 物に対するイメージの違いをめぐって				
7	物的環境と子どもの友だち関係(2) 自分の作品に自信が持てること				
8	環境を通した教育とは何か(1) 倉橋惣三『幼稚園真諦』より				
9	環境を通した教育とは何か(2) 倉橋惣三『幼稚園雑草』より				
10	子ども自身が創り上げる環境				
11	保育の中で即興的に創りあげられる環境				
12	子どもの思いを環境の中に実現する				
13	文化人類学の知見から-環境としての文化-				
14	環境と隠れたカリキュラム				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、リアクションシートの記入などを含む授業中の活動(60%)と学期末レポート(40%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて配布するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。				
履修上の注意	受講者自身が考え、学び合っていくことを重視し、グループワークを毎回取り入れていく。積極的な参加を期待したい。				
テキスト					
—					
—					
参考文献	『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 2008年				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(環境Ⅱ)		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	<p>「保育内容(環境Ⅰ)」を踏まえ、保育所や幼稚園における環境構成を考えるためのより実践的な問題群へと探求を進めていく。</p> <p>その際、前提となるのは保育における環境が第一義的には子ども自身によって経験され、意味を与えられる「生きられる空間」であるということである。実践事例や文献の検討を通して保育における環境が子どもにとってもつ意味とそれを踏まえた保育者の環境構成の工夫について学ぶ。</p> <p>また、本授業では保育環境にかかわる複数のテーマを設定し、受講生自身の研究や実習経験の省察に基づくグループ研究を取り入れる。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>・子どもの側から環境の意味を考える視点に立ち、保育における環境構成にかかわる実践的な問題群について考察を深めること。</p> <p>・子どもによる環境の経験の充実に向けた保育者としての支援についてイメージを掴み、現場での実践につなげていくこと。</p> <p>・保育環境にかかわる諸テーマについて、グループ研究を通して子どもの側から環境の意味を考える視点で考察を深めること。</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)～(4)】</p>				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	子どもと大人ではなぜ環境の経験の仕方が異なるか？				
3	子どもは環境をいかに経験するか？- 事例から考える -				
4	子どもと自然(1) センス・オブ・ワンダー				
5	子どもと自然(2) 生命とのかかわりの事例				
6	子どもと文字、数量、図形				
7	環境と子どもの遊びのイメージ				
8	物的環境が子どもの居場所の形成にとってもつ意味				
9	海外の保育実践から学ぶ				
10	グループ研究準備				
11	グループ研究発表(1)-子どもと玩具、遊具-				
12	グループ研究発表(2)-子どもと自然物-				
13	グループ研究発表(3)-子どもと生物-				
14	グループ研究発表(4)-子どもと文字、数量、図形				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	グループワークへの参加、リアクションシートの記入などを含む授業中の活動(45%)とグループ研究への取り組み(25%)、学期末レポート(30%)をもとに評価する。				
事前・事後学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて配布するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。 グループ研究は半期を通してグループ毎に進めてもらう。				
履修上の注意	知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト					
—					
—					
参考文献	『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 2008年				

2015/03/26(木)17:10

科 目 名	保育内容(言葉I)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	乳幼児期における言葉の発達の持つ意味について理解を深めるとともに、乳幼児期の言葉の発達の特徴を学び、絵本や紙芝居などの児童文化財の演習などを通して、子どもの言葉を育てる具体的な保育者の援助のあり方について理解を深めます。また、幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容「言葉」のねらいや内容をどのように実現していくのか、具体的な事例を通して考えていきます。				
授業のねらい・到達目標	乳幼児期の言葉の発達過程を理解するとともに、領域「言葉」の内容が子どもの言葉の育ちを支える保育者の援助とどのように重なっていくのかを理解していくことを目標としています。また、多くの絵本等に親しみ、自らの言葉や感性を豊かにしていくことを期待します。 【「履修ファイル」の対応項目: D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	言葉の育ちと保育①(言葉の育つ道筋)				
3	言葉の育ちと保育②(言葉の前の言葉)				
4	言葉の育ちと保育③(言葉が育まれるために)				
5	人と繋がる言葉①(1～2歳児を中心に)				
6	人と繋がる言葉②(3～6歳児を中心に)				
7	乳幼児期の言葉の発達と保育者の援助				
8	言葉の発達を捉える視点				
9	言葉にならない言葉、からだが語る言葉				
10	生活体験、イメージを共有する				
11	児童文化財で広がる世界①(絵本の世界)				
12	児童文化財で広がる世界②(紙芝居の世界)				
13	児童文化財で広がる世界①(ストーリーテリング)				
14	領域「言葉」の変遷				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業内に実施する小テスト、コメントシート、提出物、実技、授業への参加意欲・態度など総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習では、授業計画の内容を確認し、自分なりに下調べをするなど積極的に参加してください。また、授業後は資料や記録を振り返り理解を深めるようにしてください。				
履修上の注意	資料、記録等を整理・保管するファイル等を各自用意してください。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配布します。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育内容(言葉II)		副題		
担 当 者	清水 道代				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	保育内容(言葉Ⅰ)での学びを基礎に乳幼児期の言葉の育ちに重要な環境や保育者のかかわり、援助について具体的な事例を通して学びます。また、言葉が豊かに育ち、心豊かに生活できるような保育内容を具体的に計画し、そのための方法についても学びます。更に言葉でのかかわりに配慮を必要とする子どもに対する対応など総合的に知見を深めます。				
授業のねらい・到達目標	乳幼児期の言葉の発達過程を理解するとともに、一人一人の子どもの言葉の育ちを支える保育者の援助について理解を深めていくことを目標としています。また、言葉が豊かに育ち、心豊かに生活できるような保育内容をデザインする実践力を獲得することを目指します。 【「履修ファイル」の対応項目: D-2(1)(2)(3)(5)(6), D-3(1)～(4)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	幼児教育の基本から領域「言葉」を振り返る				
3	乳児期の発達と言葉				
4	幼児期の発達と言葉				
5	言葉に関する事例と考察①(子どもたちのミーティング)				
6	言葉に関する事例と考察②(子どもたちの100の言葉)				
7	言葉を育てる保育者の役割と援助①(活動構想)				
8	言葉を育てる保育者の役割と援助②(環境構成、教材研究)				
9	言葉を育てる保育者の役割と援助③(発表及び検討)				
10	言葉でのかかわりに配慮を必要とする子ども				
11	言葉をめぐる相談支援				
12	言葉に関する事例の検討①(実習等で出会った子どもの姿から)				
13	言葉に関する事例の検討②(実習等で出会った保育者の姿から)				
14	保育者の専門性を支える協同性・協働性				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	授業内に実施する小テスト、コメントシート、提出物、実技、授業への参加意欲・態度など総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	事前学習では、授業計画の内容を確認し、自分なりに下調べをするなど積極的に参加してください。また、授業後は資料や記録を振り返り理解を深めるようにしてください。				
履修上の注意	資料、記録等を整理・保管するファイル等を各自用意して、毎時間持参するようにしてください。				
テキスト	特になし。				
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業内で随時紹介し、必要に応じて資料を配布する。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育内容(表現I)		副題		
担 当 者	安村 清美				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	子どもの表現にかかわる講義や実践記録などを通して、もの、音、動き、言葉による総合的な表現の育ちを理解する。また、実践例などを通して、子どもにとっての表現とは何かについて考え学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	1.乳幼児期のあそびや生活に見られる総合的な表現について、理論とその実際から子どもにとっての表現の意味について考察することができる。 2. 乳幼児期の、表現とコミュニケーションの特徴と重要性について理解すると同時に、これを感じ得る感性をもつ。 3. これらを基礎に、保育者として子どものさまざま表現に対して必要な援助について考え計画・実践することができる。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(1)(2)(3)、D-3(1)(2)(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	表現とは何か。子どもにとっての“表れ”と“表し”				
2	保育内容・表現のねらいと内容				
3	保育内容・表現と他領域の関連性				
4	保育内容・表現の歴史的変遷と問題点				
5	表現の育ち① 日常生活と表現				
6	表現の育ち② 表れと表し				
7	表現の育ち③ イメージ・想像から創造へ				
8	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える① 題材と個性				
9	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える② 題材と集団性				
10	保育実践を手がかりに子どもの表現を考える③ 表現の方法と内容				
11	総合的な表現とコミュニケーション				
12	表現を育てる保育者の役割				
13	指導案作成と検討、実践①子どもの姿に即した表現にかかわる部分指導案				
14	指導案作成と検討、実践② 模擬保育と振り返り				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
講義、演習、実践を含む。					
評価方法及び評価基準	学習意欲、受講態度及び授業の理解度を総合して判断する。 授業における小テスト(40%)、課題レポート(30%)、授業態度及び授業中の活動(30%)として評価する。				
事前・事後学習の内容	授業時に配布する資料を参考に、教科書の指定ページを事前に熟読すること。 事後は、資料を読み返し、授業内容について重要事項をまとめ、課題を完成する。				
履修上の注意	授業は講義および演習形式で行う。クラスやグループでの討議などに主体的に参加する姿勢を望む。 子どもの表現についての感覚的な把握のため、具体的な子どもの表現について検討するにあたっては、映像資料を使用する。				
テキスト	『保育内容 表現』入江・榎沢編著 建帛社				978-4-7679-3204-0
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業時に紹介する。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育内容(表現II)		副題		
担 当 者	中原 篤徳				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	「音楽」「造形」表現の指導方法について考え、子どもに対する適切な表現活動への支援について理解を深める。また、表現の実践を通し、その過程と成果を経験する。こうした学びを通じ、子どもの姿と保育者の援助について検討する。				
授業のねらい・到達目標	●「音楽」「造形」の指導方法を学ぶ。 ●グループでの総合的な表現の実践を通し、創造し表現することの意味に気づき、他者とのコミュニケーションの在り方についても考える。 ●授業終了時の到達目標 自らの実践を通し、乳幼児期における表現の意義を理解し、子どもの表現活動に共感しながら援助できる能力を身に付ける。 【「履修ファイル」の対応項目：D-2(2)、D-3(4)(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	ローテーション授業①：造形の指導方法1「造る」とは何か(中原)				
3	ローテーション授業①：音楽の指導方法1「音楽」とは何か(斉木)				
4	ローテーション授業②：造形の指導方法2 子どもの発達と造形(中原)				
5	ローテーション授業②：音楽の指導方法2 子どもの音楽的発達(斉木)				
6	ローテーション授業③：造形の指導方法3 子どもの表現と大人の表現(中原)				
7	ローテーション授業③：音楽の指導方法3 子どもの音楽表現を考える(斉木)				
8	ローテーション授業④：造形の実践1 動く作品の制作(中原)				
9	ローテーション授業④：音楽の実践1 声で表現する(斉木)				
10	ローテーション授業⑤：造形の実践2 身体による表現(中原)				
11	ローテーション授業⑤：音楽の実践2 身体を用いた音楽表現(斉木)				
12	総合的な表現活動計画立案ー共通課題による				
13	総合的な表現活動準備・制作・練習				
14	総合的な表現活動準備・制作・練習、完成				
15	総合的な表現活動発表				
期末	試験実施なし				
評価方法 及び評価基準	授業内評価 授業中の活動および発表によって評価をする。				
事前・事後 学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前に該当部分の準備や下調べをして授業に出席すること。 授業後は、記録を残すなど十分な復習を行い、次回授業に繋がるよう心掛けること。				
履修上の注意	・実践的な活動が主になるので、動きやすい服装で出席すること。 ・制作にかかる費用は原則、自己負担となる。				
テキスト					
—					
—					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) その他、授業時に紹介する。				

2016/11/17(木)14:19

科 目 名	保育内容(表現II)		副題		
担 当 者	斉木 美紀子				
開講期	半期	単位数	1	配当年次	3
授業の概要	「音楽」「造形」表現の指導方法について考え、子どもに対する適切な表現活動への援助について理解を深める。また、表現の実践を通し、その過程と成果を経験する。こうした学びを通じ、子どもの姿と保育者の援助について技能や表現方法を身につける。				
授業のねらい・到達目標	●「音楽」「造形」の指導方法を学ぶ。 ●グループでの総合的な表現の実践を通し、創造し表現することの意味に気づき、他者とのコミュニケーションの在り方についても考える。 ●授業終了時の到達目標 自らの実践を通し、乳幼児期における表現の意義を理解し、子どもの表現活動に共感しながら援助できる能力を身に付け、実践できるようになる。 【「履修ファイル」の対応項目：C-2(4),D-2(1)(2)(3)(5)(6),D-3(1)~(5)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	ローテーション授業①：子どもの「造る」とは何か(中原)				
3	ローテーション授業①：子どもの「音楽表現」を育むには(斉木)				
4	ローテーション授業②：子どもの発達と造形(中原)				
5	ローテーション授業②：子どもの音楽的発達(斉木)				
6	ローテーション授業③：子どもの造形表現のプロセス(中原)				
7	ローテーション授業③：身体による表現(斉木)				
8	ローテーション授業④：紙の造形①：動きをテーマに作品制作する(中原)				
9	ローテーション授業④：声による表現(斉木)				
10	ローテーション授業⑤：紙の造形②：作品発表(中原)				
11	ローテーション授業⑤：身体と声による表現(斉木)				
12	総合的な表現活動計画立案ー共通課題による				
13	総合的な表現活動準備・制作・練習				
14	総合的な表現活動準備・制作・練習、完成				
15	総合的な表現活動発表				
期末	試験実施なし				
評価方法及び評価基準	原則として、授業に臨む姿勢(20%)、課題への取り組み(40%)、作品発表に向けての態度・作品内容(40%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、事前に該当部分の準備や下調べをして授業に出席すること。 授業後は、記録を残すなど十分な復習を行い、次回授業に繋がるよう心掛けること。				
履修上の注意	・実践的な活動が主になるので、動きやすい服装で出席すること。 ・制作にかかる費用は原則、自己負担となる。				
テキスト	特になし				
－					
－					
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館, 2008年) 、内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』(フレーベル館,2015年) その他、授業時に紹介する。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育方法の研究		副題		
担 当 者	吉國 陽一				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	3
授業の概要	<p>方法という語のギリシア語における語源は「道に沿って」という意味である。道には向かうべき目的がある。保育の方法について考えることは、保育者の抱く目的について考えることと不可分の営みである。また、保育の目的と方法を考える上では対象である子どもの理解が不可欠である。</p> <p>本授業では文献や実践事例の検討を通して、情報機器及び教材の活用を含む保育方法を保育者の目的、保育の場における子どもの遊びと成長とともに理解していくことを目指す。このことを通して、受講生が保育の目的、方法、対象の関連性に対して自覚的になり、反省的実践のための基礎を養うことを目指す。</p>				
授業のねらい ・到達目標	<p>・保育の具体的な方法及び技術について、保育者の抱く目的との関係において理解する。</p> <p>・保育者の目的を背景として用いられる保育方法及び技術が子どもの遊びと成長にどのように寄与するかを理解する。</p> <p>・他者の考えに触れることで、保育の目的と方法、子どもの遊びと成長をめぐる複眼的な視点を獲得するとともに、保育者として同僚とともに育ち合うための基礎を養う。</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-4(2)(3)(4)、B-3(1)～(6)、D-2(1)(2)(3)(5)(6)、D-3(1)(2)(3)(5)、D-4(1)(2)(3)】</p>				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	受講生の実習経験の検討				
3	保育・教育の目的を巡る考察-狼に育てられた子ども-				
4	子どもの自由な遊びについて考える(1) 自由を重視する保育者の目的と援助方法				
5	子どもの自由な遊びについて考える(2) 自由な遊びを通した子どもの成長				
6	子どもを「見守る」ことの意味(1) 見ているだけか？				
7	子どもを「見守る」ことの意味(2) 子どもの遊びと成長のリズムを尊重する				
8	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(1) きっかけづくりとしての援助				
9	子どもの遊びの広がりや深まりを援助する(2) 臨機応変に判断する				
10	子ども同士の関係づくりを援助する(1) 環境を通して				
11	子ども同士の関係づくりを援助する(2) 子どもとともに葛藤する				
12	園生活に困難を抱える子どもの援助(1) 関係性を編み直す				
13	園生活に困難を抱える子どもの援助(2) 子どもの心の課題を理解する				
14	障がいをもつ子どもの保育				
15	まとめ				
期末	試験実施なし				
評価方法 及び評価基準	グループワークへの参加、リアクションシートの記入などを含む授業中の活動(60%)と学期末レポート(40%)をもとに評価する。				
事前・事後 学習の内容	次回の授業で扱う文献の購読やグループワークに向けた準備を求めることがある。 また、毎回の授業後にコメントシートの内容を講師が簡単にまとめて配布するので、他者の考えに触れながら授業内容を振り返ってもらいたい。				
履修上の注意	知識の獲得よりは受講者自身が毎回のトピックについて考え、学び合うことを重視する。そのため、毎回の授業にグループワークを設ける。積極的な参加を期待する。				
テキスト					
—					
—					
参考文献					

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育実践入門			副題	子ども理解とフィールドワーク
担 当 者	高嶋 景子				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	1
授業の概要	「保育」とは、一人ひとりの子どもの育ちを支え、援助していく営みであり、そこには、それぞれの子どもの内面を捉え、その子どもにとって必要な援助を探ることのできる「保育者のまなざし」が求められます。そのため、本授業では、実際の保育実践の場における演習を中心に、子どもと出会う経験を通して得た自分なりの「気づき」を他者と共有することで、子どもや保育の持つ魅力や奥深さに触れていくことを期待しています。また、子どもとのかかわる経験を重ねながら、一人ひとりの子どもの行為の持っている「意味」を探り、自分のかかわりを振り返るという「保育のプロセス」を体験していきます。				
授業のねらい・到達目標	「田園調布学園大学みらいこども園」における演習を通して、保育実践の場に自ら参加し、子どもとのかかわる経験を重ねていきます。さらに、その都度、自らの気づきや具体的な事例を基にグループカンファレンスを行い、子どもへの理解を深めると同時に、自らのかかわりを省察していくための視点の獲得を目指します。また、今後の学外実習に向けて、保育実践の場において求められる基本的な姿勢や心構えについて知り、理解していくことも目的としています。 【「履修ファイル」の対応項目：A-1(1),A-5(1)(2)(3),C-1(1)(2),C-2(3),D-1(1)(2)(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション【合同授業】			16	学外演習②参加
2	学外演習①事前指導			17	学外演習②参加
3	学外演習①参加			18	学外演習②事後指導（Ⅰ．具体的事例を基にしたグループカンファレンス）
4	学外演習①参加			19	学外演習②事後指導（Ⅱ．体験を通して探る「遊び」の意義）
5	学外演習①事後指導（子どもとの出会いから生まれた気づきの共有化）			20	実践に生きる記録とは～エピソード記録の書き方と留意点～
6	「子ども理解」について～子どもの行為の「意味」を探る～			21	実践に生きる記録の探究～各自のエピソード記録の問い直し～
7	子どもへのかかわりを振り返る～子どもにとっての「意味」を探る～／記録とカンファレンスの意義／学外演習②事前指導			22	外部講師による講演【合同授業】
8				23	まとめ
9				24	
10				25	
11				26	
12				27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
※授業は全体で行うものとグループ単位で行うものがあります。 ※「学外演習」では、グループ単位で「田園調布学園大学みらいこども園」に赴き、日常の保育実践への参加を通して、子どもとのかかわる演習を行います。演習は規定の時間割以外の曜日・時限に設定されることもあるため注意が必要です。					
評価方法及び評価基準	授業及び演習への参加態度、課題の提出状況などを総合的に評価します。				
事前・事後学習の内容	授業での指示に従い、学外演習に対する事前学習・事前準備を確実に進めることが望まれます。また、授業内容への理解を深めるために配布資料やワークシート等で復習し、学外演習の課題にも確実に取り組むことが期待されます。				
履修上の注意	学外での演習を主とした科目であるため、初回授業において、授業履修上必要な諸注意やスケジュールの説明を行います。その指示に従って履修してください。				
テキスト					
－					
－					
参考文献	授業内において随時紹介し、必要に応じて資料を配付します。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	教育相談		副題		
担 当 者	下山 晃司				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	カリキュラムにより異なります。
授業の概要	本講義(複数の実習も含む)では学校心理学における「3段階の援助サービスモデル」に基づき、心理教育的な援助を必要とする児童・生徒に対する有効な支援の提供について、体系的に説明します。原則として学校現場を想定して講義を行います。家庭や職場等、どのような対人援助場面においても役立つ内容が含まれます。				
授業のねらい・到達目標	背景の全く異なる一人一人の問題に対して援助を提供する側の立場になった際、シンプルかつスピーディに援助プラン(何をすべきで、そのうち何が自分にはできるか)を立てられるようになることを目標とします。言い換えれば、「何をすればよいか分からないまま時間だけが過ぎる」ことがないようにすることです。 6・3・3と「教育を受けてきた側」の知識・経験を、今後の対人援助に活かせるようになることも目標とします。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	3段階の援助サービス				
3	1次的援助サービス(実習:「ダメだ、ダメだ」だけではダメ)				
4	2次的援助サービス1(実習:情報収集の枠組み)				
5	2次的援助サービス2(実習:みる・きく・はかるのアセスメント)				
6	2～3次的援助サービス(実習:褒めるピラミッド)				
7	3次的援助サービス1(実習:4種類のサポート)				
8	3次的援助サービス2(実習:スマートな援助計画)				
9	中間まとめ				
10	ノンバーバルの世界				
11	いじめ:被害者への対応				
12	いじめ:加害者への対応				
13	発達障害1(LD・ADHD)				
14	発達障害2(ASD)				
15	レポートフィードバック				
期末	試験実施なし				
講義および実習形式で行います。感想・質問等のリアクションペーパーを毎回配布します。次回授業の冒頭でいくつかを紹介し、コメントします。					
評価方法及び評価基準	中間試験(50%):前半の授業内容の理解度を測定する試験を実施します。 期末レポート(50%):課題内容や形式、評価の観点は授業内で説明します。 授業運営に非協力的な学生の受講もしくは単位を認定しません。 2/3以上の出席をしなかった学生についても単位を認定しません。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて講義内容を確認し、該当部分の下調べをすること。 当日の授業内容に則した課題を出すので、次回までに行うこと。				
履修上の注意	講義だけではなく、グループワーク、グループディスカッションも行います。コミュニケーション抜きでの対人援助はありませんので、知識のインプットだけでなく、積極的なアウトプット(質問・発言・リアクションペーパーへの記入)が歓迎されます。 6・3・3と「教育を受けた側」としての知識・経験をフル活用し、授業内容を自らの経験と結びつけて理解することを心がけてください。				
テキスト	授業内で指示します。				
—					
—					
参考文献	石隈利紀『学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』誠信書房				

2015/03/26(木)18:29

科 目 名	幼稚園教育実習Ⅰ		副題		
担 当 者	高嶋 景子				
開講期	集中	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において1週間の実習を行う。「幼稚園教育実習Ⅱ」に向け、観察・参加実習を中心とした実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、幼稚園の保育の流れを知り、保育者の基本的な役割や職務内容について理解を深める。また、子どもとの実際のかかわりを通して、個々の子どもの思いやその背後にある行為の意味に気づき、そこで求められる援助のあり方について考えていくことが期待される。				
授業のねらい・到達目標	<p><「幼稚園教育実習Ⅰ」の実習課題>（共通課題）</p> <p>(1) 幼稚園の保育の流れを理解する。</p> <p>(2) 個々の子どもに出会い、かかわる体験を通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考える。</p> <p>(3) 保育者の役割、および職務内容について学ぶ。</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3),C-1(1)(2),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-4(1)(2)(3)】</p>				
授業の方法・授業計画					
<p>1. 子どもたちの登園・降園の時間やそれぞれの活動の流れを把握し、次の活動を見通しつつ自ら動けるようになる。</p> <p>2. 子どもの生活や遊びにおける幼稚園全体の環境、園庭や保育室などの環境構成を理解する。</p> <p>3. 子どもの観察および記録や子どもとのかかわりを通して、子どもの行為やかかわりの「意味」について考え、理解を深める。</p> <p>4. 保育者の子どもたちへのかかわりを通して、その役割と援助の在り方について考える。</p> <p>5. 保育者の手伝いや環境整備に積極的に取り組み、保育者の職務内容について理解を深める。</p>					
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事前準備を具体的に進めることが望まれる。実習後は、事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。				
履修上の注意	・「幼稚園教育実習指導Ⅰ」を併せて履修し出席すること。 ・「教育の原理」の単位を修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。				
テキスト	『幼稚園教育実習の手引き』、田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科				
—					
—					
参考文献	「幼稚園教育実習指導Ⅰ」で適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	幼稚園教育実習指導Ⅰ			副題	
担 当 者	平野 麻衣子				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	2
授業の概要	「幼稚園教育実習Ⅰ」の事前指導として、幼稚園での実習に必要な心構えや態度、基本的な知識・技能について学ぶ。実習の意義や目的、手順、実習における留意点等を確認し、実習に向けた準備を行う。また幼稚園教育の特徴と基本理念について理解した上で、保育記録の意義と書き方について学習する。 実習終了後には、事後指導を通して、実習から得た学びを整理し、その「意味」を問い直すことにより、自らの学びを深め、次年度の実習へ向けての自己課題を抽出していくための学習を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 実習に必要な心構えや態度、留意点などを理解し、実習に対する意欲を高める。 2. 実習関係書類の作成、実習先オリエンテーションなど実習に必要な事前準備について理解し実行する。 3. 実習の目的や期待される学習内容について理解する。 4. 実習日誌の書き方を学び、習得する。 5. 実習を振り返り、自らの学びや反省から自己の課題を明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3)】				
授業の方法・授業計画					
1	実習総合オリエンテーション①(実習スケジュール確認／実習要件／実習関係書類の配布・説明)			16	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導①(実習体験の発表・報告)
2	実習総合オリエンテーション②(実習生に求められる姿勢)			17	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導②(グループディスカッションによる実習経験の振り返り)
3	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション①(外部講師による講演)【合同授業】			18	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導③(事例を基にしたグループカンファレンス／カンファレンスを通しての学びの共有)
4	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション②(実習園の配属発表／実習関係書類作成)			19	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導④(園評価に基づく個別面談／園評価と自己評価の照合／自己課題の抽出)
5	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション③(目的および学習内容／実習園オリエンテーションに関する説明)			20	幼稚園教育実習Ⅰ事後指導⑤(実習日誌返却と講評)
6	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション④(実習中および実習後の留意点／お礼状の書き方／確認テスト)			21	
7	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点)			22	
8	保育記録の意義と書き方①(時系列記録の意義と書き方)			23	
9	保育記録の意義と書き方②(時系列記録の復習／エピソード記録の意義と書き方)			24	
10	幼稚園教育実習Ⅰオリエンテーション⑥(夏季休暇前の諸注意／実習評価について)			25	
11	幼稚園教育実習Ⅰ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)【合同授業】			26	
12				27	
13				28	
14				29	
15				30	
期末	試験実施なし			期末	試験実施なし
評価方法及び評価基準	実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配付資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。				
履修上の注意	「幼稚園教育実習Ⅰ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。				

テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 『幼稚園教育要領解説』, 文部科学省, フレーベル館	978-4-577-81245-7
—		
—		
参考文献	必要に応じて授業内で紹介する。	

2015/03/26(木)18:30

科 目 名	幼稚園教育実習Ⅱ		副題		
担 当 者	高嶋 景子				
開講期	集中	単位数	3	配当年次	4
授業の概要	幼稚園教諭1種免許取得にかかわる教職課程必修の実習として、学外の幼稚園において3週間の実習を行う。 「幼稚園教育実習Ⅰ」を踏まえ、参加・責任実習を中心としたより専門性の高い実習を行う。幼稚園における子どもや保育者、保護者の営む日々の生活との出会いを通して、子どもへの理解を深めるとともに、保育者としての役割や援助の在り方について学ぶことを目的とする。また、責任実習を通して、自らの保育実践力の向上を目指す。さらに、幼稚園の社会的役割についても視野を広げ、学びを深めることが期待される。				
授業のねらい・到達目標	<p><「幼稚園教育実習Ⅱ」の実習課題> (共通課題)</p> <p>(1) 保育者という視点から子どもとかかわる中で、子どもの行為やかかわりへの理解を深め、そこで求められる保育者の援助の在り方について学びを深める。</p> <p>(2) 子どもの実状に応じた指導計画の立案および保育の実践・評価を通して、環境の在り方や計画と実践の関係について学ぶ。</p> <p>(3) 幼稚園と家庭や地域との連携、および子育て支援について学ぶことを通して、幼稚園の社会的役割について考えると同時に、保育者の役割や職務内容について、より広い視点から理解を深める。</p> <p>※上記の「共通課題」の他に、各自の「自己課題」を設定し、「共通課題」と合わせて「実習課題」とし、実習に臨む。</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),B-1(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7),B-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),B-3(1)(2)(3)(4)(5)(6),C-1(1)(2),C-3(1)(2)(3)(4)(5),C-4(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8),D-1(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(5),D-4(1)(2)(3)】</p>				
授業の方法・授業計画					
<p>1. 子どもとかかわりや遊びを通して、そこで求められる援助の在り方や環境構成について学ぶ。</p> <p>2. 一人ひとりの子どもとかかわりつつ、子ども集団全体にも目を向け、子ども同士の「関係」への援助について考える。</p> <p>3. 障害を持っている子どもや外国籍の子ども等、さまざまな配慮を必要とする子どもに対する援助の在り方について学び、理解を深める。</p> <p>4. 発達に応じた保育内容や方法を理解し、子どもの実状に即した指導計画を立案し、実践し、反省・評価を行う。</p> <p>5. 家庭を含む地域との連携や子育て支援について理解を深め、幼稚園の社会的役割や保育者に求められる役割について考える。</p>					
評価方法及び評価基準	実習園による評価、自己評価、実習日誌等により総合的に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	実習指導授業に真剣に取り組むこと。また、各自において実習に対する事前学習・事後学習を具体的に進めることが望まれる。実習後は事後指導授業へ出席し、実習からの学びを振り返る。				
履修上の注意	・「幼稚園教育実習Ⅰ」を履修済みであること。 ・「幼稚園教育実習指導Ⅱ」を併せて履修し出席すること。 ・「教職概論」の単位修得済みであること。 ・実習期間中は原則として欠勤および遅刻・早退は認められない。 ・その他『実習の手引き』に掲載されている要件に注意すること。				
テキスト	『幼稚園教育実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科				
—					
—					
参考文献	「幼稚園教育実習指導Ⅱ」で適宜紹介する。				

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	幼稚園教育実習指導Ⅱ			副題	
担 当 者	平野 麻衣子				
開講期	通年	単位数	1	配当年次	4
授業の概要	<p>「幼稚園教育実習Ⅱ」の事前指導として、実習の目的や方法、留意点について確認し、そのために必要な心構えや知識について学ぶ。特に、「幼稚園教育実習Ⅱ」は、参加・責任実習を中心として展開される、より専門性の高い実習となるため、子どもの実態に即した保育の展開を目指し、保育に活きる記録のとり方や子どもに即した指導案の立案などについて、より実践的に学習する。</p> <p>実習終了後の事後指導では、グループによる保育カンファレンスを通して、各自の実習体験から得た学びをより深め、保育者としての実践力の向上を図り、そのための自己課題を抽出していくための学習を行う。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>1. 実習に必要な心構えや態度、留意点、実習関係書類等の実習に必要な事前準備について確認し、実習に必要な事前準備を進める。</p> <p>2. 「幼稚園教育実習Ⅱ」の目的や期待される学習内容について理解し、これまでの実習成果も踏まえた上で、実習に向けた自己課題を設定する。</p> <p>3. 子どもの実態に即した保育実践を立案・展開するために必要な記録のとり方、指導案の立案方法などについて学ぶ。</p> <p>4. 実習を振り返り、自らの学びの成果や反省から自己の課題を明確にする。</p> <p>【「履修ファイル」の対応項目：A-2(3),A-4(4),A-5(1)(2)(3),D-2(1)(2)(3)(4)(5)(6),D-3(1)(2)(3)(5)】</p>				
授業の方法・授業計画					
1	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション①(幼稚園教育実習Ⅱの意義と目的／実習関係書類作成)	16	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導④(実習日誌の返却と個別面談①)／グループ研究の課題の抽出とテーマの確認		
2	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション②(自己課題の設定)	17	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導⑤(実習日誌の返却と個別面談②)／グループ研究のテーマの検討		
3	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション③(学習内容の確認／実習園オリエンテーションに関する諸注意)	18	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導⑥(実習日誌の返却と個別面談③)／グループ研究のテーマに基づく事例の検討		
4	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション④(外部講師による講演)【合同授業】	19			
5	幼稚園教育実習Ⅱオリエンテーション⑤(実習日誌の様式と記入上の留意点／多様な保育記録の書き方と意義)	20			
6	責任実習講座①(責任実習の流れと概要／指導案立案のためのポイント復習)	21			
7	責任実習講座②(指導案立案演習～責任実習を想定した指導案の立案～)	22			
8	責任実習講座③(指導案立案演習～相互添削による評価・反省～)	23			
9	幼稚園教育実習Ⅱ直前オリエンテーション(実習における諸注意に関する最終確認)	24			
10	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導①(グループディスカッションによる実習経験の振り返り／課題に即した学びの整理)	25			
11	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導②(グループカンファレンス～実習における事例を基にしたカンファレンス～)	26			
12	幼稚園教育実習Ⅱ事後指導③(グループカンファレンスによる学びの成果の発表)	27			
13		28			
14		29			
15		30			
期末	試験実施なし	期末	試験実施なし		
評価方法及び評価基準	実習関係書類、課題、実習日誌などの提出状況、授業への参加態度などを総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習は各回の授業内容に関する手引きの該当ページを熟読しておくこと。事後学習については、授業内容を確実に理解するために配布資料やワークシート等で復習し、出された課題に取り組むこと。				

履修上の注意	「幼稚園教育実習Ⅱ」につながる科目であるため、実習同様、欠席および遅刻は認められない。特に、無断での欠席・遅刻は厳禁とする。	
テキスト	『幼稚園教育実習 実習の手引き』, 田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科 『幼稚園教育要領解説』, 文部科学省, フレーベル館	
—		
—		
参考文献	必要に応じて授業内で紹介する。	

2015/03/26(木)17:11

科 目 名	保育・教職実践演習(幼稚園)		副題		
担 当 者	矢萩 恭子				
開講期	半期	単位数	2	配当年次	4
授業の概要	保育者として必要な知識・技能の修得を総合的に目指すために、子ども理解、保育内容、保育教材、保育技術、保育の環境構成、指導計画、保育者の役割と援助、担任業務と学級運営、幼稚園・保育所・施設の機能と役割、保育者として必要な対人関係能力、保育者の責任と使命の自覚などを主な学習項目として、受講者の主体的な参加と他者との協議・検討を通じて、協働的・実践的に学ぶ。				
授業のねらい・到達目標	保育に関する理論的学習と実習をはじめとする実践的学びとの統合を図り、保育現場に臨む意識・意欲を高めながら、保育者としての資質をより一層確実に形成することを目的とする。 この目的に対し、以下の目標を設定する。 1. これまでの保育実践を振り返り、自己の課題や保育に関するテーマを明確にする。 【「履修ファイル」の対応項目：A-5(1)】 2. 保育実践力の向上のために、その課題やテーマに対して、他者と協働しながらさまざまな角度や視点から取り組む態度や姿勢を身につける。 【「履修ファイル」の対応項目：A-5(2)(3)】 3. 保育者の職務内容への理解を深め、保育者としての使命と責任についての自覚をもつ。				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション:本科目の意義と目的、授業計画の説明【合同授業】				
2	事例検討①保育実践における主要テーマに関するグループ討議				
3	事例検討②各自の実習体験事例に関するグループ討議				
4	グループ研究①課題の抽出および研究テーマの確認				
5	グループ研究②グループ別テーマの検討・テーマに関する基本的知識の復習				
6	グループ研究③グループ別テーマの検討・テーマに関する事例の検討				
7	グループ研究④グループ研究報告会中間報告				
8	グループ研究⑤グループ研究報告会におけるプレゼン方法・資料の再検討				
9	グループ研究報告会:グループ研究の成果を発表・報告【合同授業】				
10	グループ研究報告会の振り返り①研究結果から導き出される課題の抽出				
11	グループ研究報告会の振り返り②研究結果から導き出される課題に関する検討				
12	ロールプレイングとグループ討議①保護者との関係に関するケース検討				
13	ロールプレイングとグループ討議②保育者間の連携・協力に関するケース検討				
14	授業のまとめ①保育者の多様な職務内容について【合同授業】				
15	授業のまとめ②保育者としての責任と使命について				
期末	試験実施なし				
授業の方法として、グループ討議による事例検討、グループ研究および報告会、ロールプレイングとグループ討議、グループワークなどを取り入れる。					
評価方法及び評価基準	授業態度、提出物、課題およびグループ研究への取り組みなどを総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画にて授業内容を確認し、必要な準備を十分に行ってから授業に参加すること。授業後は、その都度「履修ファイル」の該当する部分で自己の課題について明確にし、保育実践力の向上のために必要な努力を怠らないこと。				
履修上の注意	・本科目は、文部科学省の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、教職課程の最終段階の学びとして2010年度入学生より『履修ファイル』の導入と同時に新設され、必修化されたものである。保育者としての資質をより一層確実に形成する姿勢で履修することが望まれる。 ・グループワークを中心とした演習科目であるので、積極的に参加する姿勢が求められる。特に、グループ研究に関しては、授業時間外での作業が事前・事後学習として必要となるので留意すること。				
テキスト	特になし				
—					
—					
参考文献	田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科『履修ファイル』、『幼稚園教育要領解説』『保育所保育指針解説書』（フレーベル館,2008年）、各自の全実習日誌、ほか授業において適宜紹介する。				

(6) 教職課程

人間学研究科子ども人間学専攻では、**幼稚園教諭専修免許状**授与の所要資格を取得できる教職課程を設置しています。

本専攻で免許状授与の所要資格を取得するためには、原則として学士の学位を有し、幼稚園教諭一種免許状を取得している上で本専攻の課程を修了し、かつ、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則に定める所要の単位を修得しなければなりません。

本専攻における教職課程の開設科目は、教科に関する科目、教職に関する科目に区分し、下表のとおり開設する授業科目の中から合計 24 単位以上修得する必要があります。

免許法施行規則に定める科目区分	左記に対応する開設授業科目					履修方法
	授業科目名 (専門科目子ども人間学領域)	履修区分	配当学年	開講期	単位数	
教科に関する科目	子どもとアート論	選択	1・2年	前期	2	左記14科目より 12科目24単位 以上選択履修
	子どもとことば論	選択	1・2年	後期	2	
教職に関する科目	学び学特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育学特論	選択	1・2年	前期	2	
	子ども思想史特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育実践研究	選択	1・2年	後期	2	
	保育者特論	選択	1・2年	前期	2	
	子ども・子育て支援実践研究	選択	1・2年	後期	2	
	家族社会学特論	選択	1・2年	後期	2	
	子ども政策特論	選択	1・2年	後期	2	
	教育学特殊研究	選択	1・2年	後期	2	
	子ども環境学特論	選択	1・2年	前期	2	
	発達心理学特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育・教育課程研究	選択	1・2年	後期	2	

上記のほか、教職課程の履修に関する事は、巻末の教職課程履修規程を参照してください。

科 目 名	子どもとアート論	副題	
担 当 者	安村 清美・中原 篤徳・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）		
開 講 期	前期	単位数	2 単位
		配当年次	1・2 年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>中原担当の講義では、塑造の実践と彫刻理論の研究を通じ、アート制作の持つ教育的な意味を考察していく。</p> <p>また、斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出会い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出会い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村）		
2	教育現場と舞踊家の関わりと実践①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について（安村）		
3	教育現場と舞踊家の関わりと実践②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーションの意味（安村）		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む（安村）		
5	子どもと彫刻（中原）		
6	子どもの塑造①：塑造の素材、道具（中原）		
7	子どもの塑造②—頭像の制作—心棒から粘土付けまで（中原）		
8	子どもの塑造③—頭像の制作—仕上げ・講評（中原）		
9	声①様々な声の表現（斉木）		
10	声②子どもの声を考える（斉木）		
11	音①様々な音を探す（斉木）		
12	音②子どもと楽器について考える（斉木）		
13	課題についてのディスカッション（安村・中原・斉木）		
14	課題のプレゼンテーション（安村・中原・斉木）		
15	まとめと講評（安村・中原・斉木）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	小レポート（30%）、実践課題（30%）、プレゼンテーション（40%）を基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	「子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践」佐藤、今井編、2003東京大学出版会		
参考文献	「松本千代栄撰集 2 人間発達と表現」舞踊文化と教育研究の会（編者代表：安村）編、2007、明治図書 『彫刻をつくる—新技法シリーズ』建畠覚造編、1965、美術出版社 『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会		

【予備学習ガイド】

科 目 名	子どもとアート論
担 当 者	安村 清美・中原 篤徳・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学 ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの表現やアート教育について自ら関心をもち、積極的に実際の保育現場や社会文化としてのアートに触れる機会を作ること。 ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について考えること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①『芸術の意味』ハーバート・リード滝口修造訳 みすず書房 1990 ②『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』岡本夏木 岩波新書 2005 ③『遊びと人間』ロジェ・カイヨワ 講談社 1990 ④『遊びの発達学 基礎編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑤『遊びの発達学 展開編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑥『遊びとわらべうた—子どもの文化の見直し』永田栄一 青木書店 1982 ⑦『子どもは美をどう体験するか』K.モレンハウアー 玉川大学出版部 2001 ⑧『子どもの表現を見る、育てる』今川、宇佐美、志民編 文化書房博文社 2005 ⑨『音楽する子どもをつかまえたい』小川、今川編 ふくろう出版 2008 ⑩『美学事典』竹内敏雄編 弘文堂 1966 ⑪『彫刻の美』本郷新 中央公論美術出版 2005 ⑫『彫刻をつくる』建畠覚造、佐藤忠良他 美術出版 1965 ⑬『触ることからはじめよう』佐藤忠良 講談社 1997
その他履修に 必要な学習	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について、上記文献リストの購読や子どもと共にある実践を通して考えること。

科 目 名	子どもとことば論		副題	多文化共生時代の子どものことば	
担 当 者	内藤 知美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる様々な事例を用い、子どもの生活や遊びと大人—子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのかを検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また児童文化財を含めた「モノ」を有効に活用し、実際の保育において子どものことばを育てる保育者としての実践力を獲得する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもとことばの関係性について、社会・文化的視点から広く理解を深める。 2. ことばをめぐる最新の理論に触れると同時に、具体的事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を捉え、支援する具体的、実践的方法を学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育（0歳期）				
4	ことばの発達と保育（1 語発話の時期）				
5	ことばの発達と保育（2 語発話の時期）				
6	ことばの発達と保育（2 歳期・3 歳期）				
7	ことばの発達と保育（4 歳期・5歳期）				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①—多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②—ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①—絵本などの文化財が育むことば（実践的演習も含む）				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②—文化財を用いたことばの育ちあい（実践的演習も含む）				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末	多文化共生時代を生きる子どもとことば（小論文）				
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	小論文（レポート） 7 0 %、児童文化財の実演・発表 3 0 %				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる最新の理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「言葉」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	幼稚園教育要領（文部科学省）、幼稚園教育要領解説書（文部科学省）、保育所保育指針解説書（厚生労働省）				
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992） 青木保『異文化理解』（岩波新書 2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房 2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。				

【予備学習ガイド】

科 目 名	子どもとことば論
担 当 者	内藤 知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもとことば論」の授業を履修するために、「ことばの発達」に関する基礎理論を深めておくこと。 ・保育におけることばの発達を促す環境・文化を理解するために、保育現場でのフィールドワークを行い、実践的理解を深めること。 ・絵本などの児童文化財作品の実演を通して、子どもとの双方向のコミュニケーションのあり方について考えること。
文献リスト	<p>①岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書 1982） ②やまだようこ『ことばの前のことば』（新曜社 1987） ③内田伸子『子どもの文章』（東京大学出版会 1990） ④麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社 1992） ⑤浜田寿美男『意味から言葉へ』（ミネルヴァ書房 1995） ⑥青木保『異文化理解』（岩波新書 2001） ⑦正高信男『子どもはことばをからだで覚えるーメロディから意味の世界へ』（中公新書 2001） ⑧岡本夏木『幼児期ー子どもは世界をどうつかむか』（岩波新書 2005） ⑨脇明子『読む力は生きる力』（岩波書店 2005） ⑩佐伯胖『共感ー育ち合う保育のなかでー』（ミネルヴァ書房 2007） ⑪NP0ブックスタート編著『赤ちゃん絵本をひらいたらーブックスタートはじまりの10年』（岩波書店 2010） ⑫今井むつこ『ことばと思考』（岩波新書 2010） ⑬脇明子『子どもの育ちを支える絵本』（岩波書店 2011） ⑭世界とつながる子どもの本棚プロジェクト編『多文化に出会うブックガイド』（読書工房 2011）</p>
その他履修に必要な学習	<p>子どもとことばの関係について、「多文化共生」の視点をもって、積極的にフィールドワークを行うこと。また絵本や紙芝居などの児童文化財について理解を深め実践力を育てるとともに子どもとことばを取り巻く文化のあり方について自ら考えること。</p>

科 目 名	学び学特論		副題		
担 当 者	佐伯 胖				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	いわゆる「学習」（動物を含めた生物の行動形成）についての心理学、すなわち学習心理学は、20世紀後半から数度にわたって大きな変革を経てきた。とくに、人間の学習は、過去の学習心理学と決別し、人間学の一領域として新しく生まれ変わり、発展してきている。そのきっかけを作った理論は、「正統的周辺参加論」とよばれている。講義では、この理論をさらに人間学的観点から発展させた「学び学」を提唱する。				
授業のねらい・到達目標	「学習」についての科学研究は、長い間、行動主義心理学の考え方に支配されていたが、それへの根源的批判から、認知心理学、状況論を経て正統的周辺参加論に至っている。講義では、それらの経緯をたどり、人間学的観点からの「学び学」の考え方を習得することを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	「学ぶ」とはどういうことか				
2	「勉強」の科学：行動主義心理学				
3	シンボルの歴史とコンピュータ教育				
4	苅宿実践：「教室にやってきた未来」				
5	マッキントッシュ思想とスティーブ・ジョブズ				
6	レッジョ・エミリアの教育思想				
7	「学び」の新しい科学：「学び」の認知科学				
8	正統的周辺参加論				
9	二つの特別支援学校の実践から				
10	「学びやすさ」のデザイン：アフォーダンス論				
11	学びのドーナッツ論				
12	「共感」と学び				
13	ケアリングと学び				
14	「遊び」と学び				
15	「教える」ということの意味				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の15分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。適切なコメントの場合など、次回の冒頭で取り上げる可能性がある。				
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。				
履修上の注意	全講義に出席のこと				
テキスト	J. レイヴ&E. ウェンガー 著 佐伯 胖 訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年				
参考文献	佐伯 胖 著『「学び」の構造』東洋館、1975年 佐伯 胖 著『イメージ化による知識と学習』東洋館、1978年 佐伯胖ほか 著『こどもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	学び学特論
担 当 者	佐伯 胖
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	下記文献リストのなかから、特に、事前に、『「学び」を問いつづけて』（佐伯胖著、小学館、2003年）を読んでおくことが望ましい。
文献リスト	<p>①佐伯胖著『「学び」の構造』 東洋館 1975年</p> <p>②佐伯胖著『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店 1995年</p> <p>③佐伯胖著『「わかる」ということの意味〔新版〕』 岩波書店 1995年</p> <p>④佐伯胖著『「学び」を問いつづけて』 小学館、2003年</p> <p>⑤佐伯胖著『「わかり方」の探究』 小学館、2004年</p> <p>⑥佐伯胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』 東京大学出版会、2014年</p> <p>⑦佐伯胖編著『共感－育ち合う保育のなかで－』 ミネルヴァ書房、2007年</p> <p>⑧佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年</p> <p>⑨ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウエンガー著 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』 産業図書、1993年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」を取り巻く状況に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科 目 名	保育学特論		副題		
担 当 者	高嶋 景子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	従来の個体能力論的なアプローチから脱却し、多様で複雑な状況や文脈において生成される様々な人間の「学び」や「育ち」を、その状況や文脈との関係の中で捉えようとする理論的枠組みの変遷と展開について学び、「子ども人間学」的観点から、保育という営みにおける様々な「学び」や「育ち」（子ども、保護者、保育者等々の学びや育ち）を捉えるための視座について検討する。その上で、それらの「学び」や「育ち」を支える多層的なケアリング関係の構造や構築過程を分析し、より豊かな「学び」や「育ち」に繋がる保育実践の在り方を探究していくこととする。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるためのまなざしを改めて問い直すと同時に、それらの「学び」や「育ち」を支えるための保育実践の構造を読み解くため、具体的な実践事例の検討を行いつつ様々な視点を学ぶ。 2. 子どもを始め、その実践にかかわる多様な人々（保護者、実践者、研究者等々）の豊かな「学び」に繋がる資源が埋め込まれた保育の在りようを探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	関係や状況に埋め込まれた「学び」①～個体能力論から関係論的パラダイムへの転換～				
3	関係や状況に埋め込まれた「学び」②～社会文化的アプローチの理論と展開／正統的周辺参加論～				
4	実践共同体への参加過程としての「学び」①～スタンスの変容過程としての「学び」～				
5	実践共同体への参加過程としての「学び」②～参加を通して生まれる多様な他者（子ども・保護者・実践者）の変容過程～				
6	「学び」を支える実践における「対話」～「対話」が持つ多声性への着目～				
7	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造①～子どもの変容過程の実践事例を通して～				
8	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造②～保護者の変容過程の実践事例を通して～				
9	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造③～実践者の変容過程の実践事例を通して～				
10	子どもの多様な「学び」を支える実践者の専門性				
11	実践者の専門性の深まりを支える「学び合い」①～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～				
12	実践者の専門性の深まりを支える「学び合い」②～「省察」を引き出す保育カンファレンスと対話的な場の構造～				
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営みを読み解く実践研究①～文献検討～				
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営みを読み解く実践研究②～各自の実践事例の検討～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメの作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭著『〔新装版〕心理学と教育実践の間で』東京大学出版会、2013年 佐伯胖編『共感―育ち合う保育のなかで―』ミネルヴァ書房、2007年				
参考文献	J. レイヴ & E. ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』産業図書、1993年 J. V. ワチ著、田島信元他訳『心の声―媒介された行為への社会文化的アプローチ―』福村出版、2004年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育学特論
担 当 者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育学特論」の授業を履修するために、子どもの「学び」や「育ち」について論じられた文献や、保育にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店，1995年</p> <p>②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店，1995年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない―円熟した保育者になるために―〔増補改訂版〕』東京大学④出版会，2014年</p> <p>⑤津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館，1989年</p> <p>⑥津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑦吉村真理子『保育者の「出番」を考える―今、求められる保育者の役割―』フレーベル館，2001年</p> <p>⑧浜田寿美男『発達心理学再考のための序説』ミネルヴァ書房，1993年</p> <p>⑨津守真・森上史朗編『倉橋惣三と現代保育』フレーベル館，2008年</p> <p>⑩高杉自子著子どもと保育総合研究所編『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房，2006</p> <p>⑪高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房，2011年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科 目 名	子ども思想史特論		副題		
担 当 者	石橋 哲成				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子ども観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。				
授業のねらい・到達目標	1. ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 2. その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション ― 子ども思想史を学ぶ意味				
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観				
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観				
4	近世における子ども観の概観				
5	ルソーにおける子ども観の成立過程				
6	ルソーにおける子ども観と教育観				
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程				
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観				
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程				
10	フレーベルにおける子ども観と教育観				
11	モンテッソーリにおける子ども観の成立過程				
12	モンテッソーリにおける子ども観と教育観				
13	研究発表①：子ども観・教育観と幼児教育				
14	研究発表②：子ども思想史と幼児教育				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	授業は講義形式で行う。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。				
テキスト	事前に授業資料を配布する。				
参考文献	ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第80刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第2巻』）/玉川大学出版部 モンテッソーリ著/阿部・白川共訳『モンテッソーリ・メソッド』/明治図書/1977				

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども思想史特論
担 当 者	石橋 哲成
事前、あるいは並行して学 ぶべき内容	「子ども思想史特論」の授業においては、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく予定である。この授業を履修するためには、ヨーロッパの歴史を概観し、とりわけ近世における子ども思想に関する文献を読み、基本的な理解をしておくことが要求される。
文献リスト	<p>①皇至道著『西洋教育通史』／玉川大学出版部／１９７８</p> <p>②岩崎次男他著『西洋教育思想史』／明治図書／１９８７</p> <p>③コメンスキー著藤田輝夫訳『母親学校の指針』玉川大学出版部１９８６β</p> <p>④ルソー著／今野一雄訳『エミール（上）』／岩波文庫／２０１２（第８０刷）</p> <p>⑤ペスタロッチー著／前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』／玉川大学出版部／１９８７</p> <p>⑥荘司雅子著『フレーベルの生涯と思想』／玉川大学出版部／１９７５</p> <p>⑦ハイラント著／平野・井出共訳『マリア・モンテッソーリ』／東信堂／１９９５</p>
その他履修に 必要な学習	自分が子どもと接する時、子どもをどのような存在として捉え、どのような言葉掛けをしているのかを振り返ると同時に、電車の中やバスの中、あるいは公園等で、親たちが子どもたちにどのような言葉かけをしたり、どのような扱いをしているのかを観察して、自分自身の授業に対する問題意識を持つこと。

科目名	保育実践研究		副題		
担当者	高嶋 景子				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。				
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～				
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～				
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～				
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～				
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～				
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～				
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～				
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～				
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～				
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～				
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～				
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～				
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行っておくこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。				
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。				
テキスト	岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年				
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 鯨岡峻・鯨岡和子著『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 河邊貴子著『保育記録の機能と役割—保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言—』聖公会出版, 2013年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育実践研究
担 当 者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育実践研究」の授業を履修するために、保育学や保育実践研究にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店，1995年</p> <p>②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店，1995年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない―円熟した保育者になるために―〔増補改訂版〕』東京大学出版会，2014年</p> <p>④津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館，1989年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑥吉村真理子『保育者の「出番」を考える―今、求められる保育者の役割―』フレーベル館，2001年</p> <p>⑦高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房，2011年</p> <p>⑧佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編『学校の再生をめざして①学校を問う』東京大学出版会，1993年</p> <p>⑨佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化①学びへの誘い』東京大学出版会，1995年</p> <p>⑩佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化⑥学び合う共同体』東京大学出版会，1996年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育者特論		副題		
担当者	矢萩 恭子				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	保育実践の過程は、保育の場に生きる主体である子どもと、同じ主体としての保育者との関係性において力動的に展開される生のありようそのものであるため、そのプロセスは外的基準や目標に照らして可視化することが難しい側面をもつ。また、保育における子どもと保育者との関係性は人間と人間との深い交流をその基盤としており、そこには「子ども人間学」としての保育観が存在する必要がある。一方、近年、保育の質と評価に関して、あるいは保育の質の向上に寄与する保育者の研修や実践研究のあり方に関して、国内外において活発な議論が展開されている。本講では、それらの研究動向として、ECEC(Early Childhood Education and Care)に関する経済協力開発機構OECDの報告書およびそれに関連する国内の研究論文や著作等を取り上げながら、ニュージーランドにおけるECE(Early Childhood Education)のナショナル・カリキュラムに基づく実践と保育の場でのアセスメントの実践について解説し、質の高い実践力を備えた省察的实践家としての保育者の専門性について、人間学的考察に基づいた精査を試みる。そして、現代の社会状況から多様化する保育実践の場における保育職の意義や役割、職務内容などについての知識と思考を高度化していく。				
授業のねらい・到達目標	1. 保育の質および評価、保育者の専門性に関する研究動向について理解する。 2. ニュージーランドにおけるECEのナショナル・カリキュラムの実践と評価に関する実践事例に即した検討を通じて、現状の保育を理論的かつ実践的に検討する力量を獲得する。 3. 保育者の研修および保育実践研究のあり方についての検討や討議などから、保育の質の向上に関する研究的視点を確立する。				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション				
2	保育者の専門性に関する研究の動向① 国内(1)歴史的変遷における動向				
3	保育者の専門性に関する研究の動向② 国内(2)新制度下における動向				
4	保育者の専門性に関する研究の動向③ 海外(1) OECD報告における動向				
5	保育者の専門性に関する研究の動向④ 海外(2) OECD報告に関連する動向				
6	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討① 一元化政策以前の状況				
7	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討② 一元化政策とナショナル・カリキュラムの成立				
8	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討③ ナショナル・カリキュラムの実践				
9	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討④ ナショナル・カリキュラム実践の評価				
10	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討⑤ 発達観・環境観・子ども理解と学びの振り返り				
11	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討⑥ 日本における「学びの物語」の保育実践事例				
12	保育の質の向上に関する実践的方策の検討① 多様化する保育実践の場における保育職の意義と役割の再検討				
13	保育の質の向上に関する実践的方策の検討② 保育者の職務内容としての実践研究のあり方の検討				
14	保育の質の向上に関する実践的方策の検討③ 保育者養成と現職研修の架橋の可能性				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	履修者の学修および保育経験等を考慮しながら、毎回、テーマに関連する実践報告やそれについての討議を含め、理論と実践の往還を図ることとする。				
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度(20%)、期末レポート(80%)を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	参考資料や参考文献については、事前にその内容を確認しておくこと。 授業後には、各自の問題意識を追究したまとめを行うこと。(適宜発表・討議することとする。)				
履修上の注意	・平成20年3月改訂および改正の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』の内容に関する基本的知識が必要である。 ・一部に英語参考文献や資料の講読を含むため、英和辞典を用意すること。				
テキスト	マーガレット・カー、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房,2013 (Margaret Carr “Assesment in Early Childhood Settings” 2001) 『OECD保育白書 (“Starting StrongⅡ” 2006)』明石書店,2011				
参考文献	“Weaving Te Whariki 2nd edition” edited by Joce Nuttall, NZCER PRESS, 2013 “National Evaluation Reports” Education Review Office, New Zealand “Starting StrongⅢ” 2012, 大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房, ほか適宜配付・紹介する。				

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育者特論
担 当 者	矢萩 恭子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	保育者あるいは保育の質や専門性に関する研究的視点を醸成するために、遊び、発達、子ども理解、保育内容、保育記録、保育制度などに関する各領域の文献を学んでおくことが望ましい。
文献リスト	<p>①小川博久『遊び保育論』萌文書林, 2010年</p> <p>②麻生武＋綿巻徹編『遊びという謎』ミネルヴァ書房, 1998年</p> <p>③西村清和『遊びの現象学』勁草書房, 1989年</p> <p>④木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達』ミネルヴァ書房, 2011年</p> <p>⑤清水由紀・林創『他者とかかわる心の発達心理学』金子書房, 2012年</p> <p>⑥津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館, 1989年</p> <p>⑦津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房, 1997年</p> <p>⑧津守真・津守房江『出会いの保育学』ななみ書房, 2008年</p> <p>⑨加藤繁美『対話的保育カリキュラム(上)(下)』ひとなる書房, 2007年, 2008年</p> <p>⑩加藤繁美『対話と保育実践のフーガ』ひとなる書房, 2009年</p> <p>⑪大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房, 2006年</p> <p>⑫大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年</p> <p>⑬大場幸夫『こどもの傍らに在ることの意味』萌文書林, 2007年</p> <p>⑭中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書, 1992年</p> <p>⑮鯨岡峻・鯨岡和子『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年</p> <p>⑯鯨岡峻『子どもの心の育ちをエピソードで描く』ミネルヴァ書房, 2013年</p> <p>⑰室田一樹『保育の場に子どもが自分を開くとき』ミネルヴァ書房, 2013年</p> <p>⑱今井和子『保育を変える記録の書き方評価のしかた』ひとなる書房, 2009年</p> <p>⑲吉田正幸編著『次世代の保育のかたち』フレーベル館, 2010年</p> <p>⑳松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館, 2004年</p> <p>㉑泉千勢・一見真理子・汐見稔幸『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店, 2008年</p>
その他履修に必要な学習	現代の日本における保育や子どもを取り巻く問題についての情報の収集（特に、文部科学省・厚生労働省のホームページにある公表資料など）に努めて、自分自身の問題意識をもち、課題認識すること。同時に、世界の幼児教育の動向にも関心をもちつつ、我が国における保育者・保育の質の評価や向上に対する知識や考え方を身に付けていくこと。

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究		副題		
担 当 者	矢萩 恭子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	我が国の子ども・子育てに対する施策は、2015年4月より施行される「子ども・子育て支援新制度」に至るまで、少子化対策、仕事と子育ての両立支援、ワークライフバランスの実現へ向けた法整備、チルドレン・ファースト（子どもの最善の利益）の理念に基づく全ての子どもの健やかな発達を支える子育て環境の整備等を経て、今まさに転換期を迎えている。本演習では、その現状と課題について、一方では、国内の社会状況および子育て・子育て環境や施策の実際を詳察し、これらの変遷および新制度の現状を検証する。他方では、海外の先進的な施策と比較することにより、多様な施策および支援事業の内実に関して実践的な分析を行う。また、乳幼児理解・保護者理解を基盤とする支援者の専門性について、発達過程や障碍に関する理解、カウンセリングや相談支援を含めた各専門機関ならびに地域社会との連携のあり方を考えると同時に、「子ども人間学」の視点から、子ども・子育てという営みを通じた人間学的な機能および役割という側面を各受講者が実践的に追究していくことを目指す。				
授業のねらい・到達目標	1. 我が国の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。 3. 海外における施策や実践との比較から、我が国の子ども・子育て支援制度の内実について実践的に分析する視点を身につける。 4. 支援者の専門性について、発達過程や障碍に関する理解や、カウンセリング・相談支援等の各専門機関・地域社会との連携を考えると同時に、人間学的視野からその機能と役割について追究する。				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション（ガイダンスおよび課題研究要領）				
2	就学前の子どもの育ちの現状（1）文献検討				
3	就学前の子どもの育ちの現状（2）事例検討				
4	就学前教育・保育施設における子育て支援機能				
5	我が国の子ども・子育て支援施策の変遷ならびに現状				
6	就学前教育・保育施設における実践事例検討（1）幼稚園・保育所				
7	就学前教育・保育施設における実践事例検討（2）認定こども園				
8	保育者および支援者に求められる専門性（1）発達過程や障碍に関する理解				
9	保育者および支援者に求められる専門性（2）地域社会や専門機関との連携				
10	海外の就学前教育・保育施設における実践事例検討（1）保育者と保護者の関係性				
11	海外の就学前教育・保育施設における実践事例検討（2）保護者同士の関係性				
12	保育者および支援者の養成とその課題				
13	課題研究の発表と討議（1）運営体制と機能的役割について考える				
14	課題研究の発表と討議（2）保育者・支援者の役割について考える				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度（20％）、課題研究発表（60％）、まとめレポート（20％）を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	新制度の動向および実施・実践の実態について、国や基礎自治体に関する情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を研究資料の一環として、各自の課題研究を進めること。				
履修上の注意	・ 課題発表のために授業時間外でのフィールド調査を必要とする。そのテーマおよび方法については計画の事前提出を求めるが、方法については、履修者の実現可能な調査方法を考慮する。 ・ 「児童家庭福祉特論」（前期）や「子ども政策特論」（後期）、「家族社会学特論」（後期）などとの同時履修を推奨する。				
テキスト	配付資料を中心に進める。				
参考文献	文部科学省『幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集』2009年 鯨岡峻『子どもは育てられて育つ』慶應義塾大学出版会, 2011年 ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質 生きることの意味』ゆみる出版, 1987年 ほかに適宜配付・紹介する。				

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究
担 当 者	矢萩 恭子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	保育、子育て・子育ち、子育て支援などにかかわる文献を読み学んでおくこと。 また、文部科学省や厚生労働省の子どもや子育てに関する報告書や白書等の公表資料や文献を調べておくことを勧める。
文献リスト	<p>①内閣府『少子化社会対策白書 平成24年版』勝美印刷, 2012年</p> <p>②全国保育団体連絡会保育研究所『保育白書 2013年版』ちいさいなかま社, 2013年</p> <p>③日本子どもを守る会『子ども白書2013』本の泉社, 2013年</p> <p>④汐見稔幸編『子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい, 2008年</p> <p>⑤原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会, 2008年</p> <p>⑥大日向雅美『母性神話の罟』日本評論社, 2000年</p> <p>⑦池本美香『失われる子育ての時間』勁草書房, 2003年</p> <p>⑧子育て支援プロジェクト研究会『子育て支援の理論と実践』ミネルヴァ書房, 2013年</p> <p>⑨大豆生田啓友『支え合い、育ち合いの子育て支援』関東学院大学出版会, 2006年</p> <p>⑩橋本好市・直島正樹編著『保育実践に求められるソーシャルワーク』ミネルヴァ書房, 2012年</p> <p>⑪石川洋子編『子育て支援カウンセリング』図書文化, 2008年</p> <p>⑫無藤隆・安藤智子編『子育て支援の心理学』有斐閣コンパクト,</p> <p>⑬新澤誠治・今井和子『家庭との連携と子育て支援』ミネルヴァ書房, 2000年</p> <p>⑭鯨岡峻『<育てられる者>から<育てる者>へ』NHKブックス, 2002年</p> <p>⑮金田利子編著『育てられている時代に育てることを学ぶ』新読書社, 2003年</p> <p>⑯鯨岡峻『子どもは育てられて育つ』慶応義塾大学出版会, 2011年</p>
その他履修に必要な学習	現代の日本における子ども・子育てや保育を取り巻く問題についての情報の収集（特に、文部科学省・厚生労働省のホームページにある公表資料など）に努めて、自分自身の問題意識をもち、課題認識すること。

科 目 名	家族社会学特論		副題		
担 当 者	小玉 亮子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族社会学のパラダイム転換がなされ、家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。この家族と学校がその機能を十分に果たし得ないときのために、近代国家は福祉システムを整備してきたが、このシステムは同時に家族と学校の子どもの影響力をますます増大させるという結果をもたらした。近代における家族・学校・福祉のトリアーデの成立のプロセスと問題点を理解し、その中心に位置するものとして、幼児教育・保育施設の課題を考察する。				
授業のねらい・到達目標	近代家族と近代学校の成立を概観し、現代社会における福祉国家システムの成立の意味を理解する。 このことによって、現代の家族が単独の存在としてあるのではなく、学校を中心とする教育システムと児童相談所等の福祉システムと相互依存的に存立していることを学び、また、これらの結節点にある幼児教育の課題を考える。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション ― 家族社会学のパラダイム転換とは何か				
2	自然の開発と人間の発達				
3	家庭や地域社会における子どもの生活と大人の生活				
4	近代家族における子どもの位置				
5	近代学校の成立とその特質				
6	近代学校における児童中心主義思想 ― 幼児教育の誕生				
7	近代学校における懲戒の思想とin loco parentis				
8	社会問題化する子ども（1）貧困				
9	社会問題化する子ども（2）児童労働と労働者家族				
10	社会問題化する子ども（3）非行少年と家族問題				
11	女性のための教育福祉専門職システムの整備 ― 幼児教育の制度化				
12	就学と就学前の接合か、分断か ― 学校教育体系と幼児教育				
13	社会政策の展開と子ども				
14	消費社会のなかの家族と学校				
15	グローバリゼーションのなかの家族のゆくえ				
期末					
授業に関する連絡	多様なメディアが「家族」をどのようにとりあつかっているのかを社会的言説として捉え直すこと。その際、特に、映像作品から示唆をえることができる。たとえば、イスラム圏のドキュメンタリーやインドなど南アジアの映画などが有益となる。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポートおよび各回の研究発表を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に参考文献を読み、その内容を要約するなどしておくこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。				
テキスト	特に使用せず。				
参考文献	アリエス（1980）『子どもの誕生』みすず書房 ドンズロ（1991）『家族に介入する社会』新曜社 カニンガム（2013）『概説 子ども観の社会史』新曜社				

【予備学習ガイド】

科 目 名	家族社会学特論
担 当 者	小玉 亮子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>家族について学ぼうとするときに、ともすれば、自分の育ってきた家族を暗黙のうちに想定し、そこから家族に関する議論を組み立てがちになる。家族社会学において求められることは、まず、自らの家族概念の相対化であり、そのためには、比較の視点が有効となる。過去と現在、日本とヨーロッパといったように、時間的な比較・空間的な比較をおこなうことで、異質な文化や異質な社会に出会い、自らの相対化を行うことができる。まずは、時間的な比較を手がかりとして、現代家族との違いを理解しておくこと。</p>
文献リスト	<p>①落合恵美子（2004）『21世紀家族へ―家族の戦後体制の見かた 超えかた』有斐閣</p> <p>②木村涼子・小玉亮子（2005）『教育/家族とジェンダーで語れば』白澤社</p> <p>③広井多鶴子・小玉亮子（2010）『現代の親子問題―なぜ親と子が問題なのか』日本図書センター</p>
その他履修に必要な学習	<p>多様なメディアが「家族」をどのようにとりあつかっているのかを社会的言説として捉え直すこと。その際、特に、映像作品から示唆をえることができる。たとえば、イスラム圏のドキュメンタリーやインドなど南アジアの映画などが有益となる。</p>

科 目 名	子ども政策特論		副題		
担 当 者	渡邊 英則				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わる。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱である。また少子化対策や待機児童対策、地方分権、子育て支援の充実など、教育・保育施策全体を、国や地方の子ども・子育て会議の中で、地域の実態に合わせたものにしていこうとする動きも活発である。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、ではどのように園を経営し、どのように教育や保育を行っていけばいいかを探求していくことにする。				
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。新たにできる制度は子どもを本当に大事にする社会を実現しようとする制度となっているのか、園や保育者はどんな子どもを育てようとしていて、その営みを支える制度となっているのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	子ども・子育て支援新制度について ～制度ができるまでの流れを中心に～				
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～				
4	教育と保育との関係				
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題				
6	保育園制度の基本的な考え方と課題				
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～				
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～				
9	認定こども園制度について（3）～認定こども園保育要領を読み解く～				
10	子育て支援について				
11	幼保小連携について				
12	特別支援教育について				
13	海外の保育制度について				
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にしておいて自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	『保育白書2013』 ひとなる書房、全国保育団体連絡会・保育研究所編（※その年度の最新のものを使用する）				
参考文献	佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年 マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房、2013年 吉田正幸ほか著『次世代の保育のかたち』 フレーベル館、2010年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども政策特論
担 当 者	渡邊 英則
事前、あるいは並行して学 ぶべき内容	「子ども政策特論」の授業を履修するために、内閣府で開催されている子ども・子育て会議の資料や、認定こども園、幼稚園、保育園の制度や保育方法・内容について、ある程度理解しておくことが望ましい。
文献リスト	<p>①池本美香『失われる子育ての時間―少子化社会脱出への道』勁草書房、２００３年</p> <p>②仙田満『子どもとあそび―環境建築家の眼―』岩波新書、１９９２年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない―円熟した保育者になるために―（増補改訂版）』東京大学出版会、２０１４年</p> <p>④森上史朗編『幼児教育への招待―いま子どもと保育が面白い』ミネルヴァ書房、１９９８年</p> <p>⑤藤原和博『つなげる力』文春文庫、２０１０年</p> <p>⑥河合隼雄『Ｑ＆Ａこころの子育て―誕生から思春期までの４８章』朝日文庫、２００１年</p> <p>⑦高杉自子『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房、２００６年</p>
その他履修に 必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科 目 名	教育学特殊研究		副題		
担 当 者	生田 久美子				
開 講 期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	これまで「教育」の世界では、「知識」と「技能」は独自の領域としてみなされ、教育実践もその解釈にのっとり、「知識教育」と「技能教育」は別個の教育として進められてきた。しかし、20世紀半ばから現在に至る「哲学」及び「認知科学」における研究は人間の「知識」が「技能」を含みこむ事象であることを解き明かしている。本講では、学部で学修した教員養成に関わる必修科目である「教育原理」を基礎にして、人間の営みとしての「教育」という行為が一体何かを、「知識」と「技能」の関係性を深く吟味することを通して、さらに考察を深めていく。上記の考察の手掛かりとして、『「わざ」から知る』を講読する。				
授業のねらい・到達目標	1. 教育における「知識」と「技能」とは何かを理解する。 2. 「知識教育」と「技能教育」の関係性について理解する。 3. 教育という営みを「知識」と「技能」の関係性を踏まえて、捉え直すことができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション：「教育学特殊研究」で目指すこと				
2	人間における「知識」とは何か				
3	人間における「技能」とは何か				
4	「知識教育」と「技能教育」はどのように理解及び実践されてきたか				
5	従来の教育における「知識」と「技能」についての捉え方の問題性を探る				
6	「技能」の教育実践から「知識」と「技能」の関係性を考える				
7	「知識」の教育実践から「知識」と「技能」の関係性を考える				
8	『「わざ」から知る』を読み、そこから教育における「知識」と「技能」の関係性を探る				
9	『「わざ」から知る』の輪読①－「わざ」の習得とは何を修得することか				
10	『「わざ」から知る』の輪読②－「形」より入りて「形」より出る				
11	『「わざ」から知る』の輪読③－「わざ」の世界への潜入				
12	『「わざ」から知る』の輪読④－「わざ」言語の役割				
13	『「わざ」から知る』の輪読⑤－「わざ」から見た「知識」				
14	教育という営みを、「知識」と「技能」の関係性の観点からあらためて考える				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	生田久美子 『「わざ」から知る』 東京大学出版会 2007 生田久美子、北村勝朗編著、『わざ言語―感覚の共有を通しての学びへ』、慶応義塾大学出版会、2011年				
参考文献	西岡常一 『木のいのち木のころ(天)』、草思社、1993年 小川三夫 『木のいのち木のころ(地)』、草思社、1993年 J. レイブ&E. ウェンガー 1991 “Situated Learning：Legitimate peripheral participation”. Cambridge University Press. [佐伯胖（訳）『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993年] I. シェフラー 1979 “Conditions of Knowledge”. Chicago University Press.				

【予備学習ガイド】

科 目 名	教育学特殊研究
担 当 者	生田 久美子
事前、あるいは並行して学 ぶべき内容	「教育学特殊研究」の授業を履修するために、「教育学」の基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①藤田英典 『教育学入門（子どもと教育）』、岩波書店、1997年</p> <p>②村井実 『教育学入門 上下』、講談社、1983年</p> <p>③中内敏夫 『教育学第一歩』、岩波書店、1988年</p> <p>④田中・今井 『キーワード 現代の教育学』、東京大学出版会、2009年</p> <p>⑤プラトン著、藤沢訳『国家』、岩波書店、1979年</p> <p>⑥J. ルソー著、今野訳『エミール』、岩波書店、1962年</p> <p>⑦I. シェフラー著、村井実監訳、生田他訳『教育のことば—その哲学的分析』、東洋館出版社、1981年</p>
その他履修に 必要な学習	現代社会における「教育」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科 目 名	子ども環境学特論		副題		
担 当 者	仙田 考				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	子ども環境学とは何か ― 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは				
2	子どものあそび環境 ― 時間、空間、集団、方法～遊環構造				
3	子どものための安全環境 ― あそび環境におけるリスクとハザード				
4	子どもと保育環境（１） ― 幼稚園、保育園、認定こども園の園舎環境				
5	子どもと保育環境（２） ― 幼稚園、保育園、認定こども園の園庭環境				
6	子どもと学校環境 ― 小学校環境と幼保小連携の可能性				
7	子どもの感性を育む環境 ― 保育実践におけるアート、表現と環境				
8	子どもと癒しの環境 ― 自然等の癒し環境				
9	障害を持つ子どもと環境 ― 障害を持つ子どもの支援環境				
10	子どもの地域施設環境 ― 園外保育施設の環境				
11	子どもと環境学習 ― 環境への気づきから持続発展教育へ				
12	子どものための都市・街づくり ― 子どもにやさしい街の在り方に向けて				
13	幼児教育施設等の視察（１） ― 認定こども園：園舎、園庭				
14	幼児教育施設等の視察（２） ― 幼稚園：園舎				
15	幼児教育施設等の視察（３） ― 幼稚園：園庭遊具、ビオトープ				
期末					
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	各授業での発表（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。				
事前・事後学習の内容	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。				
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。				
テキスト	特に使用せず。				
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザインの展開』鹿島出版会、2002年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	子ども環境学特論
担 当 者	仙田 考
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども環境学特論」の講義履修に際し、子どもの環境についての関連文献を読み、理解を深めること。
文献リスト	<p>①仙田満「子どもとあそび」岩波新書 1992年</p> <p>②仙田満「こどものあそび環境」鹿島出版会 2009年</p> <p>③仙田満「幼児のための環境デザイン」世界文化社 2003年</p> <p>④仙田満「環境デザインの方法」彰国社 1998年</p> <p>⑤仙田満「環境デザインの展開」鹿島出版会 2002年</p> <p>⑥森上史朗編著「これからの保育環境づくり」世界文化社 1999年</p> <p>⑦住宅総合研究財団住教育委員会編著「まちはこどものワンダーランド」風土社</p> <p>⑧英国教育科学省編 IPA日本支部訳「アウトドアクラスルーム」公害対策技術同友会 1994年</p> <p>⑨吉永元孝ほか編「園芸療法のすすめ」創森社 1998年</p> <p>⑩門脇厚司「子どもの社会力」岩波新書 1999年</p>
その他履修に必要な学習	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。

科 目 名	発達心理学特論		副題		
担 当 者	大島 みずき				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	人間を理解するための一つの領域として、人の心の発達について取り上げる。特に人間の基盤を作る重要な時期である幼児期から児童期を中心とした心の発達に着目する。授業は学生の発表と、それに基づくディスカッションからなる。主に国内外の最新の発達心理学に関する研究論文を授業のテーマごとに担当の学生が発表し、それに対するディスカッションを担当教員を含めた受講者全員で行う。その際、発達心理学の研究がどのような形で実践に生きるかについても話し合い、検討していく。				
授業のねらい・到達目標	1. 心の発達に関わる様々な要因を理解し、教育の専門家として、新旧通した発達心理学についての深い学識を身につける。 2. 授業の中で、担当学生が発達心理学の最新の研究についての文献を発表し、研究論文を読む力を獲得する。 3. 紹介される論文を全員でディスカッションすることを通し、クリティカルに物事を捉える視点を獲得する。 4. 発達についての考え方や知識を保育・教育現場で自ら応用できる力を獲得する。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション(授業の進め方)				
2	心理学論文の読み方について				
3	論文の検索方法				
4	乳児期についての論文(愛着)の発表とディスカッション				
5	幼児期についての論文(認知)の発表とディスカッション				
6	幼児期についての論文(向社会的行動)の発表とディスカッション				
7	幼児期についての論文(社会的問題解決)の発表とディスカッション				
8	幼児期についての論文(仲間関係)の発表とディスカッション				
9	幼児期・児童期についての論文(小学校への移行)の発表とディスカッション				
10	児童期についての論文(認知)の発表とディスカッション				
11	児童期についての論文(仲間関係)の発表とディスカッション				
12	青年期についての論文の発表とディスカッション				
13	発達障害についての論文の発表とディスカッション				
14	保育者・教師と子どもの関係についての論文の発表とディスカッション				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	授業内での発表（50%）、及び課題の提出（50%）に基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	担当となる論文は熟読の上、発表の為の資料を作成すること。発表の担当ではない場合は、発表されるテーマについての発達心理学の基礎的な知識を事前に確認してから授業に望むこと。				
履修上の注意	発達心理学の基礎的な知識を持って授業に望むこと。授業内では積極的に発言することを求める。				
テキスト	特に使用せず。				
参考文献	H. R. シャファール 『子どもの養育に心理学がいえること』 新曜社 2007年 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎(編)『原著で学ぶ社会性の発達』ナカニシヤ出版 2008年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	発達心理学特論
担 当 者	大島 みずき
事前、あるいは並行して学 ぶべき内容	発達心理学，特に乳幼児期の心理の発達にいての基礎的な知識を学習しておく必要がある。また，心理学論文を読む為の統計についての基礎的な知識も，授業に並行して身につけていくことが望ましい。
文献リスト	<p>①鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤 『心理学マニュアル 質問紙法』 北大路書房 1998年</p> <p>②J. B. クーパーシュミット・K. A. ダッジ 『「子どもの仲間関係」発達から援助へ』 北大路書房 2013年</p> <p>③中澤潤・大野木裕明・南博文 『心理学マニュアル 観察法』 北大路書房 1997年</p> <p>④H. R. シャファー 『子どもの養育に心理学がいえること』 新曜社 2007年</p> <p>⑤杉村伸一郎・坂田陽子(編)『実験で学ぶ発達心理学』 新曜社 2004年</p> <p>⑥渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎(編)『原著で学ぶ社会性の発達』ナカニシヤ出版 2008年</p> <p>⑦山田剛史・村井潤一郎 『よくわかる心理統計』 ミネルヴァ書房 2004年</p>
その他履修に 必要な学習	

科 目 名	保育・教育課程研究		副題		
担 当 者	宮里 暁美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく循環のプロセス等について、事例やDVDを通して検討する。また、子どもとの対話的な関係の中から「学びの経験（履歴）」を編み出していくために必要な視点について、文献と実践を通して検討する。さらに、国内外の特色のある保育・教育課程について分担して調べ発表する。その内容を検討し、特色や相違点、共通点を整理する。また、グループディスカッションや全体討議の場面を多く設定し、学びを深めていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントについて整理する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。				
授業の方法・授業計画					
1	講義	保育の基本と計画：カリキュラムとは何か			
2	講義	保育の基本と計画：保育・教育課程の意義			
3	講義	保育の基本と計画：遊びの中の学びを捉える			
4	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討① 心身の健康に関する姿から			
5	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討② 人とのかかわる姿から			
6	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討③ 身近な環境にかかわる姿から			
7	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討④ 言葉のやりとりから			
8	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討⑤ 表現する姿から			
9	討議	循環のプロセスを支える教師の援助と環境の在り方について			
10	討議	循環のプロセスを生み出す保育・教育課程の編成について			
11	発表	国内の特色ある保育・教育課程			
12	発表	国外の特色ある保育・教育課程			
13	討議	様々な保育・教育課程の違いと共通点から見えたこと			
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について			
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート後日提出）			
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40％ 資料準備及び提案内容：30％ 課題レポート：30％				
事前・事後学習の内容	事前：特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	河邊貴子・赤石元子監修、東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編集『今日から明日へつながる保育―体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論―』萌文書林, 2009年 大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編著『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店, 2008年				
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館, 2008年、友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園編著『幼稚園で育つ―自由保育のおくりもの』ミネルヴァ書房, 2002年				

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育・教育課程研究
担 当 者	宮里 暁美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育・教育課程研究」の授業を履修するために、保育学や保育実践にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①津守真・浜口順子編『新しく生きる―津守真と保育を語る―』フレーベル館，2009年</p> <p>②津守真『私が保育を志した頃』ななみ書房，2012年</p> <p>④津守真『保育の現在―学びの友と語る―』萌文書林，2013年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑥荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび1 まなびを学ぶ』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑦荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび2 場づくりとしてのまなび』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑧荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび3 まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑨深澤直人『デザインの輪郭』TOTO出版，2008年</p> <p>⑩室田一樹『保育の場に子どもが自分を開くとき』ミネルヴァ書房，2013年</p> <p>⑪宮里暁美『子どもたちの四季』主婦の友社，2013年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題を把握するとともに、様々な保育実践の実際について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。